松本市文化財調査報告　No.94

MIYANOMAE

松本市宮の前遺跡

―緊急発掘調査報告書―

1992・3

松本市教育委員会

MIYANOMAE

松本市宮の前遺跡

―緊急発掘調査報告書―

1992・3

松本市教育委員会

序

松本市の北部に位置する岡田地区に多くの埋蔵文化財が存在していることは、過去の調査から知られておりました。この度、県営ほ場整備事業が当地で実施されることになり、宮の前遺跡を含む地域もその対象地となりました。そこで文化財の保護を図るため、松本市が長野県松本地方事務所より委託を受け、松本市教育委員会が発掘調査を実施し、遺跡の記録保存を行うこととなりました。

発掘調査は市教育委員会によって組織された調査団により、平成2年11月から翌3年2月にわたって行われました。厳寒期の発掘作業は降雪や凍結に悩まされましたが、参加者の皆さまの並々ならぬご尽力により無事遂行することができました。その結果、奈良時代から平安時代にかけての住居址31軒、建物址5棟、土師器焼成坑など数多くの遺構と、該期の遺物を多数発見するなど、多大な成果を収めることができました。これらは今後地域の歴史を解明していく上で活用される資料になることと思います。

私たちの暮らしを豊かにするための開発のかげで、ふるさとの文化財が失われていくのが昨今の現状です。本書が文化財保護へのご理解につながることになれば、このうえなく幸いに存じます。

最後になりましたが、苛酷な状況のなか発掘作業にご協力頂いた参加者の皆さま、また調査にあたりまして、多大なご理解を頂いた女鳥羽川土地改良区、地元関係者の皆さまに心より感謝申し上げます。

平成4年3月

松本市教育委員会　教育長　松村　好雄

例　言

1．本書は平成２年11月８日から平成３年２月６日にかけて行われた宮の前遺跡の緊急発掘調査報告書である。

2．本調査は平成２年度県営ほ場整備事業に伴う発掘調査であり、松本市が長野県松本地方事務所より委託を受け、松本市教育委員会が行ったものである。

3．本書の執筆は、第１章：事務局、第３章３節１：直井雅尚、２：竹内靖長、３：三村竜一、その他の項目を関沢　聡が担当した。

4．本書作成にあたっての作業分担と協力者は次の通りである。

遺物復原：五十嵐周子・内田和子

遺物実測・トレース：伊丹早苗・久根下三枝子・松尾明恵・三村孝子・三村竜一・横山真理

遺構図整理・一覧表作成：石合英子

遺構図トレース：開鳴八重子

図版作成：石合英子・林　和子

写真撮影：宮嶋洋一（遺物）、関沢　聡（遺構）

5．石器の石材鑑定は森義直氏のご教示によるものである。

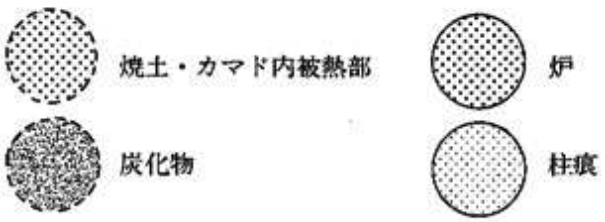
6．本書の作成にあたっては川上　元・倉沢正幸（上田市立信濃国分寺資料館）、山田真一（豊科町教育委員会）の諸氏より多大なご教示、ご協力をいただいた。

7．本書の中で使用した遺構名の省略語は次の通りである。

竪穴式住居址→住、掘立柱建物址→建、竪穴状遺構→竪、溝址→溝

使用例　第８号住居址→８住、第４号建物址→４建、第２号竪穴状遺構→２竪、第１号溝址→１溝など

8．本書の中で使用した遺構の細部表現は次の通りである。



9．本調査に関する出土遺物及び測量・実測図類は松本市教育委員会が保管している。

目　次

序
例言
目次

第1章　調査経過
　第1節　文書記録 …… 3
　第2節　調査体制 …… 3

第2章　遺跡の環境
　第1節　地理的環境 …… 4
　第2節　歴史的環境 …… 5

第3章　調査結果
　第1節　調査の概要 …… 6
　第2節　遺構
　　1．住居址 …… 7　　2．建物址 …… 14
　　3．竪穴状遺構 …… 15　　4．溝址 …… 16
　　5．土坑・ピット …… 18
　第3節　遺物
　　1．土器・陶器 …… 19　　2．硯 …… 26
　　3．瓦 …… 26　　4．土製品 …… 27
　　5．金属製品 …… 28　　6．石器 …… 29

第4章　調査のまとめ
　　1．大形建造物について …… 30　　2．集落の変遷について …… 32

第5章　結語 …… 35

図 目 次

第1図　遺跡の位置 …… 40
第2図　調査範囲 …… 41
第3図　周辺遺跡 …… 42
第4図　全体図 …… 44
第5図　第1号住居址 …… 46
第6図　第4・5号住居址 …… 47
第7図　第2号住居址(1) …… 48
第8図　第2(2)・3号住居址 …… 49
第9図　第6号住居址 …… 50
第10図　第7・8号住居址 …… 51
第11図　第9・13号住居址 …… 52
第12図　第10号住居址 …… 53
第13図　第11・12号住居址 …… 54
第14図　第15号住居址 …… 55
第15図　第14号住居址(1) …… 56
第16図　第14号住居址(2) …… 57
第17図　第16・17号住居址 …… 58
第18図　第18・19号住居址 …… 59
第19図　第20・22号住居址 …… 60
第20図　第21号住居址 …… 61
第21図　第23・24号住居址 …… 62
第22図　第25・29号住居址 …… 63
第23図　第26・28号住居址 …… 64
第24図　第27・30号住居址 …… 65
第25図　第31号住居址 …… 66
第26図　第1号建物址 …… 67
第27図　第2・3号建物址 …… 68
第28図　第5号建物址 …… 69
第29図　第4号建物址(1) …… 70
第30図　第4号建物址(2) …… 71
第31図　竪穴状遺構 …… 72
第32図　溝址土層 …… 73
第33図　土坑(1) …… 74
〃　〃
第36図　土坑(4) …… 77
第37図　土器(1) …… 78
〃　〃
第68図　土器(32) …… 109
第69図　硯・瓦(1) …… 110
第70図　瓦(2) …… 111
第71図　土製品・金属製品 …… 112
第72図　石器 …… 113

挿 図 目 次

挿図1　基本土層 …… 4
挿図2　大形住居址の構造 …… 30
挿図3　建物址の規模 …… 31
挿図4　集落の変遷 …… 34

表 目 次

表1　住居址一覧表 …… 36
表2　建物址一覧表 …… 38

第１章　調査経過

第１節　文書記録

平成元年	9月29日	埋蔵文化財保護協議を市役所及び現地にて実施。出席者は長野県教育委員会、松本地方事務所、松本市教育委員会。
	11月9日	平成２年度補助事業計画書提出。
平成２年	4月4日	平成２年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金内定。 平成２年度文化財保護事業補助金（県費）内示。
	5月10日	平成２年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）交付申請書提出。 平成２年度県営ほ場整備事業岡田地区宮の前遺跡埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約を結ぶ。
	7月24日	平成２年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）交付決定通知。
	8月10日	平成２年度文化財保護事業補助金（県費）交付申請書提出。
	9月12日	平成３年度埋蔵文化財保護協議を市役所及び現地にて実施。出席者は長野県教育委員会、松本地方事務所、松本市教育委員会。
	10月8日	宮の前遺跡埋蔵文化財発掘調査の通知提出。
	10月12日	平成２年度文化財保護事業補助金（県費）交付決定通知。
	10月15日	平成３年度補助事業計画書提出。
	11月5日	平成２年度文化財保護事業補助金変更承認申請書提出。 平成２年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金計画変更申請書提出（増額）。
平成３年	2月22日	宮の前遺跡埋蔵文化財拾得届及び同保管証提出。 宮の前遺跡埋蔵文化財発掘調査終了届（通知）提出。
	2月26日	平成２年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金計画変更決定並びに補助金の増額通知。
	3月12日	宮の前遺跡埋蔵物の文化財認定通知。
	3月15日	平成２年度文化財保護事業補助金変更交付決定通知。
	3月31日	平成２年度文化財保護事業補助金確定通知。
	4月10日	平成２年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金確定通知。
	10月9日	平成３年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金内定。
	10月15日	平成３年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）交付申請書提出。
	11月1日	平成３年度文化財保護事業補助金（県費）内示。
	11月20日	平成３年度文化財保護事業補助金（県費）交付申請書提出。
	12月27日	平成３年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）交付決定通知。
平成４年	1月23日	平成３年度文化財保護事業補助金（県費）交付決定通知。

第２節　調査体制

平成２年度（発掘調査）

調査団長　松村好雄（教育長）　調査担当者　関沢　聡（社会教育課）　調査員　横田作重（考古学）

発掘参加者　相沢トクエ、相沢政登、赤羽育代、赤羽包子、赤羽すゑみ、芦田今朝子、因幡美津子、内山　緑、大久保棟子、大久保幸子、大沢真二、太田千尋、大塚袈裟六、大箭明美、岡村行夫、開鳴八重子、上條益子、北沢清治、久根下三枝子、粂井まさ、桑山智子、小岩井美代子、輿　定夫、小林徳子、小林本子、坂下　繁、佐々木義次、下里米子、下里みつへ、鈴木なつ江、瀬川長広、塚田つた江、塚田文子、鶴川　登、寺島貞友、所　園子、中島千矢子、中島治香、中島典昭、中島好子、中條光子、中條基世、中村恵子、中村嵩、中村文一、橋本安子、中崎助治、林　昭雄、平林　薫、深井美登利、深井美代恵、藤井マツエ、藤井久子、藤井源吾、藤本嘉平、藤本利子、古畑　実、本沢　香、牧　久雄、松尾大輔、真々部まさ子、三浦節子、宮川須啓、宮沢　毅、百瀬一子、百瀬清子、百瀬雄代、百瀬二三子、百瀬義友、百瀬　亘、矢崎寛子、矢沢うめ子、矢島利保、山田和也、山口幸子、横山恒雄、吉江孝子、米山貞興

事務局　荒井　寛（社会教育課長）、田口　勝（課長補佐）、熊谷康治（課係長）、直井雅尚（主事）、関沢　聡（主事）、木下　守（主事）、竹内靖長（主事）、久保田剛（事務員）、荒井由美、山岸弥生

第２章　遺跡の環境

第１節　地理的環境

１．位置と地形（第１・２図）

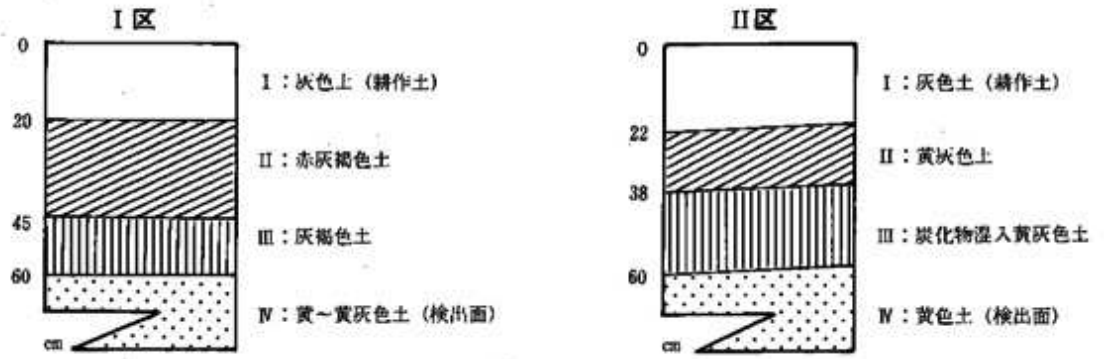
宮の前遺跡は松本市大字岡田下岡田に位置する。岡田地区は松本市の北部に位置し、城山山塊（の東側）と、女鳥羽川の右（西）岸に展開する河岸段丘上の南向き緩斜面からなる。女鳥羽川は三才山峠・武石峠方面から流れだし、稲倉で流路を南へ転じた後、松本市街地の中を南下する。城山山塊と筑摩山脈の支脈がせまるこの地区は古代から交通の要所であった。現在、女鳥羽川の右岸に沿って国道254号線が走り、上田市・丸子町方面へ通じている。また、その西側には四賀村方面へ抜ける国道143号線がある。岡田地区の中心部にあたる岡田町はこの２本の国道に挟まれた河岸段丘沿いに南北に集落が展開し、その東西は水田地帯となっている。近年、この水田地帯はほ場整備事業が進められており、今回の調査もその一環によるものである。

今回の調査地は岡田神社と国道143号線を結ぶ参道の北側に位置する、海抜高674～687ｍの水田地帯である。立地的には北（高）－南（低）、西（高）－東（低）に傾斜する丘陵斜面である。西側は大門沢川が南流し、さらにその西は岡田神社が鎮座する丘陵の急斜面が続くため、遺跡の西限は大門沢川より東と推定できる。東側は国道周辺がいちばん低くなり、さらに東は現在の岡田町集落が乗る河岸段丘にむかってゆるい登り傾斜の地形を呈している。

２．基本土層

Ⅰ・Ⅱ区は約42ｍ離れており、土層堆積の状況はわずかに異なるが、いずれも現地表面から約60㎝下で遺構検出面が認められた。各区の基本土層は下図のとおりである。

Ⅰ・Ⅱ区ともⅠ～Ⅲ層は礫をほとんど含まない安定した堆積状況を呈している。Ⅰ区のⅣ層（遺構検出面）は調査区中央では礫をほとんど混じえないが、東・西側周辺では多量の礫を混入している。このうち、西側の礫については大門沢川の氾濫によるものである。東側についても過去の河川の影響によるものと考えられる。なお、Ⅰ区では各土層ともわずかに粘性を帯びていた。Ⅱ区のⅣ層（遺構検出面）は調査区の西側でかなり粘性を帯び、一部で灰白色粘土が地山中に認められた。



挿図１　基本土層

第2節　歴史的環境

岡田地区では古くから考古資料の出土紹介や古窯址群の発掘調査が行われている。近年では松本市教委によっていくつかの遺跡で緊急発掘調査が実施されている。周辺遺跡については、これらの発掘調査報告書の中で既述されてきた（第3図）。

宮の前遺跡は奈良・平安時代の集落遺跡であるが、当地区ではここ数年来、該期の集落遺跡の発掘調査が行われている。本遺跡の東南東約380mに位置する西裏遺跡では、6次にわたる発掘調査で、奈良・平安時代の竪穴式住居58軒が見つかっている。また、該期の土師器焼成坑が約60基見つかっており、当遺跡で窯業生産が行われていたことが推定されている。また、昨年調査が実施された二反田遺跡・岡田町遺跡（A～D区）は西裏遺跡の北側に続く該期の集落遺跡で、竪穴式住居109軒・掘立柱建物26棟が見つかっている。また、これらの遺跡内を南流する溝内からは瓦や円面硯等の特殊な遺物が出土している。また、岡田伊深と浅地区にまたがる塩幸遺跡でも古墳時代後期末から平安時代にかけての竪穴式住居12軒・掘立柱建物13棟が見つかっている。このほかに、宮の上遺跡・トウコン原遺跡などで平安時代の集落の一端が捉えられている。

奈良・平安時代の当地区の歴史復原については、これらの集落遺跡とともに、その背後の山中に分布する古窯址群、東山道ルート等を含めた広い視点で分析しなければならない。しかし、現時点では、出土資料は資料整理の段階にあり、未報告のものが多い。また、当地区内の発掘調査は今後も予定されているので、周辺遺跡から歴史環境を復原することは今後の課題とし、新資料の報告後に改めて述べたい。

岡田地区の考古学関係の文献

原嘉藤　「田溝池出土の銅鏃」『信濃』II－17－7　1942
河西清光・中島豊晴・豊科高校地歴クラブ　「松本市岡田田溝第1号古窯址の調査」　『長野県考古学会連絡紙』8　1963
河西清光・中島豊晴　「松本市田溝古窯址の調査」　『信濃』III－16－4　1964
河西清光　「長野県松本市田溝中の沢古窯址の調査－第8・24号古窯址発掘略報」　『信濃』III－17－9　1965
河西清光　「松本市北部に分布する古窯址群について」　『県学校科学奨励研究』5　1966
岡田史跡研究会　「郷土を知ろう－岡田田溝地域における古窯発掘とその考察」　『松本市公民館報』45　1969
遠部慈麻呂　「長野県松本市岡田地区田溝池における須恵器窯跡の調査」　『信濃』III－21－12　1969
東筑摩郡・松本市・塩尻市郷土資料編纂会『東筑摩郡・松本市・塩尻市誌』　1973
宮下健司　「松本市岡田神社発見の有舌尖頭器」　『信濃考古』57　1980
松本市教育委員会　『松本市横田・岡田遺跡』　1981
松本市教育委員会　『松本市岡田西裏遺跡緊急発掘調査概報』　1984
松本市教育委員会　『松本市蓮台遺跡』　1986
松本市教育委員会　『松本市岡田西裏遺跡』　1986
松本市教育委員会　『松本市杵坂遺跡・松本市本郷小学校敷地遺跡』　1988
松本市教育委員会　『松本市トウコン原遺跡』　1991

第３章　調査結果

第１節　調査の概要

今回の調査地は松本市大字岡田下岡田91～167番地一帯にあたる。県営ほ場整備対象区は約34220㎡である。調査区は、試掘グリッド・トレンチの成果をもとに、ほ場整備工区の中央にⅠ地区、岡田神社参道の北側に接してⅡ地区を設定した。調査面積はⅠ地区が3050㎡、Ⅱ地区が448㎡である。

調査にあたっては重機を使用して耕作土を除去している。また、任意の基準点を設け、磁北を基軸として調査区内を１辺３ｍの方眼で区画設定し、測量を行った。なお、遺構全体図（第４図）のＮ・Ｓ・Ｅ・Ｗは方位を表し、数字は基準点からの距離（ｍ）を表している。

調査の概要は以下の通りである。

遺　構

竪穴式住居址31、掘立柱建物址５、竪穴状遺構２、溝址14、土坑53、ピット536

このうち竪穴式住居址には１辺７ｍ以上の大形住居が３軒あり、特異な壁構造を有していた。また、掘立柱建物址には東西に隣接する大形建物２棟（５間×２間、４間×２間）があり、東側のものは２面庇がつく特異な建物址であった。土坑では土師器の焼成坑１基が見つかっている。

遺構の分布状況から、遺跡は調査区外に及ぶことが判明したが、遺跡の範囲を確認することはできなかった。なお、溝・土坑の一部、ピットの大半は掘り下げを実施していない。また、Ⅰ区の中央部で攪乱等のため調査ができなかった部分がある。

遺　物

土師器・須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器・山茶碗・円面硯・瓦・土製品（紡錘車・羽口他）・鉄器（鉄鏃・苧引鉄他）・砥石

これらのほとんどは上記の遺構から出土している。特徴的な遺物として円面硯４点がある。このうち２点は大形住居址からの出土である。また、瓦は土師質の粗製・小形品で、器面にハケメ調整が認められる特異なものである。特に、第10号住居址の床面からは数枚の瓦が重ねて置かれた状況で出土している。さらに、近接する第34号土坑からは軒丸瓦１点が出土している。

このほかに、検出面からは縄文土器・打製石斧・黒曜石剥片・磨製石鏃が出土している。

成　果

宮の前遺跡は、遺構から出土した遺物の時期から、奈良時代から平安時代にかけての集落遺跡と考えられる。しかし、２面庇を伴う大形の掘立柱建物址・大形竪穴式住居・土師器焼成坑の存在や瓦・円面硯の出土は、本遺跡が通常の集落遺跡とは異なる性格を有していたことが想定される。なお、Ⅱ区東南端の第31号住居址は鎌倉～室町時代に属することから、該期の集落遺跡が南東側に展開していた可能性がある。

第2節　遺　　構

1．住居址

第1号住居址（第5図）

Ⅰ区の南西、S3～N3・W5～12に位置する。規模は5.1×4.8mで、隅丸方形を呈する。黄褐色土の床面は堅くしまっており、西壁南半～南壁～東壁にかけて周溝がある。ピットは10個が検出されているが、このうちP_1～P_4が主柱穴を構成する。カマドは西壁中央に位置する。焼土内に被熱した河原石（袖石）数個が散乱しており石組カマドであったと考えられる。なお、カマド周辺と住居北西部の床面には顕著な焼土面が確認できた。遺物は土師器・須恵器・鞴の羽口があり、特に住居西半とカマド周辺に多く分布している。本址の時期は奈良時代前半（8世紀前半）と推定される。

第2号住居址（第7・8図）

Ⅰ区の中央南寄り、S8～N1・E14～24に位置する。規模7.6×7.5mで、隅丸方形を呈する大形住居である。黄色土の床面は堅くしまっているが、西側では礫混りの地山を壁にしている。四辺に周溝が認められるが、特に西～南壁は2重に巡っている。ピットは16個が検出されているが、このうちP_1～P_4が主柱穴を構成する。東壁中央に位置する石組カマドは、袖石が良く残存していたほか、奥壁の下側にも貼石がみられた。煙道は東辺に対して南東に斜行して160cmが認められる。また、床面中央には炉があり、その南側には焼土面が認められる。遺物は土師器・須恵器があるが、覆土から床面にかけての遺物は少ない。なお、覆土中から円面硯の硯部破片1点が出土している。本址の時期は奈良時代末～平安時代初頭（8世紀末～9世紀初頭）と推定される。

第3号住居址（第8図）

Ⅰ区の南東、S9～14・E25～31に位置する。北東隅を4住に切られるが、規模4.5×3.6mで、隅丸方形を呈する。床面は北西部で礫が混じる黄色土で、炭化材が多く認められる。ピットは北半部で2個検出されている。カマドは東壁中央に位置している。カマド内に礫がないことから、粘土カマドの可能性がある。なお、床面に15cm大礫が数個散乱していた。遺物は非常に少ないが、床面中央で須恵器の坏、カマド内で土師器の甕が出土している。本址の時期は奈良時代（8世紀代）と推定される。

第4号住居址（第6図）

Ⅰ区の南東、S6～12・E29～35に位置する。3住より新。規模は4.5×4.2mで、東辺がやや外に膨らむ不整な隅丸方形を呈する。床面は礫混じりの黄色土で、堅くしまっている。ピットは9個あるが、柱穴に該当するものはない。なお、P_1は炭化物混入の焼土が覆土なので、カマドに伴う灰

捨て場の可能性がある。カマドは東壁中央に位置し、外側に50cm程張り出している。地山を一部成形した粘土カマドと考えられる。また、西壁際南寄りに直径40cm大の偏平な河原石が床面に置かれている。遺物は土師器・須恵器があり、その多くはカマド周辺の床面から出土している。本址の時期は奈良時代（８世紀代）と推定される。

第５号住居址（第６図）

Ｉ区の中央東寄り、Ｎ４～９・Ｅ29～34に位置する。５建・８溝より新、７溝より古。規模は3.4×3.2mで、方形を呈する。床面は黄色土で堅くしまっている。ピットは２個が検出されている。カマドは東壁中央に位置している。カマド内部に袖石等はみられないが、住居中央からカマド周辺にかけて大形の河原石20数個が散乱していることから、石組カマドが廃絶時に破壊されたものと考えられる。遺物は床面からの出土はなく、覆土から土師器（坏）・灰釉陶器（碗）が少量出土したのみである。本址の時期は平安時代中頃（10世紀後半～11世紀中頃）と推定される。

第６号住居址（第９図）

Ｉ区の北東、Ｎ11～21・Ｅ27～37に位置する。４建より新、21住より古。規模は7.4×7.1mで、長方形を呈する大形住居である。床面は黄色土である。周溝は部分的に断続するが、ほぼ全周している。ピットは44個確認できたが、これらはいくつかに分類される。まず、P_1～P_{11}・P_{13}・P_{15}～P_{17}は住居の壁に沿って等間隔に掘られている。これらは四隅を共有するかたちで、北・東・南壁は１辺につき５個、西壁は４個の配置関係にある。住居の壁を作るための施設と考えられる。なお、P_{12}・P_{14}・P_{40}・P_{44}・P_{24}も補助的な役割をもったピットの可能性がある。次に、P_{21}・P_{36}・P_{33}・P_{41}は主柱穴、P_{18}・P_{20}・P_{31}・P_{32}は補助柱穴と考えられる。また、P_{34}・P_{39}は炭化物と多量の焼土を混入する暗灰色土を覆土にもつ浅いピットで、カマドに伴う灰捨て場と考えられる。これら以外のピットについては、性格が特定できない。カマドは西壁中央に位置している。煙道は104cm程が認められる。カマド南側で袖石の抜取り痕と考えられる小ピットが認められることから石組カマドと考えられる。また、２住と同じく住居中央で炉が確認されている。遺物は土師器・須恵器が床面から覆土中にかけて出土している。本址の時期は奈良時代前半（８世紀前半）と推定される。

第７号住居址（第10図）

Ｉ区の北端東寄り、Ｎ27～31・Ｅ29～36に位置する。６溝より新。区域外にかかるため南側1/3が確認できただけだが、１辺5.7mの方形住居と考えられる。床面は礫混じりの黄色土で、堅くしまっている。ピットは８個あるが、P_1・P_4は主柱穴の可能性がある。カマドは区域外にかかるため不明である。遺物は須恵器（蓋・坏・甕）が出土している。本址の時期は奈良時代末～平安時代初頭（８世紀末～９世紀初頭）と推定される。

第８号住居址（第10図）

Ｉ区中央北寄り、N23～26・E22～25に位置する。14住に西側を切られる。１辺2.3mの方形を呈する小形住居である。床面は黄色土で、南・北壁で周溝の一部が認められる。ピットは１個が検出されている。カマドは不明である。なお、大形礫２個が床面上に置かれていた。遺物は床面から須恵器（蓋・坏）の小破片が出土したほか、覆土中から須恵器・土師器が少量出土している。本址の時期は14住との新旧関係から奈良時代前半と推定される。

第９号住居址（第11図）

Ｉ区中央北西寄り、N15～20・Ｅ４～９に位置する。規模は3.6×3.5mで、隅丸方形を呈する。床面は黄色土で、堅くしまっている。ピットは２個が検出されている。カマドは東壁中央に位置している。袖石がみられないので粘土カマドと考えるが、住居址北西隅から被熱礫が出土していることから石組カマドの可能性もある。遺物はカマド内から土師器の甕、カマドの西で須恵器の坏（逆位）、西壁際で土師器の坏が出土している。また、住居の東南隅で須恵器の坏２点が正位で出土しているが、うち１点の坏底部には蓋のつまみが置かれていた。他に、覆土から土師器・須恵器・瓦の破片が出土している。本址の時期は平安時代前期（９世紀中頃～後半）と推定される。

第10号住居址（第12図）

Ｉ区の北西、N16～21・Ｗ６～Ｅ１に位置する。１建・２溝より新。規模は4.8×4.1mで、隅丸長方形を呈する。床面は黄色土である。ピットは９個あり、P_1・P_3・P_7は柱穴の可能性をもつ。カマドは西壁中央に位置し、50cm程外に張り出すもので粘土カマドと考えられる。遺物はP_1内から完形の土師器の坏が逆位で、カマドの周辺からは土師器の甕、瓦が出土している。また、中央西寄りの床面から瓦が重なった状況で出土している。他に、土師器・須恵器・砥石が出土している。本址の時期は平安時代前期（９世紀後半）と推定される。

第11号住居址（第13図）

Ｉ区の北西、N17～22・Ｗ６～11に位置する。１建・12住より新、１溝より古。規模は4.1×4.0mで、方形を呈する。床面は黄色土で、堅くしまっている。ピットは９個が検出されたが、柱穴になるものはない。カマドは不明であるが、偏平な河原石が住居中央～東寄りに多くみられること、東側で焼土がみられたことから、東壁に石組カマドが構築されていたものと推定する。遺物は東側床面で土師器・須恵器が少量出土しているほか、南西隅から鉄器（苧引鉄）が出土している。本址の時期は特定できないが平安時代前期（９世紀代）と推定される。

第12号住居址（第13図）

Ⅰ区の北西、N13～18・W5～10に位置する。北辺が11住に切られる。規模は4.2×3.4mで、隅丸長方形を呈する。壁高は6cmで非常に浅い。床面は黄色土で堅くしまっている。ピットは6個が検出されているが、柱穴になるものはない。カマドは不明である。遺物は土師器・須恵器の破片が少量出土したのみである。本址の時期は平安時代前期（9世紀後半）と推定される。

第13号住居址（第11図）

Ⅰ区の北端中央、N26～31・E24～30に位置する。6溝の支流・30土坑（火葬墓）より古。北西部が区域外にかかるが、規模5.0×4.3mで、長方形を呈する。床面は黄色土で、北壁を除いて周溝が認められる。ピットは南西で1個が検出されている。カマドは西壁中央に位置している。礫はなかったが、袖石の抜取り痕があることから石組カマドが破壊されたものと考えられる。遺物はカマド内から土師器（小形甕）が出土しているほか、須恵器（蓋・坏）がある。本址の時期は奈良時代（8世紀代）と推定される。

第14号住居址（第15・16図）

Ⅰ区の中央北寄り、N20～31・E12～24に位置する。8・25・29住より新、22・23住より古。規模は10.1×8.5mで長方形を呈する、本遺跡で最大の住居である。床は礫混じりの黄色土で、西壁の北側が1段高く作り出されていた。ピットは14個が検出されている。このうちP_1～P_4が主柱穴で、主柱穴の中間に位置するP_8・P_{12}も補助柱穴になると考えられる。また、壁際に沿って巡る、偏平な河原石を用いた礎石34個が確認されている。床面中央には炉が認められる。さらに、主軸上で東側の梁間からやや壁よりの位置に焼土面が認められる。カマドは西壁中央に位置している。カマド内には被熱した大形の河原石3個が散乱していることから、石組カマドだったと考えられる。遺物は土師器・須恵器・鉄器がある。本址の時期は奈良時代前半（8世紀前半）と推定される。

第15号住居址（第14図）

Ⅰ区の北東、N17～23・E46～53に位置する。12土坑に南壁を切られている。規模は5.3×3.7mで不整な長方形を呈する。床面は礫混じりの黄褐色土である。ピットは11個が検出されているが、柱穴になるものは特定できない。このうち、P_1は粘土貯蔵穴で、床面から約10cm上まで黄灰色粘土が満たされていた。ちなみにピットを半割して出土した粘土の量は約12kgである。カマドは西壁中央に位置している。構造は不明であるが、床面に散乱している礫から石組カマドだった可能性がある。覆土中には多量の大・中形礫の廃棄が認められる。遺物は土師器・須恵器・灰釉陶器が出土している。本址の時期は平安時代前期（9世紀中頃）と推定される。

第16号住居址（第17図）

Ⅰ区の中央南端、S 9～15・E11～17に位置する。17住に切られているが、規模は4.8×4.5mで隅丸方形を呈する。床面は礫混じりの砂質黄色土である。ピットは主柱穴2個が検出されている。西壁中央に位置する石組カマドは、袖部の南側が大形河原石で作られているのに対し、北側は小形河原石数個を使用して作られている。遺物はカマド内から土師器の甕、須恵器の坏(完形)、カマドの南側からは須恵器の蓋が出土している。本址の時期は17住との新旧関係から、奈良時代前半（8世紀前半）と推定される。

第17号住居址（第17図）

Ⅰ区の中央南端、S 9～13・E11～20に位置する。16・18住より新、19住・32土坑より古。規模は4.7×4.7mで、方形を呈する。床面は礫混じりの黄色土である。ピットは6個が検出されているが、柱穴は不明である。カマドは西壁中央に位置する石組カマドで、焼土面に袖石等が散乱している。遺物は住居址の南側の床上7～20cmの覆土中から、多量の土師器・須恵器と瓦の破片が出土している。本址の時期は奈良時代前半（8世紀前半）と推定される。

第18号住居址（第18図）

Ⅰ区中央南寄り、S 7～9・E15～20に位置する。17・19住、32土坑より古。住居の北側がわずかに確認できただけで、北壁長4.2mの規模を有する。床面は黄色土である。ピットは1個が検出されている。カマドは不明である。遺物は床から覆土中にかけて土師器・須恵器が出土している。本址の時期は奈良時代（8世紀代）と推定される。

第19号住居址（第18図）

Ⅰ区中央南寄り、S 9～15・E16～23に位置する。17・18住より新、20住・32土坑より古。規模は5.1×4.4mで、長方形を呈する。床面は礫混じりの黄色土で、堅くしまっている。ピットは4個あるが、柱穴になるものはない。西壁中央に位置する石組カマドは、北側の袖石2個が残存していた。遺物はカマド内から土師器の甕1個体分のほか、土師器（坏・甕・甑）、須恵器（蓋・坏・壷類）が床面から出土している。本址の時期は平安時代前期（9世紀前～中頃）と推定される。

第20号住居址（第19図）

Ⅰ区中央南東、S11～16・E21～25に位置する。19住より新。規模は3.3×3.3mで、方形を呈する。床面は礫混じりの黄色土である。ピットは1個が検出されている。カマドは西壁中央に位置するが、残存壁高が浅いため構造は不明である。遺物はカマド内から土師器の甕が出土したほか、覆土から土師器・須恵器が少量出土している。本址の時期は不明である。

第21号住居址（第20図）

Ⅰ区の中央東寄り、N８～14・E24～30に位置する。６住・４建・５建より新。規模は4.5×4.3mで、方形を呈ずる。床面は黄色土で、堅くしまっている。ピットは12個が検出されているが、柱穴になるものはない。なお、P_{10}～P_{12}は覆土中に焼土・炭化物を含むことから、カマドの灰捨て場の可能性がある。石組カマドは西壁中央に位置する。南側の袖石は３個が残存しているが、北側の袖石は壊されていた。遺物はカマド内から土師器の甕、床面で須恵器の甕・横瓶が認められるほか、覆土中から土師器・須恵器の破片が出土している。また、住居中央の床上10～15cmの覆土中に礫が集中して投棄されていた。本址の時期は平安時代前期（９世紀中頃）と推定される。

第22号住居址（第19図）

Ⅰ区の中央北端、N28～32・E18～22に位置する。14・23住より新。北側は調査区外であるが、南壁長3.1mの規模を有する。床面は礫混じりの黄色土で、中央部が堅くしまっている。ピットは２個が検出されている。カマドは不明である。遺物は住居南西隅の床面から須恵器の短頸壺（完形）が出土しているほか、覆土中から土師器・須恵器の破片が出土している。本址の時期は平安時代前期（９世紀後半）と推定される。

第23号住居址（第21図）

Ⅰ区の中央北端、N23～32・E13～21に位置する。14住より新、22住より古。規模は7.1×6.8mで、長方形を呈する。本址は当初14住よりも古い遺構と考えて調査したため、14住と切り合っている部分の壁や覆土を掘り抜いてしまっている。そのため、カマドの焼土面の位置と第14号住居址の土層観察の結果から規模を推定している。床面は礫混じりの黄色土と、14住の覆土を床面とする部分がある。ピットは確認することができなかった。カマドは東壁中央に位置し、内部に被熱した河原石が散乱しているので石組カマドと考えられる。遺物のうち確実に本址に伴うものは、土師器の小形甕、須恵器の蓋だけである。また、14住・23住のいずれかに属する遺物には、須恵器（蓋・坏・甕・円面硯）、土製紡錘車がある。本址の時期は奈良時代後半以降（８世紀後半～）としか推定できない。

第24号住居址（第21図）

Ⅰ区の南東端、S７～９・E41～45に位置する。P350に南西隅で切られ、東側は調査区外である。西壁長3.7mの規模を有する。床面は礫混じりの砂質黄色土で、ピットは認められない。本遺跡のカマドの位置は東・西に限られることから、カマドは調査区外の東壁に位置すると考える。遺物は土師器・灰釉陶器が出土している。本址の時期は土器群が数時期にわたるため特定できない。

第25号住居址（第22図）

Ⅰ区の中央北寄り、N17～22・E13～19に位置する。29住より新、14住より古。北側は不明であるが、南壁長4.8mの規模を有する。床面は礫混じりの黄色土である。ピットは3個が検出されている。P_3の上面と東壁際の2ケ所で礎石様の偏平な河原石3個が認められる。カマドは不明である。遺物は土師器・須恵器が少量出土している。本址の時期は奈良時代（8世紀代）と推定される。

第26号住居址（第23図）

Ⅰ区の南端西寄り、S12～16・W4～E2に位置する。南側は調査区外になるが、北壁長4.3mの規模を有する。ピットは4個が検出されており、P_1・P_2は柱穴の可能性がある。粘土カマドは東壁中央に位置する。遺物はカマド周辺で土師器の坏2点、床面から土師器（甕）、鉄器（苧引鉄）が認められるほか、床面から覆土中にかけて土師器、須恵器が出土している。本址の時期は平安時代前期（9世紀中頃）と推定される。

第27号住居址（第24図）

Ⅰ区の南端西寄り、S12～15・W4～8に位置する。南側が調査区外になるが、北壁長3.9mの規模を有する。床面は西側でやや礫を混じえる黄色土である。ピットは認められない。カマドは不明である。東側の床面で幅1～2cm、最大長5cmの炭化した植物材が65cm×60cmの範囲で認められた。遺物は土師器・須恵器の小破片が出土している。本址の時期は不明である。

第28号住居址（第23図）

Ⅰ区の中央南西寄り、NS0～N7・W3～E4に位置する。3溝より古。規模6.1m×6.0mで、方形を呈する。床面は黄褐色土である。ピットは7個が検出されている。粘土カマドは西壁中央に位置する。床面から覆土にかけて土師器・須恵器の小破片が出土している。本址の時期は不明である。

第29号住居址（第22図）

Ⅰ区の中央北寄り、N18～22・E11～13に位置する。14・25住に北側と東側が切られ、西側は撹乱されていた。床面は礫混じりの黄色土である。ピットは4個が検出されている。壁沿いには周溝が認められる。カマドは不明である。遺物は床面から覆土中にかけて土師器・須恵器の小破片が出土している。本址の時期は不明である。

第30号住居址（第24図）

Ⅱ区の北東寄り、S67～74・W10～17に位置する。10溝より新、9・11溝より古。規模は4.9×4.8mで、方形を呈する。ピットは11個が検出されており、P_1・P_2・P_{11}は柱穴である。また、P_9は

覆土が焼土を多量に含む暗灰色土であることから、カマドの灰捨て場と考えられる。石組カマドは東壁中央に位置し、袖石２個が残存しているほかに、袖石の抜取り痕も認められる。遺物は覆土中から土師器、須恵器が出土している。本址の時期は奈良時代前半（８世紀前半）と推定される。

第31号住居址（第25図）

II区の中央東端、S93～100・W12～20に位置する。13溝より古。東側は調査区外になるが、西壁長5.2mの規模を有する。床面は黄色土で堅くしまっていて、鉄分の沈積が認められる。ピットは15個が検出されている。また、床面の中央南寄りに炉が認められる。遺物は床面から山茶碗と土師質土器（皿）が出土している。本址の時期は鎌倉時代～室町時代（14世紀以降）と推定される。

２．建物址

第１号建物址（第26図）

I区の北西寄りに位置する。２溝より新、１土坑、10～12住より古。３間×２間の側柱式で、9.5×5.4mの長方形を呈する。主軸方向はN－10°－Eである。柱間寸法は桁行2.2～4.0m、梁行2.6～2.8mで、桁側の北１間分の柱間寸法が他に比べて短いのが特徴である。柱穴は円形または楕円形を呈する。柱痕はP35～P37の土層断面で認められる。遺物の出土がなく、時期は不明である。

第２号建物址（第27図）

I区の中央西寄りに位置する。２間×１間の側柱式で、規模4.7×2.6mの長方形を呈する。主軸方向はN－71°－Wである。柱間寸法は桁行2.0～2.7m、梁行2.4～2.7mである。柱穴は円形を呈し、壁高は浅く、柱痕は認められない。遺物の出土がなく、時期は不明である。

第３号建物址（第27図）

I区の北東に位置する。２間×１間の側柱式で、規模4.5×2.9mの長方形を呈する。主軸方向はN－82°－Wである。柱間寸法は桁行2.1～2.3m、梁行2.5～2.9mである。柱穴が円形または楕円形を呈し、壁高は浅い。P27・P30の検出時に柱痕と考えられる暗褐色土が認められたが、土層断面では確認できなかった。遺物の出土がなく時期は不明である。

第４号建物址（第29・30図）

I区の中央東寄りに位置する。５・６・21住、７溝より古。主屋５間×２間の側柱式で、東と南側に庇をもつ。主軸方向はN－11°－Eである。主屋は規模10.7×5.7mの長方形を呈する。柱間寸法は桁行1.9～2.4m、梁行2.7～2.9mである。柱穴は方形を呈するものが多いが、円形・楕円形のものも認められる。壁高は46～70cmと深い。覆土（＝当時の埋土）は暗褐色土と黄灰色土がブロック

状・モザイク状に混じっているものが大半で、当時の地表面の腐植土と地山の黄色土がいっきに埋められたことが想定される。そのため、暗褐色土を呈する柱痕との区別は明瞭で、すべての柱穴で柱痕を確認することができた。2面の庇については、主屋に対応して東側5間・南側2間である。東側の庇は10.6×3.5mで、柱間寸法が1.8～2.4m、主屋との距離は3.4～3.5mである。柱穴は円形を呈する。南側の庇は1.5×5.3mで、柱間寸法は2.6～2.7m、主屋との距離は1.5mである。柱穴は円形または楕円形を呈する。庇を構成する柱穴は、主屋のそれに対して壁高が12～35cmと浅いが、いくつかの柱穴で柱痕が認められる。遺物はP7・P356から須恵器の坏が出土している。本址の時期は6住との新旧関係から奈良時代前半（8世紀前半）と推定される。

第5号建物址（第28図）

I区の中央東寄りで、第4号建物址の西側に隣接する位置にある。33土坑より新、21住より古。4間×2間の側柱式で、規模8.0×5.2mの長方形を呈する。主軸方向はN－6.5°－Eである。柱間寸法は桁行1.7～2.4m、梁行2.1～2.8mである。柱穴は方形・円形・楕円形とさまざまで、壁高は33～71cmである。5個の柱穴の土層断面で柱痕が認められる。遺物はP364から須恵器の蓋・坏が出土している。本址の時期は不明である。

3．竪穴状遺構（第31図）

第1号竪穴状遺構

I区の中央南側、S12～15・E7～11に位置する。規模（西辺）1.8・（東辺）2.7×3.2mで、台形を呈する。壁高は8～14cmと浅く、床面は礫混じりの黄褐色土である。また、北西部は175×128×13cmの方形の落込みがあり、その中に152×58×6～8cmの長方形を呈するP_1がある。他にピットは2個が認められる。遺物は方形の落ち込み内の東側から多量の土師器（坏・甕・小形甕）が出土している。また、P_1から土師器（椀・甕・盤）、P_2・P_3から土師器の坏、西側の床面直上で土師器の皿が出土している。他に須恵器（坏）の破片が覆土中で認められた。これらの土器群は平安時代前期（9世紀後半）と同中期（10世紀後半）の2時期が認められる。調査時にひとつの遺構と判断したが、P_1は独立した土坑の可能性がある。本址の時期については平安時代前期と推定しておく。

第2号竪穴状遺構

I区の中央南端、S13～16・E2～5に位置する。31土坑より古。規模2.7×3.2mで、長方形を呈するが、南端は調査区外である。壁高は10～20cmで、床面は黄色土である。ピットは3個が認められた。遺物はすべて覆土中から出土しており、土師器（坏・甕）、須恵器（蓋・坏・甕）の破片がある。本址の時期は不明である。

4．溝址（第32図）

Ⅰ・Ⅱ区で14本の溝址が確認されている。第32図は土層断面図のみ掲載してあるので、平面図と土層確認地点は全体図（第4図）を参照されたい。

第1号溝址　Ⅰ区の北西、N18・W10～N15・W6に位置する。11・12住より新。北西（高）－南東（低）、長さ5.5m、幅15～55cm、深さ2～4cmが認められた。遺物の出土がなく、時期は不明である。

第2号溝址　Ⅰ区の西側、N32・E8～N6・W8に位置する。25土坑より新、10住・1土坑より古。北北東（高）－南南西（低）で、北側に2本の支流があるが、北端は調査区外である。長さ30m、幅15～84cm、深さ5～40cmである。底部の断面は台形～V字状を呈し、人為的な掘削によるものである。遺物は底面で土製品が出土しているほか、検出面から約10cm下から蔵骨器が出土している。このほかに土師器、須恵器が覆土中から出土している。本址の埋没時期は奈良時代後半～平安時代前期（8世紀後半～9世紀中頃）と推定される。

第3号溝址　Ⅰ区の中央西寄り、N25・E12～S7・E2に位置する。28住より新、9住より古。北北東（高）－南南西（低）で、長さ33.7m、幅26～60cm、深さ5～13cmが確認できたが、本来は両端ともさらに伸びていたと考えられる。南側で2本の支流が認められる。遺物は土師器、須恵器がある。本址の埋没時期は不明である。

第4号溝址　Ⅰ区の中央東寄り、S8・E20～S10・E20に位置する。19住より古。長さ2.1m、幅約40cmを検出面で確認したのみである。本址の埋没時期は不明である。

第5号溝址　Ⅰ区の北東、N15・E24～N22・E29～N17・E50に位置する。16土坑より古。南西（高）－北東（低）で、6住の北西で方向を変えて東南東に伸びている。長さ30.7m、幅21～47cm、深さ14～29cmである。底部の断面は台形状を呈する。遺物は土師器・須恵器の破片が少量出土している。本址の埋没時期は不明である。

第6号溝址　Ⅰ区の東側、N30・E38～N13・E36に位置する。13住より新、7住・13～15土坑より古。北（高）－南（低）で、長さ16.4m、最大幅191cm、最深14cmである。北寄りで3本の支流をもつが、北側で調査区外になる。覆土は浅い単層で、底部には砂が堅くしまっており、かつては水が流れていたと考えられる。遺物は土師器、須恵器（蓋・坏・甕）のほかに、円面硯が溝底から出土している。本址の埋没時期は不明である。

第7号溝址　Ⅰ区の中央東寄り、N5・E33～N1・E32に位置する。5住・4建より新。東側が

開く弧状の溝で、長さ８m、幅19～33cm、深さ３～６cmが認められた。遺物の出土がなく、本址の埋没時期は不明である。

第８号溝址　Ⅰ区の中央東寄り、N10・E35～NS０・E26に位置する。５住・４建より古。検出時に長さ13.7m、幅18～67cmを確認したのみである。本址の埋没時期は不明である。

第９号溝址　Ⅱ区の北側、S65・W９～S70・W19に位置する。10・11溝より新。東北東（高）－西南西（低）で、長さ12.1m、幅45cm以上、深さ８～12cmである。本址の埋没時期は不明である。

第10号溝址　Ⅱ区の中央、S75・W10～S101・W33に位置する。30住・13溝より古。両端は調査区外になるが、北側で２本の支流が認められる。北東(高)－南西(低)で、長さ35.8m、幅54～163cm、深さ15～34cmである。底部は一部で断面が台形状を呈し、砂の堆積や鉄分の集積が認められる。遺物は土師器、須恵器が出土している。本址の埋没時期は奈良時代前半(８世紀前半)と推定される。

第11号溝址　Ⅱ区の北側、S69・W16～S82・W26に位置する。30住より新、９溝より古。両端は調査区外になる。北東(高)－南西(低)で、長さ25m、幅39～176cm、深さ７～17cmである。底部は鉄分の集積が認められる。北側の支流は大半が調査区外になるため、一部で確認できただけである。また、南側の溝内で人頭大前後の礫が大量に廃棄されていた。遺物は土師器(甕)、須恵器(蓋・坏・壷)、緑釉陶器（碗）が出土している。本址の埋没時期は不明である。

第12号溝址　Ⅱ区の南端、S113・W26～S114・W30に位置する。溝の一部（長4.5m、幅78～90cm、深さ32～34cm）が認められる。東北東（高）－西南西（低）で、底部は不整な台形状を呈する。遺物は土師器の甕、灰釉陶器の碗が出土している。本址の埋没時期は不明である

第13号溝址　Ⅱ区のほぼ中央、S87・W30～S95・W13に位置する。31住、10・14溝より新。東側は調査区外になる。西北西（高）－東南東（低）で、長さ18.8m、幅15～41cm、深さ６～19cmである。遺物の出土がなく、本址の埋没時期は不明である。

第14号溝址　Ⅱ区の西端、S86・W30～S90・W27に位置する。13溝より古。西側が調査区外になるが、長さ5.3m・幅９～20cmが検出面で認められた。本址の埋没時期は不明である。

これらの14本の溝址のうち、土層の堆積状況から６溝・10溝・11溝は水路の可能性がある。また、５溝は６住を意識して区画した可能性がある。なお、13溝・14溝は耕作土の直下から確認できたもので、近・現代の溝址と考えられる。

5．土坑・ピット（第33～36図）

Ⅰ・Ⅱ区で土坑53、ピット536基が確認されている。これらは本遺跡の集落構造・景観を考える上で重要な遺構である。しかし、調査期間が限られていたため、建物址を構成するピット（建物址の項で既述）と土坑の一部しか調査を行うことができなかった。なお、調査終了後に行われたほ場整備事業の工事中に、Ⅰ区の南側調査区外で火葬墓2基が確認されている。

以下、特徴的な土坑についてのみ述べることにする。

第1号土坑　Ⅰ区の中央西寄り、N12～14・W2～5に位置する。1建よりも新。長さ296cm・幅202cm・深さ5～13cmで、隅丸長方形を呈する。底面・南～東～北壁で顕著な焼土面が認められた。遺物は東側に多く、人頭大の礫とともに土師器（椀・甕・台付鉢）が出土している。また、西側では土器のほかに多量の炭化木材が認められた。他に、須恵器（坏）の破片が出土している。本址は被熱面や遺物の出土状況から土師器焼成坑と考えられる。本址の時期は平安時代前期（9世紀中頃）と推定される。

第30号土坑　Ⅰ区の北端中央、N30～31・E27～28に位置する。長さ63cm・幅41～55cm・深さ3～5cmで、楕円形を呈する。本址は北側中央が突出する楕円形を呈し、覆土中に多量の炭化材が認められたことから、火葬墓と考えられる。検出面で須恵器の短頸壺の破片が出土したが、本址に伴うものではないと考えられる。本址の時期は不明である。

第32号土坑　Ⅰ区の南側中央、S9～10・E16～19に位置する。17～19住より新。長さ296cm・幅88cm・深さ53～65cmで、長楕円形を呈する。覆土は3層あり、Ⅰ層の最下部で焼土・炭化物が幅3～30mmで、帯状に認められる。遺物は底面から須恵器の蓋・短頸壺の破片が出土したほか、覆土中から土師器（小形甕）、須恵器（蓋・坏・甕）が出土している。本址の埋没時期は奈良時代後半～平安時代前期（8世紀後半～9世紀前半）と推定される。

第34号土坑　Ⅰ区の北西、N19～21・E1～4に位置する。長さ258cm・幅89cm・深さ13～34cmの長楕円形を呈する。北西寄りの底部で6～13cmの落込みが認められた。遺物は底から覆土中にかけて多量の土師器（坏・皿・椀・台付鉢・甕・小形甕・円筒形土器）が出土している。なかでも甕類が多いのが特徴である。須恵器は坏・甕の破片が少量出土したのみである。特徴的な遺物として軒丸瓦1点が覆土中から出土している。本遺構の性格については土器捨て場的な用途が考えられる。本址の時期は平安時代前期（9世紀中頃～後半）と推定される。

第3節　遺　物

1．土器・陶器

各遺構内から多量の土器・陶器類が出土している。ごく一部が中世に属する他は奈良・平安時代のもので、種別は、土師器（内黒土師器・土師質土器を含む）・須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器・山茶碗に限られる。ここでは器形の判別するものすべてを図化に努め647点を提示した。なお、本文内で使用する土器の器種・器形の名称は文献１・２に、また土器群の示す時期の編年観と名称は文献３によった。

(1)種別・器種

①土師器

内黒土師器（黒色土器A）を含む。内外面が黒色処理される黒色土器（黒色土器B）はない。器種は、蓋・坏・皿・椀・鉢・台付鉢・盤などの食器類と甕・小形甕・甑などの煮炊・調理具、筒形土器がみられる。また須恵器の器種だが焼成は土師器質のもの（第55図391）や、明らかに須恵器の模倣品（第61図511）も少数ある。第56図418は形態や調整が甑、あるいは瓦に似るが、大きな切り込みがあり、カマド形土器の可能性を認めてここに含めた。

蓋は１点のみで非常に珍しい（488）。坏はすべてロクロ調整・底部糸切りの坏C・坏D、皿と椀は数が少ないがいずれも内面を黒色処理される皿A・椀Aである。また高台が高く内面黒色処理がない椀B（469・470）や、体部が半球状を呈す椀C（454・455）も僅かに出土している。皿には高台のないものが２点みられる（487・575）。

甕は、甕E（114・201・594～600他）が主体だが、甕A（307・446・524）も僅かにみられる。小形甕は、ロクロ調整でカキメがまわる小形甕Eが中心で僅かに小形甕C・Fが混じる。甑は全形がわからず、推定に依った。底部に平らな円盤状部分が廻るもの（165・207・630）と、単に底が抜けた形態（367）の２種があろう。

②須恵器

器種は、食器類に蓋・坏・有台坏・椀・皿・高坏・盤・高盤、調理器に擂鉢、貯蔵器に長頸壷・短頸壷・四耳壷・横瓶・甕がみられる。ただし壷・甕類には全形を知り得るものは少ない。

蓋には有台坏（坏C）と組み合わされる蓋Cが主体だが、短頸壷の蓋になる端部の大きく屈曲した蓋Eも数点みられる。また現状つまみを持つ蓋Dが１点のみあり、これには外面に線刻の紋様が施されている（第68図638）。坏は底面がヘラ切り・ヘラケズリの坏Bと、糸切りの坏D・焼成不良の坏Eの３種があり、時期差に起因する。有台坏はやや大形のもの（坏CⅠ）、深いもの（坏CⅣ）など３通りくらいの寸法にわかれる。椀・高坏・盤・高盤は全形のわかるものがなく、部分から器種を推定した。第48図262の盤は高台に透かしをもち、体部外面に線刻の紋様がある。

甕は口縁端部または胴最上部に最大径のある広口甕と、頸部がくびれる長頸甕の２種が主で、中・

大形貯蔵器の代表的なものといえる。横瓶は全形のわかるものが3点あり珍しい。

③灰釉陶器

4軒の住居址と土坑・溝や検出面から椀12点、段皿1点が出土しているにすぎない。しかもこれらは第5号住居址を除いて、その遺構出土土器群に所属するものではない、時期の新しい混入品である。全般的にみて、当遺跡の時期的な中心は、松本平への本格的な灰釉陶器流入の以前にあり、従って灰釉陶器の出土量はきわめて少ない。

④緑釉陶器

溝11から椀の破片が1点出土しているだけである（532）。胎土は須恵器質で硬めだが部分的に酸化炎焼成の色調を示し、釉調は濃緑、高台内は露胎で、高台の下面に沈線が廻る。

⑤山茶碗

第31号住居址から1点出土しているのみ（443）。中世（室町時代）に属する。

(2) 土器群

今回調査の各遺構出土の土器群は、発掘時の所見からみて、厳密な意味での廃棄の同時性が認められるものは少ない。大半は遺構埋没に平行して、何らかの形で混じった（捨てられた）ものであり、それらの同時性にはある程度の時間幅を考える必要がある。また廃棄の様相についても、器種と数量に意図的な限定・選択が行われているような状況はほとんどなく、むしろ全く無作為に捨てられているとみるべきものが多い。その点で今回報告の各土器群すべては、第一級の一括遺物とすることはできない。しかし各遺構覆土という時間的に限定された範囲に含まれ、また実際の土器群も時期的にかなりまとまった様相を見せることから、土器の年代観の上で当該遺構の廃絶時期を決定する決め手に用いることは充分に可能と考える。この考えに基づき、以下で竪穴住居址と、まとまった土器を出土したその他の遺構の出土土器群について、器種・器形の特徴とそこから導かれる編年観について概観する。

①住居址出土の土器群

ア．第1号住居址出土土器群（第37図1～18）

食器は須恵器、煮炊具は土師器に限られている。食器の器種は、坏Cとその蓋である蓋C、底面にヘラ切り・ヘラケズリ痕の残る坏Bにより構成され、土師器の甕は、甕Aで占められる。13は土師器非ロクロの鉢、18は須恵器の広口壷で、17は壷の口縁部だが中世陶器のような胎土をもち、混入品の可能性が高い。本土器群の時期は、須恵器の坏が坏Bのみの点から3期が想定できる。

イ．第2号住居址出土土器群（第37～39図19～68）

数量が多く、51点が図示できた。食器は須恵器蓋C・坏C・坏Dが主体を成し、須恵器坏Bが2点、蓋Eと土師器坏Cが各1点混じっている。土師器の煮炊具は小形甕E（60）と甕F（61）の底部破片が1点づつあるだけで様相は不明。貯蔵器は須恵器の広口甕が4点、四耳壷が1点、長頸壷

が1点確認されているがいずれも全形は知り得ない。本土器群の時期は、底面ヘラ切り・ヘラケズリの須恵器坏Bの数量が極端に少なくなっている点からみて4期以降、底面糸切りの土師器坏Cが混じりだしていることをふまえると5期を想定したい。

ウ．第3号住居址出土土器群（第39図69・70）

非常に数量が少なく、須恵器坏B、土師器甕Aを1点づつ図示できたのみである。坏Bが3・4期、甕Aが4期までの様相を持つ。資料が少量で時期の明言はできない。

エ．第4号住居址出土土器群（第39図71～76）

数量が少なく、5個体を図示できたにすぎない。器種は須恵器蓋C・坏B・広口甕、土師器小形甕Cで、坏Bの底面はヘラ切り未調整。時期は須恵器坏Bが1～3期、蓋Cが2～4期、土師器小形甕Cは2～4期に置きたい。土器群全体の時期の明言は避ける。

オ．第5号住居址出土土器群（第40図77・78）

非常に数量が少なく、土師器坏D、灰釉陶器椀を各1点提示できたのみ。坏D、灰釉陶器椀ともに11～13期を示す。

カ．第6号住居址出土土器群（第40～43図79～131）

数量が多く、53個体を図示できた。食器はすべて須恵器から構成され、蓋C・蓋E・坏B・坏C・椀の各器種が見られる。ただし蓋Eは2点、椀は1点のみである。123は高盤の脚と推定する。土師器の煮炊具は、甕A・甕E・小形甕Cなどがある。122は非ロクロの小形の甕あるいは鉢と表現できる器形で、今回の調査ではこの1点のみの出土という珍しいものである。貯蔵器は須恵器に各種のものが見られる。大形・超大形の長頸甕、中形・大形の広口甕（127・131）、肩の張る広口甕（128）、長頸壺、短頸壺、横瓶などだが全形がわかるものは少ない。本土器群の時期は、須恵器の坏底面に糸切りが全く見られない点から3期まで遡らせたい。

キ．第7号住居址出土土器群（第43図132～141）

数量が少なく、10点を図示できただけである。すべて食器で、須恵器蓋C・坏C・坏D、灰釉陶器椀の4器種が見られる。時期は須恵器坏Dの存在から5期が該当するが、灰釉陶器（141）は8期以降で混入品であろう。

ク．第9号住居址出土土器群（第43・44図142～167）

数量は多く、26点を図示しているが、内容に問題がある。食器類は、土師器坏C・坏D・皿A・台付鉢、須恵器蓋C・坏B（154）・坏C・坏D（155～157）・盤と多岐にわたり、3・4期に伴うものと7期頃のものに2分される。出土状態から検討すると、土師器坏C、須恵器坏Dの完形に近いものが床面から出土しているので、本址自体の廃絶時期は7期に近く、3・4期のものは混入品扱いにする。煮炊具は土師器甕E・小形甕E・甑、貯蔵器は土師器の広口甕が出土している。164の土師器の広口甕は器形は全く須恵器の同器種の模倣であるが、器面調整はハケメで底面に木葉圧痕を残している。繰り返すと、本土器群は3・4期と7期頃に2分され、前者に属するのは150・151・154・

164・166、後者は143～149・155～161・165・167で、本址廃絶の時期は後者に代表される。

ケ．第10号住居址出土土器群（第44～46図168～208）

数量が非常に多く、41個体を図示できた。食器は土師器坏C・坏D・皿A・椀A（168～171）・鉢（181）、須恵器坏E（182～188）、煮炊具は土師器甕E・小形甕E・甑（206・207）、貯蔵器は須恵器四耳壺が出土している。203は筒形土器であろう。食器の様相は8期に該当し、煮炊具・貯蔵器もそれを裏切らない。本土器群は数量が多い割に時期的なまとまりに凝集性を示し、当遺跡の該期の代表的な資料として扱うことができる。

コ．第11号住居址出土土器群（第47図209～212）

数量は少なく、土師器坏CⅠ、須恵器坏C・坏D、土師器小形甕Eが1点づつ図示できているだけである。須恵器の坏が4～6期、土師器の坏が5～8期に属するが、発掘時の所見では本址は第12号住居址より新しい。資料が少ないので断定はできない。

サ．第12号住居址出土土器群（第47図213～218）

数量は少なく、土師器坏C・坏D、須恵器坏C・坏D、土師器小形甕Eが各1点図示できているのみである。7・8期頃の時期を与えることは不可能ではないが、少ない資料で危険は大きい。

シ．第13号住居址出土土器群（第47図219～226）

須恵器蓋C・坏B（225）・坏C・坏D、土師器小形甕Fが計8点図示できただけである。坏Cの底面は中央部に回転糸切り痕を残して、周囲に回転ヘラケズリが施されている（221・222）。土師器小形甕Fは底面にヘラ切り痕を有して丸底に仕上がり、通常のものと若干異なる。2～4期くらいの時期が与えられるが、資料が少ないので明言は避けたい。

ス．第14号住居址出土土器群（第47～49図227～266）

数量は多く、40点を図示できた。ただし、重複する第23号住居址との間で、一部遺物の混同があり、発掘時の所見に基づき、整理段階で新しい様相を持つ土器を第23号住居址のものとして排除したが、それが完全に行われている保証はない。従って本土器群には組成と時期に曖昧さが付きまとうことが前提となる。食器はすべて須恵器で占められ、蓋C・蓋E（243・244）・坏B・坏C・盤が見られる。262の盤は体部外面に紋様のような線刻があり、脚には透かしが見える。煮炊具は土師器甕Eが1点、貯蔵器は中小の須恵器短頸壺、大形の広口甕が各1点ある。本土器群の時期は須恵器坏の底面調整から3期頃に求めたい。

セ．第15号住居址出土土器群（第49・50図267～303）

数量は多く、38点を図示できた。食器類は、土師器坏C・坏D・皿A・椀A、須恵器蓋C・坏C・坏D、灰釉陶器椀（288・289）から構成されるが、須恵器蓋C・坏Cは1点しかない。287の脚部は高盤になると推定する。灰釉陶器の椀を除き、主体となる土師器坏Cと須恵器坏Dから導かれる時期は7期頃が妥当であろう。灰釉陶器の椀は11～12期で混入品として扱う。煮炊具は土師器甕Eと小形甕Eで占められ、食器で導かれる時期と不整合はない。1点のみ混じる303は系統不明。

ソ．第16号住居址出土土器群（第51図304～307）

4点を図示できただけの僅少さである。内訳は須恵器蓋C2点・坏C1点、土師器甕A1点で、時期は2～4期の範囲に収まる程度の限定しかできない。

タ．第17号住居址出土土器群（第51・52図308～339）

数量は多く、32点を図示できたが、発掘時に第19号住居址出土品と一部混同されている。それらについては発掘所見により新しいものを本土器群から除外したが、それでも本土器群の示す時間幅に若干の不確かさを残すこととなる。食器は須恵器のみで構成され、器種は蓋C・坏B・坏Cが見られる。煮炊具は土師器甕A・小形甕C、貯蔵器は須恵器広口甕・短頸壺・横瓶がある。また須恵器製の鉢形のミニチュアが1点出土している（325）。本土器群の時期は須恵器坏Bの底面調整の状況から見て3期に置きたいが、前述のとおり、やや新しい要素が含まれてしまっている。

チ．第18号住居址出土土器群（第53図340～344）

数量が少なく、5点を図示できただけである。須恵器蓋C・坏B・坏Cで、3・4期頃に該当させられると考えるが、少数なので不確定な要素が大きい。

ツ．第19号住居址出土土器群（第53・54図345～373）

数量は多く、29点を図示できたが、前述のように第17号住居址出土品と若干の混同があり、新しい様相のものを本土器群に含めるという操作を行っている。このための幾分かの不確かさが本資料の限界として付きまとう。食器類は、土師器坏C、須恵器蓋C・坏B（361）・坏C・坏D・坏E（356・360）から構成されるが、須恵器坏Bは1点のみである。煮炊具は土師器甕E・甑（367・368）・筒形土器（366）、貯蔵器は須恵器長頸壺・短頸壺・四耳壺が存在する。本土器群の時期は、食器類の様相から見て6・7期くらいを考えたい。

テ．第20号住居址出土土器群（第54図374～376）

数量が少なく、土師器坏CⅠ・小形甕C、須恵器蓋Cを1点づつ提示したのみである。資料が限定されていて時期の言及はできない。

ト．第21号住居址出土土器群（第54・55図377～395）

19点を図示している。食器は土師器坏C、須恵器坏D（380～384）・坏E（378・379・385）で構成され、7期の様相を示す。煮炊具は土師器甕Eのみ、貯蔵器は須恵器長頸甕・長頸壺・横瓶があり、食器の時期と矛盾しない。

ナ．第22号住居址出土土器群（第55・56図396～408）

13点が図示できたにすぎない。食器には土師器坏C・坏D・椀A・台付鉢、須恵器坏C・坏D、煮炊具に土師器小形甕E・筒形土器、貯蔵器に須恵器短頸壺がある。全体的な時期は、強いて7・8期くらいを想定できるが、資料は少なく確実性はない。

ニ．第23号住居址出土土器群（第56図409～412）

数量が少なく4点を図示できているのみである。須恵器蓋C・坏D、土師器小形甕Cがあるが、

時期の限定は難しい。

ヌ．第24号住居址出土土器群（第56図413～418）

数量が少なく、6点が図示できたにすぎない。土師器坏C・皿A・台付鉢・小形甕E、灰釉陶器椀（415）があり、418は甑にも見えるが大きな透かし状の切り込みを持ち、瓦かカマド形土器の可能性を残す。灰釉陶器を除き7・8期、灰釉陶器は10期以降と見るが、資料が少なすぎて本土器群の時期は明言できない。

ネ．第25号住居址出土土器群（第56図419～423）

数量が少なく、5点が図示できたにすぎない。須恵器蓋C・坏B・坏C、土師器小形甕Fが見られるが、時期は資料が少ない上に、2～4期の幅があって確定できない。

ノ．第26号住居址出土土器群（第57図424～439）

16点を図示できているが、比較的まとまった資料といえる。食器は土師器坏C・皿A、須恵器蓋C・坏Dからなり、7期を示す。煮炊具は土師器甕E・小形甕E・甑（434）で、食器の時期に整合する。

ハ．第30号住居址出土土器群（第58図444～448）

5点が図示できただけだが、須恵器坏B・坏Cと土師器甕Aは2・3期を示し、まとまりが感じられる。貯蔵器は須恵器の大形の広口甕と長頸甕がある。

ヒ．第31号住居址出土土器群（第57図442・443）

数量が極めて少なく、土師質土器の皿と山茶碗の2点が図示できただけである。山茶碗は体部の器厚が薄く大きく外開し、底部が小さく作られている点から見て14世紀以降のものと推定される。土師質土器皿の時期も問題はなく、今回調査で捉えた最新の土器群である。

②その他の遺構出土の土器群

ア．竪穴状遺構1出土土器群（第58・59図454～477）

まとまった出土があり、24点を図示できた。土師器が主体で、食器に坏C・坏D・皿A・椀B（469・470）・椀C（454・455）、煮炊具に甕E・小形甕Eがある。須恵器は坏Dが1点伴っているのみである。時期は土師器坏C・皿A・甕Eから7・8期、同坏D・椀B・椀Cから11期に二分され、本址が単一遺構であるという発掘時の所見と矛盾してしまう。再検討を要し、従って一括性の高い資料とは扱えない。

イ．溝2出土土器群（第60図483～498）

16点が図示できている。土師器蓋・皿A・小形甕C、須恵器蓋C・坏C・坏D・坏E・皿・短頸壺・擂鉢・甕で構成されるが、487の土師器皿は無高台、488は内面黒色となる土師器の蓋（つまみが剝離した痕跡が明瞭に残っている）、491の須恵器坏は底面に糸切り痕を残すため坏Cとしたが箱形を呈するというように、やや珍しい器形が含まれている。時期的にはまとまりがなく、4～7期の範囲に広がる。廃棄の同時性（近接性）がない、土器群としては2級の資料である。

ウ．溝10出土土器群（第61・62図511～528）

18点が図示できているが、比較的まとまった良好な資料である。食器は須恵器坏B・坏Cで構成されるが、1点のみ混じる511は須恵器坏Cを模倣した内黒ロクロの土師器坏で非常に珍しい。須恵器坏Bは517・520の2点が底面ヘラ切り後ヘラケズリで、他はヘラ切り未調整、同坏Cはいずれも全面回転ヘラケズリとなって、時期的な特性とまとまりを良く示している。食器以外では土師器甕A・筒形土器、須恵器広口甕・擂鉢・甑が出土している。527の甑は酸化炎焼成で橙色をしているが一応、須恵器の器形と考えた。本土器群の時期は、甑や筒形土器など特殊なものを除くと、2～3期に該当する。今回調査の中では該期の代表的な資料の一つといって良い。

エ．土坑1出土土器群（第63図539～550）

12点を図示した。発掘時の所見では、本址は土師器焼成坑であるが、本土器群が焼成後に遺い残されたものの可能性は低い。むしろ焼成坑の跡を利用した廃棄であろう。組成は土師器椀A・台付鉢（550）・甕E・小形甕E、須恵器坏Eという単純なもので、時期的にも8期くらいでまとまっている。本遺跡の中では、数少ない一括遺物に準じる資料と言えよう。

オ．土坑32出土土器群（第64図554～567）

14点が図示できているが、発掘時の所見からは、本址の第一次埋没の際にまとまって廃棄された資料と考えられている。須恵器蓋C・蓋E（560）・坏C・椀（565）・広口甕、土師器小形甕Cの器種がある。560は上下が逆転して盤の可能性もある。565の椀は底部内面に焼成時の融着物がついている。4～6期の間に位置付けられると考える。

カ．土坑34出土土器群（第65・66図572～600）

数量が多く、29点が図示できている。本址は、調査時の所見では土器廃棄の遺構で、特に土師器甕が多量に廃棄されていた。図示したものでは、食器類に土師器坏C・皿A・椀A・台付鉢（591）、須恵器坏E、煮炊具に土師器甕E・小形甕E・筒形土器がある。575の高台のない土師器皿は珍しい。時期は全体に7期ないし8期にまとまる。出土状態も勘案すると、一括遺物として認定できる良好な土器群と言える。

③代表的な土器群

多数の実測図が提示できた土器群を次頁に掲げ、今回の調査の時間軸の骨子としたい。各時期の中間に置かれているものは両方の様相を持つもの、カッコ付のものは遺構の重複などで若干の混乱が見られ一級資料とは言えないものである。

参考文献

1　松本市教育委員会1986『松本市文化財調査報告No.38　松本市島立南栗遺跡』

2　松本市教育委員会1988『松本市文化財調査報告No.63　松本市島立条里的遺構』

3　長野県教育委員会1990『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書4　松本市内その1』

2　期：
　　溝10・30住
3　期：1住・6住・(14住)・(17住)
4　期：
5　期：2住 } 土32
6　期：
　　(19住)
7　期：**26住・15住・21住・(9住)**
　　土34・(竪1古)
8　期：**10住・土1**
9　期：
10　期：
11　期：(竪1新)
12　期： } 5住
13　期：
　～
中　世　31住

2．硯（第69図）

合計4点出土している。いずれも円面硯で圏台をもち、硯面の形状がわかる1・2・3は有堤式である。すべて破片の状態で出土しており、全体の形状は不明である。住居址から出土したのは3・4の2点で、他は6溝と検出面からの出土である。以下、個別に記述する。

3は、2住から出土した。圏台部分を欠き、硯面が⅙ほど残存していた。外堤径は13.0cmで、外堤下縁に一条の突帯を巡らしている。圏台部分には14個の透かしが穿たれていた。陸部は使用痕とみられる摩耗が観察されるが、墨痕は認められない。圏台部分と陸部を一体に作り、圏台上端面に外堤、陸外端部に内堤を付けている。4は14・23住の切り合い部分から出土した。圏台部の小破片で20～21の透かしがある。1は6溝より出土した。圏台部分を欠き、硯面の⅕ほどが残存する破片である。外堤径は8.6cmで外堤下縁に一条の突帯を巡らしている。圏台部分には透かしが数カ所みられ、透かしの間を線刻で充填している。2は検出面から出土した。硯面部の小破片で圏台は欠損している。外堤径は10.6cmで圏台上端部に一条の突帯が巡る。

3．瓦（第69・70図）

今回の発掘調査では細片を含め25点が出土している。種類別では軒丸瓦1、堤瓦1、丸瓦9、平瓦14点がある。軒平瓦は出土しなかった。出土した遺構は第10号住居址、第34号土坑がほとんどで、他に第17・第19号住居址からも若干認められた。遺構外ではⅠ・Ⅱ区検出面から数点が出土している。ほとんどの瓦にはハケメ調整が行われ、布目痕が認められるものは1点もない。焼成は還元焔が不完全に行われたものが多く、ほとんどが暗褐色、白灰色を呈する。

軒丸瓦　1は瓦当面が約⅔とそこに付属する丸瓦部が僅かに残存している。摩滅した瓦当面は、

直径13.1cm、厚さ0.6～1.2cmを測る。瓦当面内区には単弁８葉蓮華文が飾られている。中房は圏線が付くもので直径3.8cm、高さ0.2～0.6cmを測る。断面形は凸形を呈している。圏線は巾0.5～0.6cm、高さ0.2cmで中房からは0.2～0.4cm程離れて全周している。中房内には中心に１個、第１周に５個の小さな連子が巡っている。周環はもたず、いずれも直径は0.4cmを測る。高さは摩滅していることもあって僅か0.1cmと低い。断面形は凸形を呈している。中房からのびる花弁は輪郭線で表現されている。弁端の中央にはハート型に大きな切り込みがあり、反転を表している。隣合う花弁はそれぞれ独立するものと、接してつながっているところがある。子葉は退化して短くなり円形、楕円形、ハート形のものとなり、それぞれの形、大きさは一定ではない。高さは0.2～0.3cmと低い。弁間には間弁がなく、素文である。周縁は内区の文様面より0.8cmほど高い高縁で、一重縁の直立縁と考えられる。直立縁には階段状に段をもつ三重圏文が見られる。しかし見方によっては一重縁ではなく内側から三角縁、直立縁の二重縁である可能性も考えられる。瓦当には接合痕が確認された。瓦当笵に詰め込んで型取りされた部分は中房部で0.3cm、花弁部で0.2～0.4cm、周縁部で0.2～0.6cmを測り、非常に薄いものである。丸瓦部分との接合は型取られた薄い粘土板の上端に同じ弧をもつ丸瓦の端部をあわせ、後に粘土を接合部と瓦当裏面に補っている。丸瓦部分の表面にはハケメ調整が施されていた。裏面は指ナデが行われている。

堤瓦　４は破片であるが巾のわかる好資料である。端部の巾は12.1cm、残存部で最大13.7cmを測る。厚さは1.2cm程を測る。裏面の調整は縦方向の指ナデが、端部では横方向のヘラ状工具によるケズリが行われている。表面の調整は短いハケメ調整が施されている。側面はヘラで化粧した後タタキが行われている。また輪積痕が認められた。

丸瓦　９点の破片があるが、図化しえたものは２点のみである。２は推定される巾は13.4cmである。表面にハケメ調整が、裏面にはへら状工具によるナデ、端部には指ナデが行われている。側面にも指ナデが行われている。３は12.4cmの巾が推定される。調整方法は２と同じであった。

平瓦　14点の破片が出土しており、２点を図化した。このうち５は厚さ1.5cmを測り、巾は32.2cmを推定する。裏面にハケメ調整が、表面には板状工具によるナデ、端部には指ナデが行われている。また輪積痕が認められた。図化し得なかった破片もほとんど同様の調整がされている。１点のみ表面にはタタキ、裏面には指ナデが行われているものが認められた。

４．土製品（第71図）

土器・硯・瓦以外のやきものを、土製品として扱っている。定形的な土製品は紡錘車と鞴の羽口だけである。他に器種・用途ともに不明な土製品がある。

１）紡錘車（１・２）　１は14住または23住に属するもので、約½を破損している。直径6.2cm、高さ3.2cm、推定孔径1.1cmである。２は17住または19住に属するもので、約½を破損している。推定直径8.4cm、高さ3.3cmである。軸孔の残存度が少なく、孔径は復原できない。

2）羽口　図示できないが、1住から鞴の羽口の小破片が出土している。

3）不明土製品（3～8）　3は2溝の底面から出土したもので、直径12.7cm、残存高4.3cmの厚い円盤状を呈する。ロクロ成形で作られ、器面にはロクロナデの調整痕が認められる。片面の内側には破損面が認められるので、器形的には須恵器のすり鉢の底部に似ている。しかし、ほぼ中央に片面穿孔による孔径1.5cmの穴が認められる点と器高が高い点でそれとは異なる。なお、穴の周囲に4ケ所の切り込み痕があることから、あらかじめ穿孔予定の場所に十文字の切り込みを施して印をつけていた可能性がある。片面（図の左側）は器面が平滑になり退色しているのが認められる。なんらかの対象物と接していたためと考えられる。本遺跡は土器製作に関わる遺跡であるので、この土製品の用途については、土器製作に関係する可能性があることだけを指摘しておきたい。

4～7は平面形が不整な円または楕円形を呈し、表面に指頭圧痕が認められる土製品である。断面は両端が薄くなる不整な紡錘形を呈する。意図的に成形したものとは考えにくいもので、用途は不明である。4は10住の検出面から出土、残存長7.2cm、幅4.0cm、厚さ11.4mm。5も10住の検出面から出土、残存長6.8cm、幅4.6cm、厚さ8.5mm。6は12住の覆土から出土、全長7.1cm、残存幅4.6cm、厚さ12.0mm。7は34土坑から出土、残存長6.5cm、幅6.1cm、厚さ6.9mm。

8は28住の覆土から出土したもので、土偶の脚部と考えられる。部分的に沈線による施文が認められる。残存高3.4cm、幅4.6cmである。縄文時代に属するもので、混入品と考えられる。

4）被熱粘土塊　土製品とはいえないが、不定形な塊状を呈する半焼けの粘土が22点出土している。これらは意図的に成形したものとは考えられないもので、指頭圧痕や爪痕が認められるものもある。以下、出土地点と数量的なデータについて列記する。

6住からは2点、135.9g。大きさは長4.9～6.7cm、幅3.5～4.5cm。10住からは5点、75.4g。大きさは長3.0～5.3cm、幅2.4～4.7cm。このうち1点に指頭圧痕が認められる。15住からは3点、31.5g。大きさは長2.3～4.0cm、幅1.7～3.6cm。17住からは8点、130.9g。大きさは長1.4～6.4cm、幅1.3～6.0cm。このうち1点に指頭圧痕が認められる。1土坑からは3点、133.7g。大きさは長3.9～6.3cm、幅3.3～6.2cm。このうち1点に指頭圧痕・爪痕が認められる。このほかに検出面から1点（長4.9×幅4.7cm、重量50.7g、明瞭な指頭圧痕が認められる）が出土している。

被熱粘土塊は、粘土貯蔵ピットをもつ15住や、土師器焼成坑である1土坑から出土している。このことから、被熱粘土塊は土器製作に関わる遺物の可能性があると考えられる。

5．金属製品（第71図）

鉄製品が5点出土している。1は鏃で、Ⅰ区検出面からの出土である。現存長6.1cmの短頸式で、茎部を破損している。鏃身部は残存長3.6cm、幅2.8cmで、逆刺を有し、断面は両丸を呈している。篦被部は長2.8cm、幅0.9cm、厚さ5.2mmである。2は苧引鉄で、11住からの出土である。片側を破損している。残存長8.5cm、最大幅3.0cm、刃部幅1.5cm、同厚さ4.2mm。突出部に柄の木質部が付着し

ているのが認められる。3は苧引鉄で、26住からの出土である。片側の突出部先端を破損している。全長6.6cm、最大幅3.2cm、刃部幅1.3cm、同厚さ5.3mmである。2よりも小型であるが、刃部は肉厚である。4は器種不明で、14住からの出土である。両端が尖る棒状を呈するが、片側は先端付近でわずかに屈曲している。残存長8.4cm、最大幅0.6cm、厚さ4.6mmで、片端を破損している。5は器種不明で、検出面からの出土である。明瞭な刃部があるが、破損部近くに湾曲が認められるため刀子や雁又鏃とは考えられない。残存部長6.0cm、刃部幅1.3cm、同厚さ5.6mmである。

6．石器（第72図）

定形的な石器は13点が出土している。このうち、確実に遺構に伴うものは砥石だけである。他の石器は縄文・弥生時代に属するもので、宮の前遺跡では該期の遺構がないことから、周辺に遺跡の存在がうかがえる。このほかに、黒曜石・粘板岩等の剥片、砕片、2次加工された剥片、磨面をもつ剥片などが少量出土している。文中の寸法は最大長×最大幅×最大厚、重量であり、（ ）は破損している場合の現存値である。

1）砥石（1・2）　2点出土している。1は10住から出土したもので、片側を破損している。(11.60)×(7.36)×(4.15)cm、(755)g、硬砂岩製。4面に研いだ面が認められる。石質から荒砥と考えられる。2はⅠ区検出面からの出土で、先端をわずかに欠いている。(8.70)×(2.32)×2.19cm、(59.17g)、泥質凝灰岩製。5面に研いだ面が認められる。大きさや、石質から仕上げ砥と考えられる。

2）磨製石鏃（3）　17住の覆土から出土しているが、弥生時代に属する有孔磨製石鏃である。先端と両脚部を破損している。孔は両面穿孔である。(2.40)×(2.09)×(0.34)cm、(1.87)g、硅質粘板岩製。

3）打製石斧（4～9）　10点出土し、6点を図示している。4～6は6住の覆土から出土している。4は分銅形を呈するもので、刃部の約1/2を破損している。刃部の剥離面の一部に使用痕である摩耗が認められる。(19.00)×(7.60)×(2.38)cm、(370)g、砂岩製。5は撥形を呈するもので、頭端と刃部を破損している。使用痕・着柄痕は認められない。(9.45)×(4.59)×1.79cm、(77.39)g、粘板岩製。6は撥形・円刃を呈するもので、頭端をわずかに破損している。刃部には使用痕である摩耗が認められる。(6.54)×5.03×1.90cm、(42.70)g、粘板岩製。7は2住の覆土から出土したもので、撥形を呈する。下半部を破損している。着柄痕は認められない。(7.19)×(4.30)×(1.64)cm、(66.23)g、砂岩製。8は5溝から出土、撥形・偏刃を呈する。上半部を破損している。側縁部のつぶれと、胴部の摩耗痕が認められ、着柄痕と考えられる。また、刃部には使用痕である摩耗痕が認められる。(10.82)×7.06×2.52cm、(255)g、砂質粘板岩製。9は検出面から出土、撥形・偏刃を呈する。頭部の一部を破損している。風化が激しく、着柄痕・使用痕は認められない。14.70×8.60×3.52cm、(425)g、凝灰岩製。他に打製石斧は4点（1住の覆土から1点、2住の覆土から3点）出土している。いずれも、撥形を呈するもので、石材は粘板岩か砂質粘板岩が利用されている。

第４章　調査のまとめ

１．大形建造物について

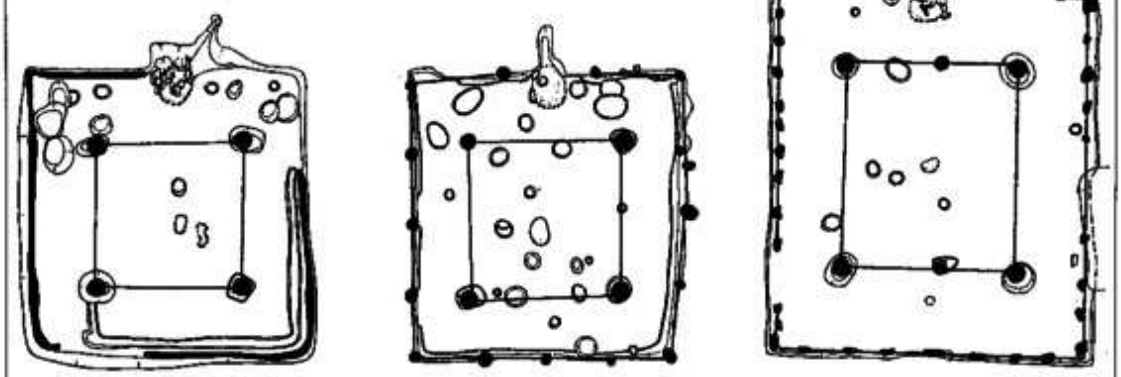
宮の前遺跡では竪穴式住居31軒、掘立柱建物５棟の建造物が検出されている。これらの中には、他と較べて格段に大きいものが存在する。そこで、この大形建造物を取り上げて、その性格について考えてみることにする。

①竪穴式住居　１辺７m以上の竪穴式住居を大形住居とした。大形住居は３軒検出されている（挿図２）。

第６号住居址　7.36×7.08mで、長方形を呈する。柱構造は４本主柱で、梁側に２本ずつ間柱が立つ可能性がある。壁際は周溝が全周し、さらに等間隔で15本の壁柱穴が認められる。壁柱は四隅を共有して、北・南・東壁が４間、西壁が３間の構造を呈する。西壁はカマドの両脇に壁柱穴がある。中央に炉が認められる。時期は奈良時代中頃と推定される。

第14号住居址　10.12×8.48mで、長方形を呈する。柱構造は４本主柱で、梁側に１本ずつ間柱が立つ。壁際に沿って、偏平な河原石を使用した礎石34個が巡っている。南壁の東寄りで、礎石の途切れるところがあり、入口と想定される。中央の炉のほかに、主軸上で東側の梁間からやや壁よりの位置に焼土面が認められる。時期は奈良時代中頃で、６住とほぼ同じ時期と推定される。なお、本址を切る23住は7.08×6.76mの長方形住居で、大形住居に準ずるものである。

第２号住居址　7.64×7.48mで、方形を呈する。柱構造は４本主柱である。周溝が２重に巡らされている。外側の周溝は西壁の北寄りで途切れる部分があり、その場所に入口が想定できる。中央には炉と焼土面が認められる。時期は奈良時代末～平安時代初頭で、6･14住よりも新しいと推定される。



挿　図２　大形住居址の構造（縮尺1：200）

宮の前遺跡の大形住居は壁際に特殊な構造をもつ点と、床面中央に炉をもつ点に共通性がある。

壁際の特殊構造については壁面を作るために施されたものと考えられる。6住は周溝に沿って壁柱を打ち込み、その間に壁材をわたしたと考えられる。そして、東または南壁のいずれかの柱間に入口があったと推定できる。14住は礎石が比較的小さいこと、礎石間の距離が短いことから、礎石の上に直接柱を立てたとは考えにくい。おそらくは礎石間に枘穴をあけた角柱をわたして、角柱上に壁柱を立てて、壁を作ったものと考えている。2住は周溝しか認められないが、周溝を利用して壁面を作ったものと考えたい。

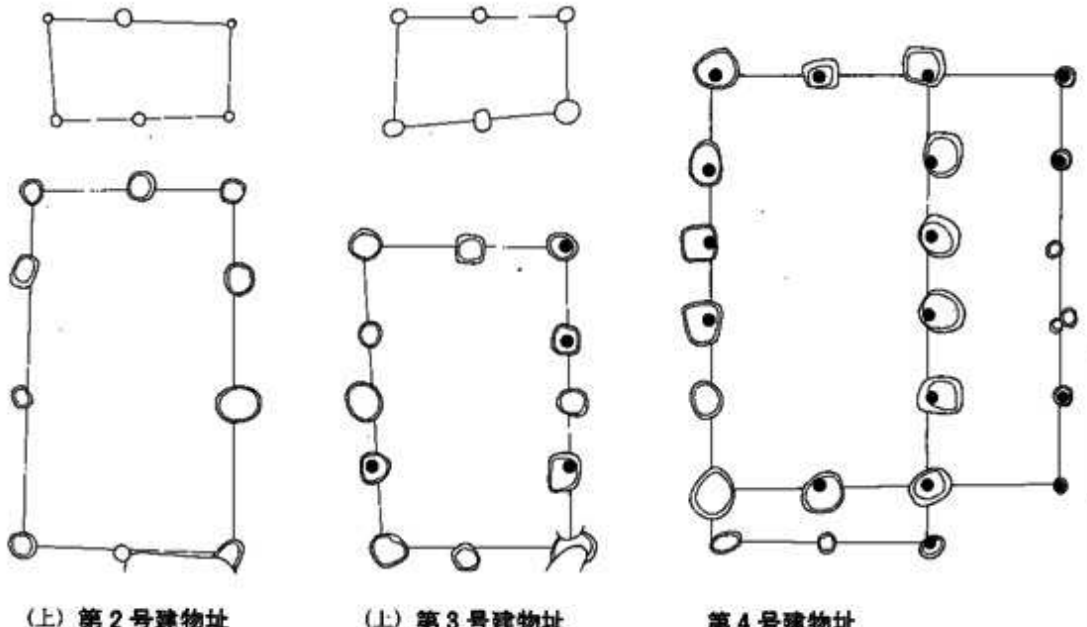
床面中央の炉については、その用途が問題になる。大形住居にはカマドがあるので、調理用とは考えにくい。また、暖房用とするには、冬季以外の時期に住居中央の空間が無駄になるので、その可能性は少ない。そこで、この炉については照明用または工房用に作られたものと考えたい。

②掘立柱建物　1・4・5建を大形建物とした。これらは柱を据えるための掘方が大きく、深い点で共通している（挿図3）。

第1号建物址　3間×2間(9.5×5.4m)で、面積48.3㎡。桁行きの北側1間の柱間が特に短い。出土遺物から時期を特定することはできない。

第4号建物址　5間×2間の主屋(10.7×5.7m、60.5㎡)に、庇が東側(10.6×3.5m、36.3㎡)と南側(5.3×1.5m、7.9㎡)に付随する。時期は奈良時代前半と推定される。

第5号建物址　4間×2間(8.0×5.2m)で、面積40.0㎡。桁行の南・北1間は、中央の2間の柱間よ



挿 図3　建物址の規模 (縮尺1：200)

りも長い特徴をもつ。この建物は4建の主屋の南壁の延長線上に位置している。時期は不明である。

大形建物は主軸方向がN－7～11°－Eとほぼ同じことから、近接した時期の建物と推定できよう。なお、5建は4建との配置関係から、4建の付属施設の可能性がある。しかし、柱痕間の距離が2mしかないことから、屋根の軒先を考慮に入れると、同時存在ではなく時期差があった可能性もある。その場合でも、2棟の配置関係から、建物はごく近接した時期に建てられたと考えられよう。

建物の用途については、側柱式であることと、庇がつくものがあることから居住用と考えられる。なお、4建(旧)は6住(新)と切り合い関係にあるが、その配置関係から、6住は4建の場所を意識しながら建てられた可能性が高いと考えられる。

③まとめ　上記のことから提起される問題点をいくつか挙げてみる。

1）大形建造物はその規模・外観において他を凌駕するものであったろう。また、2住と14住（または23住）の円面硯の出土は、大形住居内で文字を書く作業が行われていたことを想像させる。そうであるならば大形建造物の居住者は集落の指導者または支配者的な人物であり、公的な立場にあった可能性も考えられよう。そして、かれらの居住形態は掘立柱建物から竪穴式住居へと変化したことがうかがえる。なお、1・5建は選地や4建との位置関係から、大形住居や4建とは性格を異にする可能性もある。

2）14住の礎石使用の壁構造は、以前の竪穴式住居の中にはみられない技術である。壁に沿って礎石を配置する大形住居は、松本市内では下神遺跡SB78・SB97[11]、南栗遺跡SB565[12]、75住・88住(松本市1984)[13]、北栗遺跡SB23[14]、三の宮遺跡SB151[15]、北方遺跡SB15[16]がある。これらの住居は8世紀中頃～11世紀前半に属するが、14住は出現期に位置付けられるものである。現時点では、奈良時代から平安時代の大形住居に採用された壁構造と考えられよう。礎石に角柱をわたして壁柱を立てるような技術の系譜を追求することが今後の課題である。

2．集落の変遷について

宮の前遺跡は奈良時代～平安時代前期を中心とする集落遺跡である。そこで、この集落の変遷を検討することから、本遺跡のもつ性格を考えてみたい。なお、II区は該期の住居址が1軒だけなので、I区を中心に集落変遷図を作成した(挿図4)。遺構の時期は出土土器の編年観に基づいているが、時期が特定できない遺構については時期の判明している遺構の切り合い関係から推定した。

本遺跡の集落変遷はI～IV期に分けられる。

I期：土器編年の2期に相当。4・5建の大形建物と16住・30住(II区)が認められる。なお、4建・16住は6住・17住との新旧関係から、5建は4建との配置関係から推定したものである。宮の前遺跡はこの時期から集落が営まれる。30住の存在から、集落はI区の南へさらに広がっていたと考えられる。

II期：土器編年の3期に相当。1・3・6・14・17住からなる。大形建物に替わって、大形住居（6・14住）が出現する。一般的な住居は1軒から3軒に増加する。17住は16住からの連続性が考

えられる。なお、3住だけがカマドが東壁にあり、後述のIII期に属する可能性がある。

III期：土器編年の4・5期に相当。2・4・7・23住からなる。大形住居はカマドの位置が西壁中央から東壁中央へと変化し、6住→2住・14住→23住の変遷が考えられる。4住は3住からの連続性が考えられよう。

IV期：土器編年の7・8期に相当。確実に6期に属する住居が認められないので、III期との間に若干の時間差が認められる。9・15・21・26住、1竪、34土坑が7期、10住、1土坑が8期、22住が7～8期に該当する。この時期になると大形住居は認められない。粘土貯蔵穴をもつ15住、土師器焼成坑の1土坑など、土器生産に関わる遺構がみられるのが本期の特徴である。

IV期以降は、5住（11～13期）・31住（鎌倉～室町時代）が検出されている程度で、集落は9期以降はその中心を他所に移動したと考えられる。

これらの時期の実年代については、I期が8世紀前葉、II期が8世紀中葉、III期が8世紀後葉～9世紀初頭、IV期が9世紀中～後葉に位置づけられる[7]。

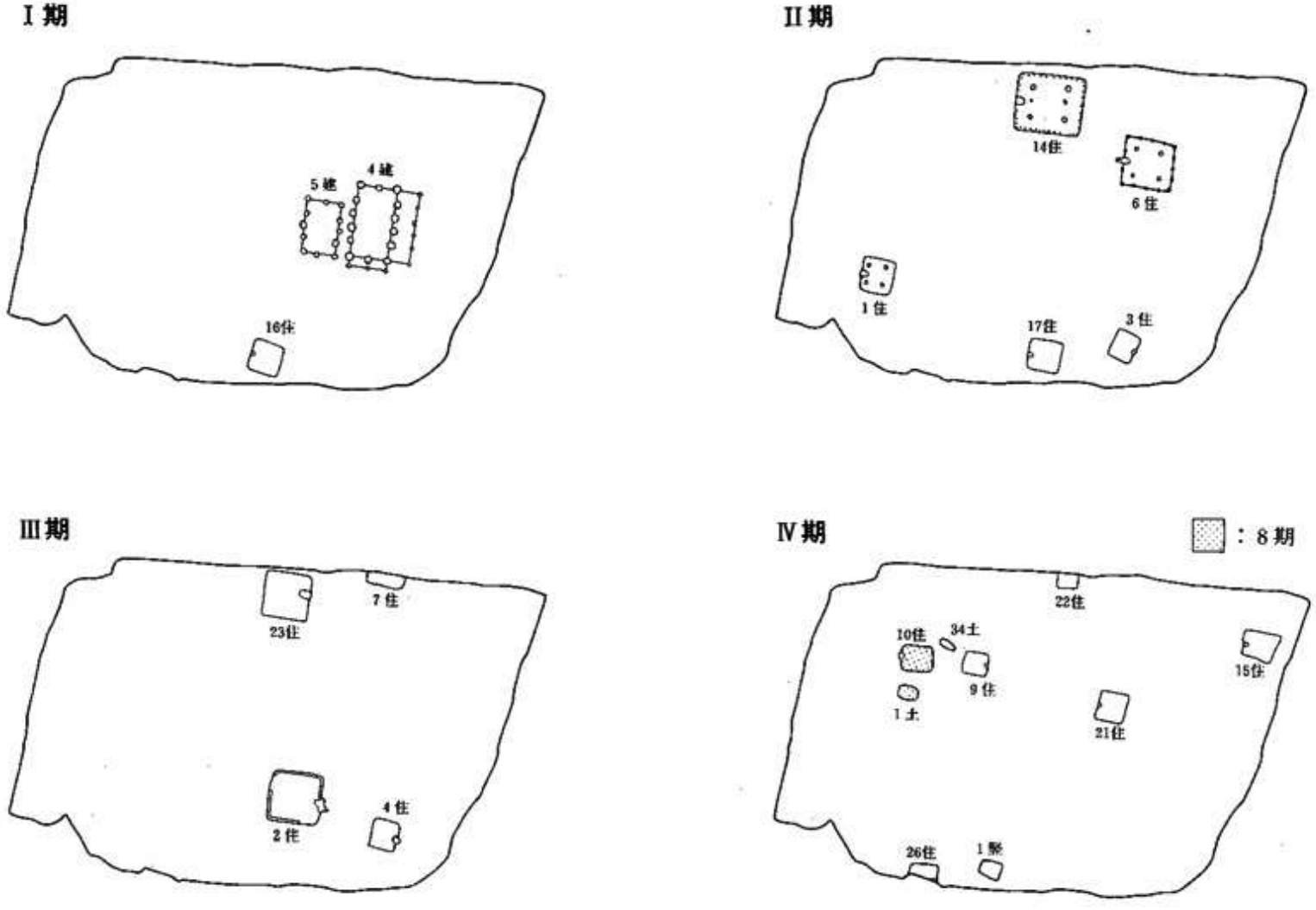
上記のことから、宮の前遺跡の集落変遷を概観してみよう。なお、今回は調査面積も小さく、集落の規模・範囲は把握できていない。また、調査区外での住居の移動も考慮にいれなくてはならないが、大筋は外れていないと考えている。

本遺跡は奈良時代前期に集落が形成される。当初は大形掘立柱建物と竪穴式住居で集落が構成されるが、まもなく大形竪穴式住居2軒と一般的な竪穴式住居による構成へと変化する。そして、この形態は9世紀初頭（平安時代初頭）まで継続する。9世紀中葉の集落状況は不明であるが、9世紀後葉になると大形住居はなくなり、一般的な住居だけで集落は構成される。また、一部で土師器生産が行われている。そして、10世紀以降は集落の規模が縮小する。

最後に、宮の前遺跡の集落変遷の歴史的背景を考えたい。本遺跡の集落は、田溝池周辺から北に広がる須恵器窯址群の操業期間とほぼ合致する。立地的には、須恵器窯址の分布する丘陵地帯を後ろに控えた位置にある。これらのことから、宮の前遺跡は須恵器生産と密接に結び付いた集落の可能性が高いと考えたい。おそらくは、この集落は須恵器生産とともに展開し、須恵器生産が衰退するIV期以降は、集落もその運命をともにしたのではないだろうか。

参考文献

1．『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書6　下神遺跡』　(財)長野県埋蔵文化財センター1990
2．『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書7　南栗遺跡』　(財)長野県埋蔵文化財センター1990
3．『松本市島立南栗・北栗遺跡・高綱中学校遺跡、条里的遺構』　松本市教育委員会　1985
4．『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書8　北栗遺跡』　(財)長野県埋蔵文化財センター1990
5．『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書9　三の宮遺跡』　(財)長野県埋蔵文化財センター1990
6．『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書10　北方遺跡』　(財)長野県埋蔵文化財センター1990
7．『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書4　総論編』　(財)長野県埋蔵文化財センター1990



挿図4　集落の変遷（縮尺1：1000）

第5章　結　　語

今回の調査は面積3498㎡の小範囲しか及ばなかったが、奈良～平安時代前期を中心とする古代集落の一端を捉えることができた。最後に、これまで述べてきた調査成果から、特徴的なことと今後の課題を挙げて結びとしたい。

1．集落の性格について　宮の前遺跡の背後の丘陵には、田溝池周辺から北に広がる須恵器窯址群が分布している。本遺跡の時期は須恵器窯の操業期間と重複することから、宮の前遺跡の集落は窯業生産と関わっていた可能性が高い。実際に、土師器焼成坑（１土坑）や粘土貯蔵穴（15住）等の遺構、不明土製品や被熱粘土塊等の遺物の存在は、そのことを裏付ける資料と考える。後述する大形建造物の性格等から想像を逞しくすれば、本遺跡は須恵器生産の指導者的人物の居住域であり、立地などから製品管轄を行う配送センター的な機能を有していた可能性も考えられる。

2．大形建造物の存在　２面庇の大形建物や大形住居は集落の中心的な居住域を想定させる。特に、大形住居で円面硯を保有していた可能性は、居住者が文字を書く立場にあったことを推定させる。また、礎石を使用する特殊な壁構造の技術は、中央からの建築技術の影響が考えられるのではないだろうか。そうであるならば、大形住居の居住者は公的な立場を有していたことも考えられよう。

3．特殊な瓦の存在　宮の前遺跡からは通常の布目瓦よりも小形で、表面には叩き調整の替わりにハケメ調整を用いた瓦が出土している（10住・34土坑）。これらは住居・土坑内からの出土で、本遺跡で使用されていた可能性は少ない。これまで、この種の瓦の出土は知られていない。それでは、この小形・ハケメ調整の瓦はどこで使用されていたのだろうか。また、どのような建物の屋根に葺かれていたのだろうか。今後の調査に期待したい。

以上思い付くままに列記してきた。仮定の上に仮定を重ねて話を進めた部分もある。これまでに述べてきたことは、今後の岡田地区の埋蔵文化財の調査結果から検討していかねばならない。特に、多数の土師器焼成坑が出土した西裏遺跡や、瓦・円面硯が出土している岡田町遺跡を含めた女鳥羽川の河岸段丘沿いに展開する遺跡群の実態との関連に期待したい。

豊科町の大口沢や四賀村方面へ行くため、国道143号線で市街地を抜け、北上すると岡田神社の参道をすぎたところから、国道はわずかに左にカーブする。そのすぐ左側が調査地である。現在は、ほ場整備も完了して整然とした水田地帯が広がっている。調査終了後の工事で、遺跡はパワーシャベルの露と消えてしまった。参道を登り、岡田神社の建つ丘陵から岡田地区を見渡すと当時の集落立地が理解しやすいかと思われる。さらに、その道を行くとかつて須恵器窯があった田溝池に通じている。背後の丘陵には、わずかでも当時の面影が残っているのだろうか。

最後になりましたが、発掘調査から報告書刊行までの間、多くの方々のご理解、ご協力を賜りました。記して感謝の意を申し上げますとともに、埋蔵文化財の保護に対してより一層のご理解をお願い申し上げます。

表1 住 居 址 一 覧 表

床面積の( )は現存面積

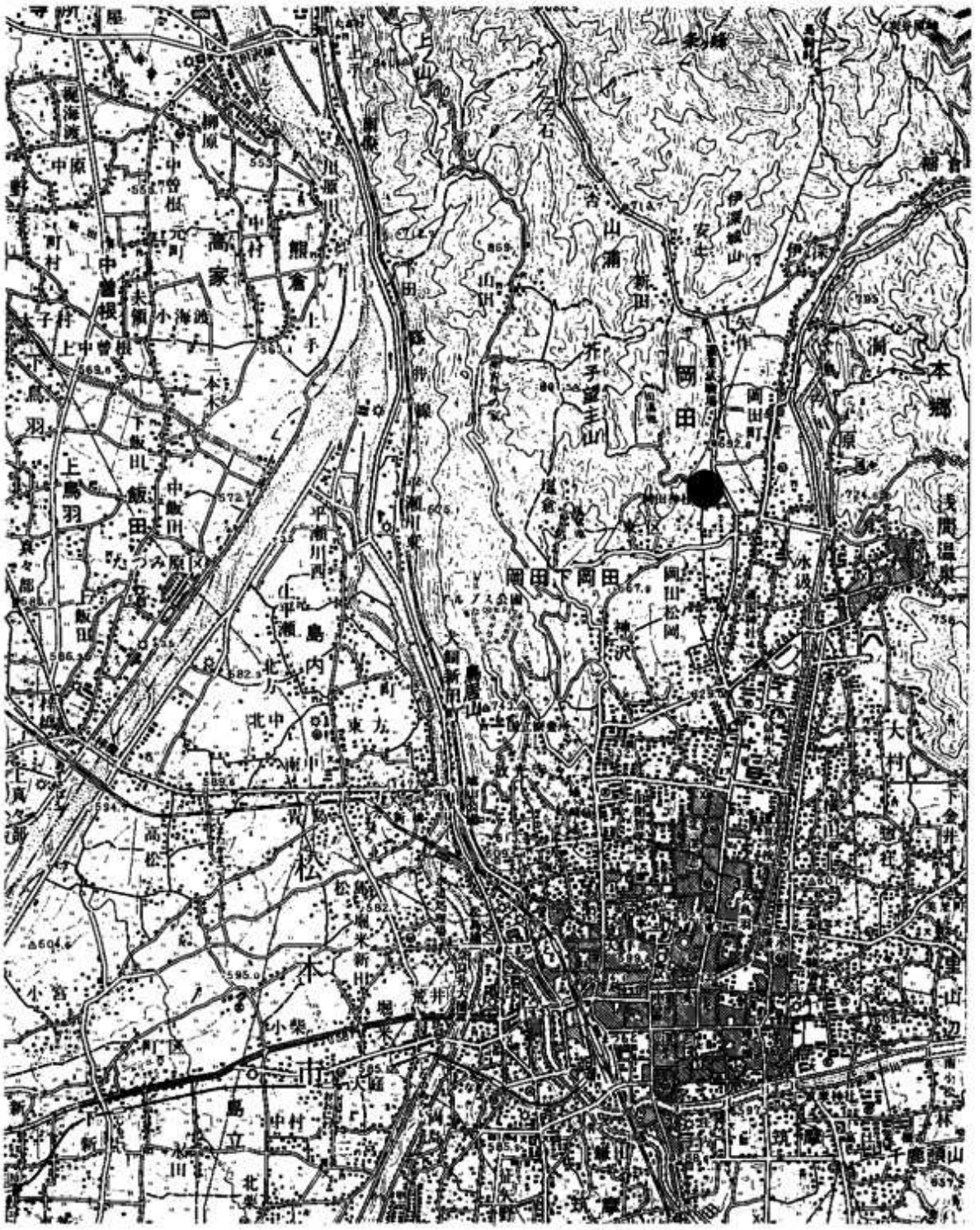
住居 No.	図 No.	平面形	規模 長軸・短軸・深さ(cm)	規模 床面積(m²)	主軸方向	カマド形態 種別	カマド形態 位置	カマド形態 煙道	新旧関係	備考
1	5	隅丸方形	512×480×24	21.0	N-76° W	石組	西壁中央			
2	7	隅丸方形	764×748×40	48.6	N-97°-E	石組	東壁中央	160cm		炉、円面硯
3	8	隅丸方形	448×360×10	(14.1)	N-120°-E	粘土?	東壁中央		4住より古	
4	6	隅丸方形	448×420×16	16.6	N-105° E	粘土	東壁中央		3住より新	
5	6	方 形	340×324×16	9.5	N-104°-E	石組?	東壁中央		5建、8溝より新 7溝より古	
6	9	長方形	736×708×34	44.6	N-78°-W	石組	西壁中央	104cm	4建より新 21住より古	炉
7	10	方 形?	568×6	(11.0)	———	—	———		6溝より新	
8	10	方 形?	232×16	(3.1)	———	—	———		14住より古	
9	11	隅丸方形	364×348×28	11.0	N-102°-E	粘土?	東壁中央			
10	12	隅丸長方形	480×408×24	(15.8)	N-81°-W	粘土?	西壁中央		1建、2溝より新 27土より古	瓦出土
11	13	隅丸方形	408×400×12	(14.4)	N-1.5°-E	石組?	東壁?		12住、1建より新 1溝より古	
12	13	隅丸長方形	420×340×6	(11.3)	N-13°-E	—	———		1建より新 11住、1溝より古	
13	11	長方形	496×428×24	(16.7)	N-86.5°-W	石組	西壁中央		6溝、30土より古	
14	15	長方形	1012×848×22	81.7	N-81.5°-W	石組	西壁中央		8・25・29住より新 22・23住より古	炉
15	14	長方形	532×368×28	(18.2)	N-74°-W	石組?	西壁中央		12土より古	
16	17	隅丸方形	480×448×26	(8.7)	N-77°-W	石組	西壁中央		17住より古	
17	17	方 形	472×468×30	20.4	N-76° W	石組	西壁中央		16・18住より新 19住、32土より古	
18	18	———	416×13	(1.1)	———	—	———		17・19住、32土より古	

住居 No.	図 No.	平面形	規模		主軸方向	カマド形態			新旧関係	備考
			長軸・短軸・深さ(cm)	床面積(㎡)		種別	位置	煙道		
19	18	長方形	508×436×16	(19.3)	N-79°-W	石組	西壁中央		17・18住、4溝より新 20住、32土より古	
20	19	隅丸方形	328×328×18	8.9	N-77.5°-W	?	西壁中央		19住より新	
21	20	方　形	448×428×26	17.6	N-86.5°-W	石組	西壁中央		6住、4・5溝より新	
22	19	方　形?	308×22	(6.1)	———	—	———		14・23住より新	
23	21	長方形	708×676×16	(42.6)	N-99°-E	石組?	東壁中央		14住より新 22住より古	
24	21	———	372×8	(5.2)	———	—	———			
25	22	方　形?	480×18	(15.9)	———	—	———		29住より新 14住より古	
26	23	———	432×18	(7.9)	N-100°-E	粘土	東壁中央			
27	24	———	388×16	(5.4)	———	—	———			
28	23	方　形	608×600×18	30.3	N-80°-W	粘土	西壁中央		3溝より古	
29	22	———	12	(6.1)	———	—	———		14・25住より古	
30	24	方　形	488×480×18	(16.3)	N-125°-E	石組	東壁中央		10溝より新 11溝より古	
31	25	方　形	520×8	(27.0)	———	—	———		13溝より古	炉

表2 建物址一覧表

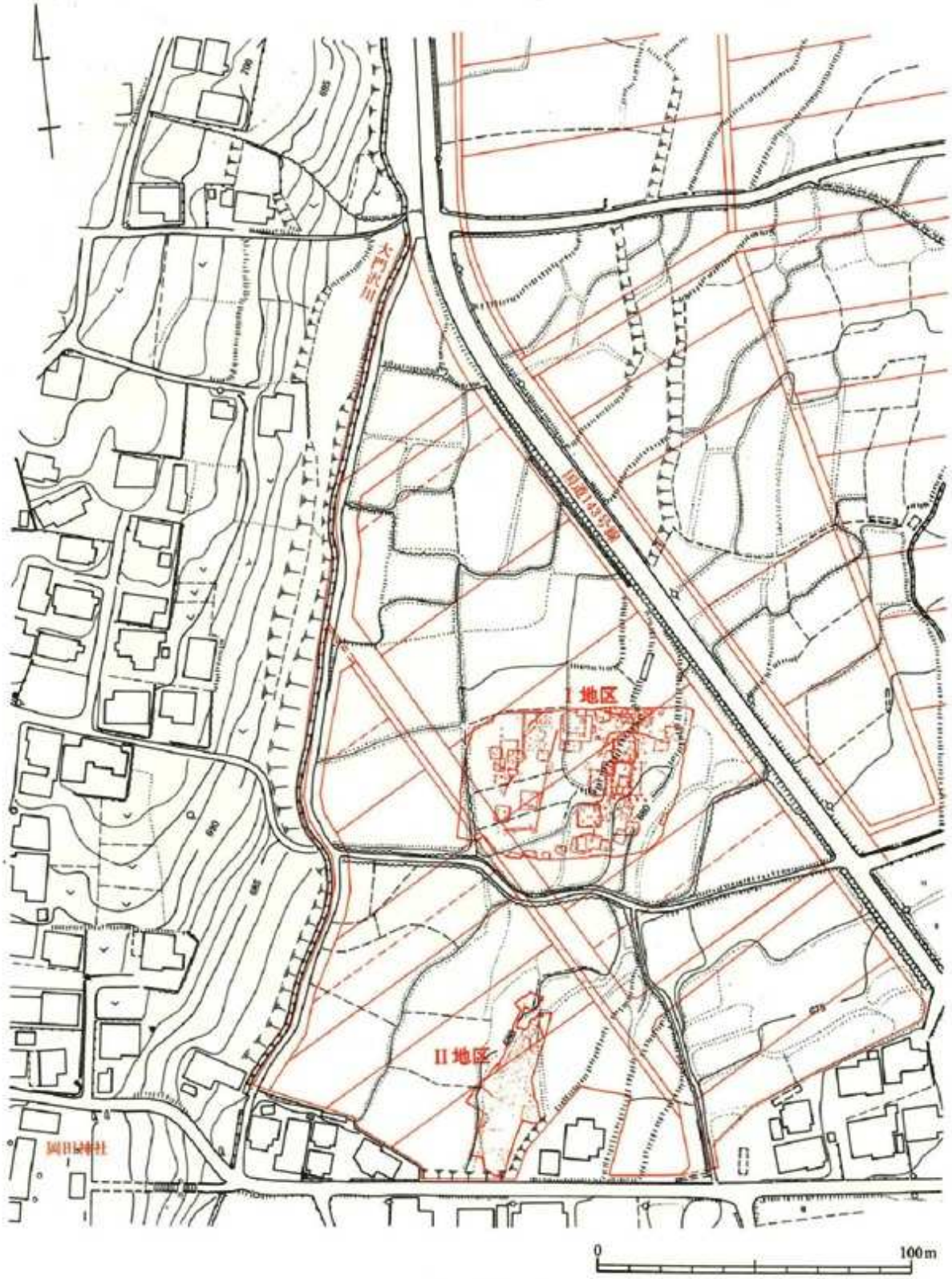
No.	平面形 柱配り	主軸方向 面積(㎡)	規模 (m)	柱間寸法 (m)	柱穴規模(cm) No.	長径	短径	深さ	柱穴 平面形	柱穴 備考	新旧関係
1	長方形	N-10°-E	3間×2間	桁2.2～4.0	34	66	60	29	円形		2溝より新
		9.5×5.4			35	78	68	26	円形	柱痕	10·11·12住、1土より古
	側柱式	48.3	(9.2) (5.2)	梁2.6～2.8	36	60	60	28	円形	柱痕	
					37	80	72	36	楕円形	柱痕	
					370	116	100	37	楕円形		
					107	—	66	38	楕円形		
					106	44	40	—	円形	未掘	
					369	76	68	27	円形		
					368	56	48	25	楕円形		
					33	84	56	24	不整円形		
2	長方形	N-71°-W	2間×1間	桁2.0～2.7	43	22	20	12	円形		
		4.7×2.6			39	44	42	14	円形		
	側柱式	11.4	(4.4) (2.4)	梁2.4～2.7	41	22	20	15	円形		
					55	24	22	17	円形		
					51	34	32	11	円形		
					50	30	24	5	楕円形		
3	長方形	N-82° W	2間×1間	桁2.1～2.3	27	40	38	30	円形	柱痕	
		4.5×2.9			28	42	34	16	楕円形		
	側柱式	12.1	(4.3) (2.5)	梁2.5～2.9	29	44	40	20	円形		
					32	66	60	18	円形		
					31	60	46	18	楕円形		
					30	55	51	22	円形	柱痕	
4	長方形	N-11° E	5間×2間	桁1.9～2.4	355	121	104	35	円形	柱痕	
		(主屋)	(主屋)		356	96	72	48	方形	柱痕	5·6·21住、7溝より古
	側柱式	60.5	10.7×5.7	梁2.7～2.9	357	110	96	43	方形	柱痕	
		(東側庇)	(東側庇)		1	114	96	56	楕円形	柱痕	
		36.3	10.6×3.5	柱間1.8～2.4	2	116	100	59	円形	柱痕	
		(南側庇)	(南側庇)		3	120	112	64	円形	柱痕	
		7.9	1.5×5.3	柱間2.6～2.7	4	112	96	46	方形	柱痕	
					5	108	88	53	方形	柱痕	
					6	108	104	52	方形	柱痕	
					7	124	108	54	円形	柱痕	
					351	98	82	70	楕円形	柱痕	
					352	108	100	67	方形	柱痕	
					353	100	92	55	方形	柱痕	
					354	116	88	51	楕円形	柱痕	

No.	平面形 柱配り	主軸方向 面積(㎡)	規模 (m)	柱間寸法 (m)	柱穴規模(cm) No.	長径	短径	深さ	柱穴 平面形	柱穴 備考	新旧関係
					20	52	52	27	円形	柱痕	
					21	52	48	12	円形	柱痕	
					22	48	44	24	円形	柱痕	
					24	46	44	16	円形		
					25	52	48	18	円形	柱痕	
					26	36	32	13	円形	柱痕	
					15	64	52	25	楕円形	柱痕	
					14	56	48	24	円形	柱痕	
					311	88	52	35	楕円形		
5	長方形 側柱式	N-6.5°-E 40.0	4間×2間 8.0×5.2 (7.8) (4.9)	桁1.7~2.4 梁2.1~2.8	365	90	84	33	円形		33土より新 21住より古
					366	80	74	47	方形	柱痕	
					358	84	72	39	楕円形	柱痕	
					11	76	70	71	方形		
					10	78	68	67	円形	柱痕	
					359	98	82	52	方形	柱痕	
					8	120	92	54	楕円形		
					360	70	64	38	円形		
					361	94	84	44	円形		
					362	82	78	45	不整形	柱痕	
					363	108	90	46	楕円形		
					364	66	58	32	楕円形		

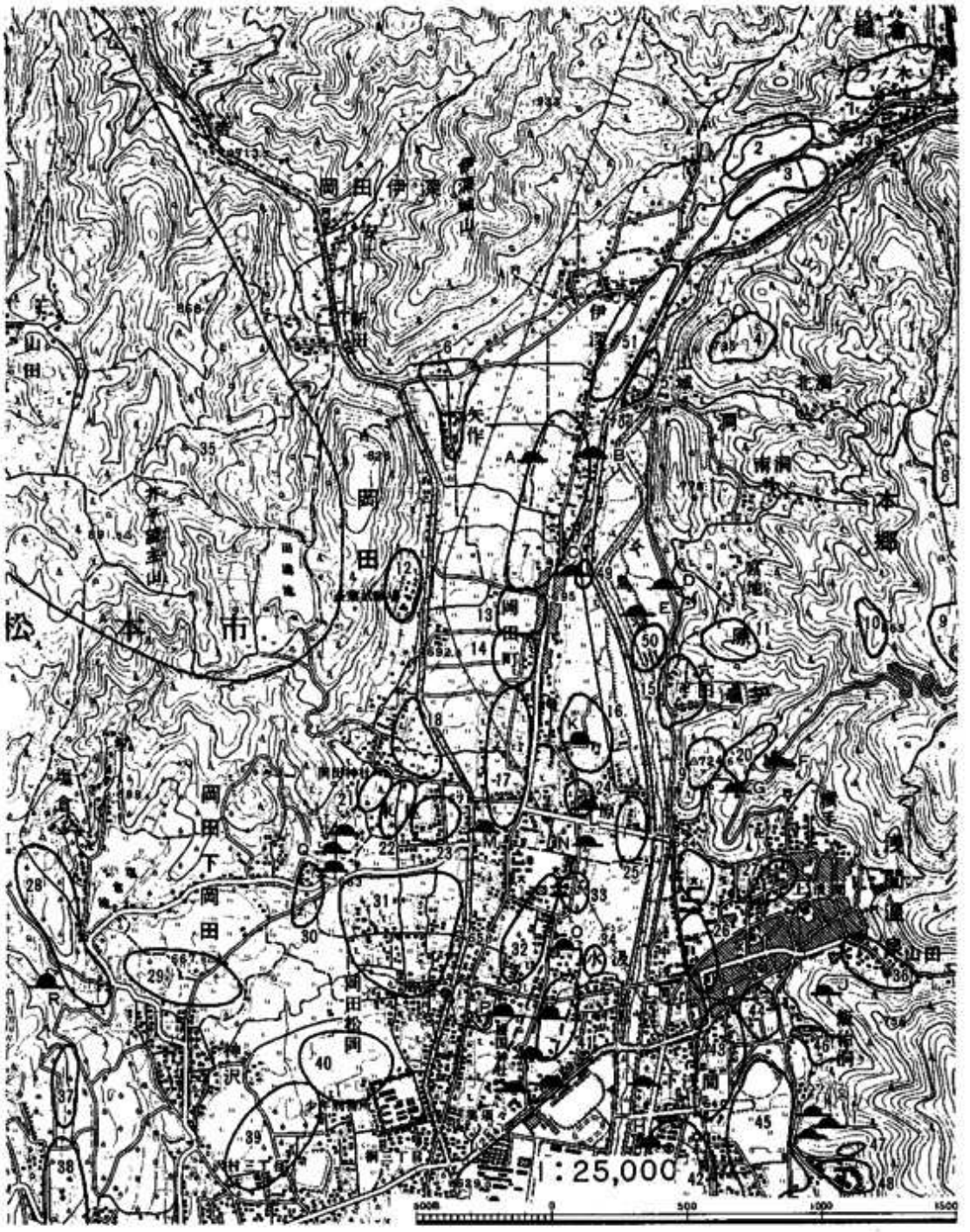


調査地

第1図　遺跡の位置



第2図　調査範囲



宮の前遺跡

第3図　周辺遺跡

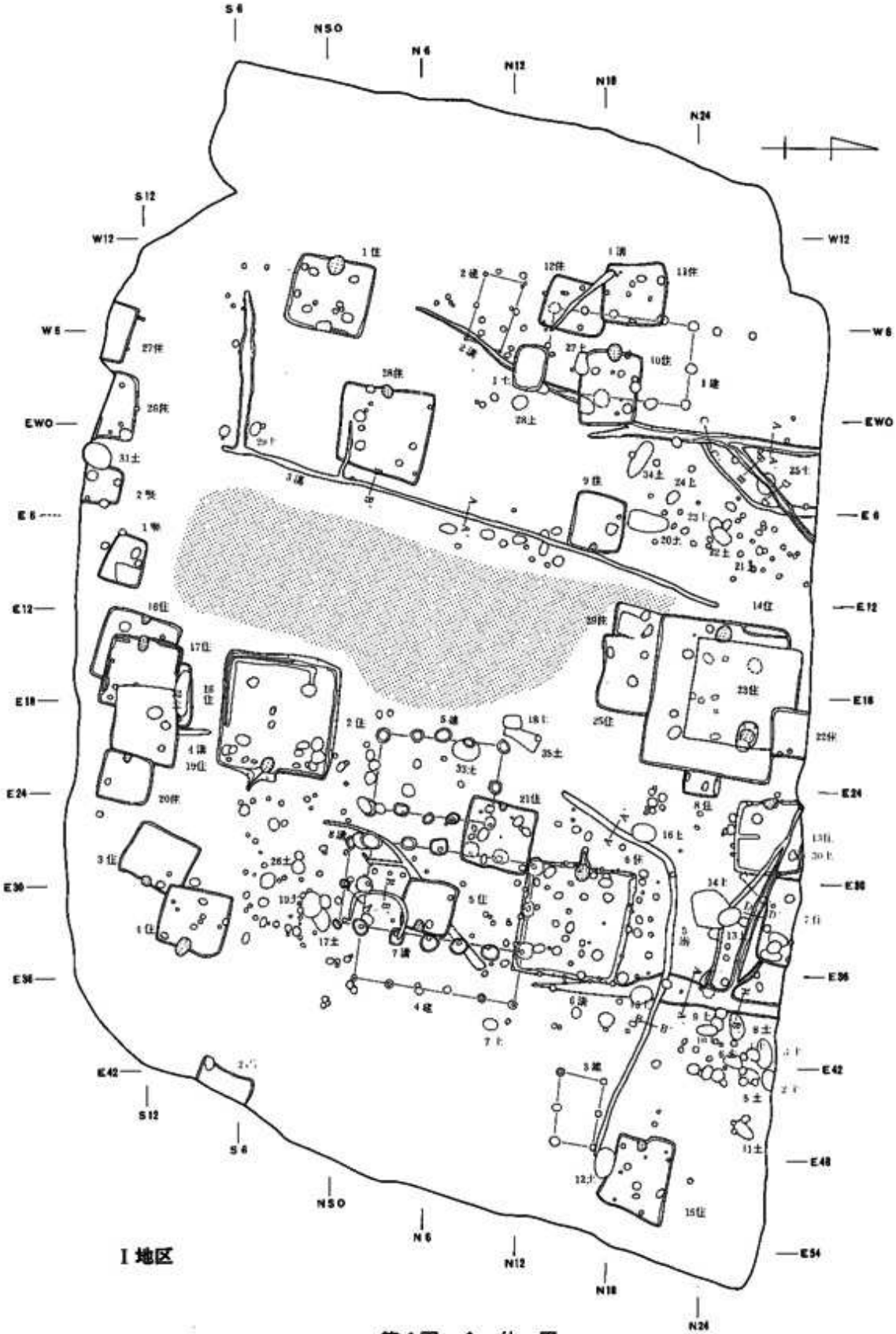
周 辺 遺 跡

遺跡名（主要時期）

1．鎮守（縄文）
2．和田（縄文）
3．桜田（縄文）
4．高山（縄文）
5．竹之上（縄文）
6．矢作（縄文・中世）
7．岡田町（縄文・古墳・奈良・平安・中世）
8．栗和田（縄文・弥生・古墳）
9．雨堤（縄文・弥生・古墳）
10．小河清水（縄文・古墳・平安）
11．穴田峯（古墳・奈良・平安）
12．向山（平安）
13．二反田（古墳・奈良・平安）
14．下出口（古墳・奈良・平安）
15．穴田前（古墳・奈良・平安）
16．宮の上（平安）
17．西裏（縄文・古墳・奈良・平安）
18．宮の前（奈良・平安・鎌倉）
19．北ノ久保（縄文）
20．根利尾（縄文）
21．岡田神社裏（平安）
22．堀ノ内（平安）
23．田中（平安）
24．下屋敷（縄文・平安）
25．五反田（弥生・古墳・平安）
26．高田（縄文・古墳・平安）
27．鳥居前（弥生・古墳）
28．塩倉（縄文）
29．丸山（平安）
30．天神の木（平安）
31．松岡（古墳・奈良・平安）
32．七日市場（平安）
33．杵坂（縄文・平安）
34．たて（縄文・平安）
35．北部古窯址群（奈良・平安）
36．大音寺（縄文・弥生）
37．神沢（縄文）
38．峰の平（縄文）
39．狐塚（平安）
40．トウコン原（縄文・弥生・奈良・平安）
41．西原（縄文・弥生・古墳）
42．大輔原（縄文・平安）
43．柳田（縄文・奈良・平安）
44．新湯南裏（縄文）
45．大村（奈良・平安）
46．真観寺（古墳・平安）
47．新切古窯址群（古墳）
48．新切（古墳・奈良・平安）
49．原畑（平安）
50．塚田（縄文・平安）
51．塩辛（縄文・奈良・平安）

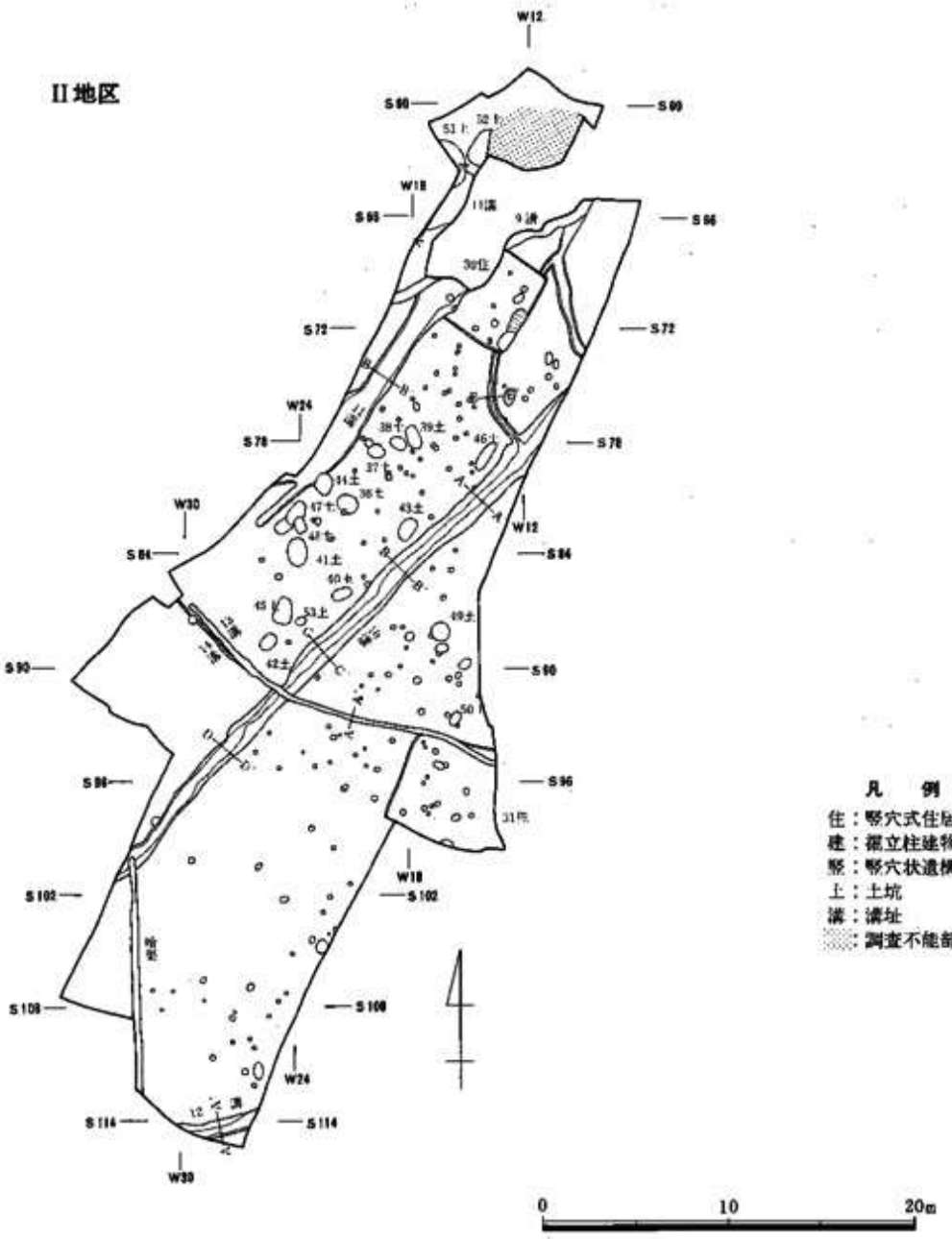
古墳名

A　中島
B　山城
C　高根塚
D　土取場
E　塚田
F　本社峯
G　茶臼山
H　大屋敷1・2号
I　妙義山1～3号
J　桜ケ丘
K　西原
L　下屋敷
M　猫塚
N　塚畑
O　水汲1～5号
P　松岡
Q　矢崎
R　塚山

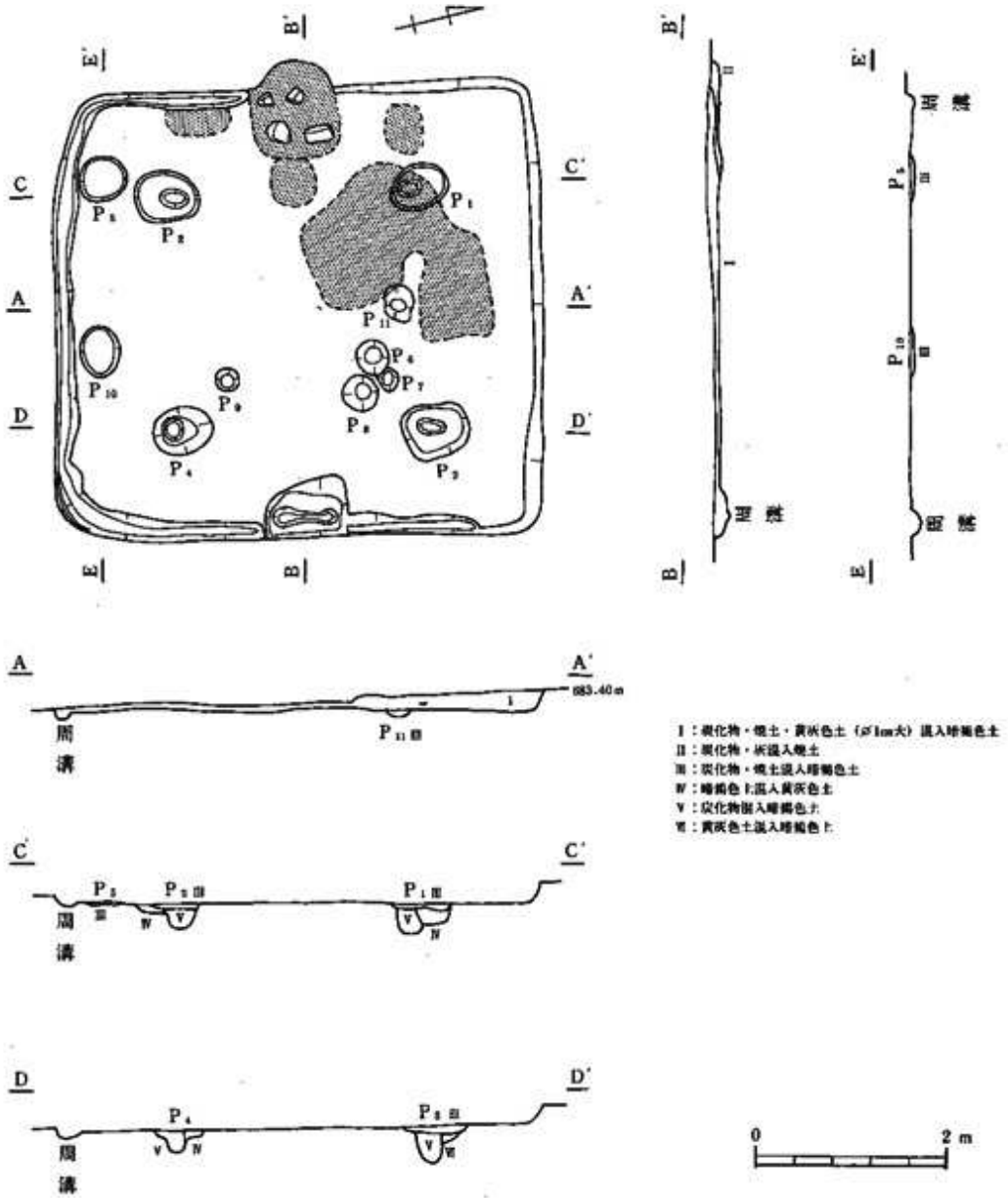

S6
NSO
N6
N12
N18
N24
S12
W12
W6
EWO
E6
E12
E18
E24
E30
E36
E42
E48
E54
I地区

第4図　全　体　図

II地区

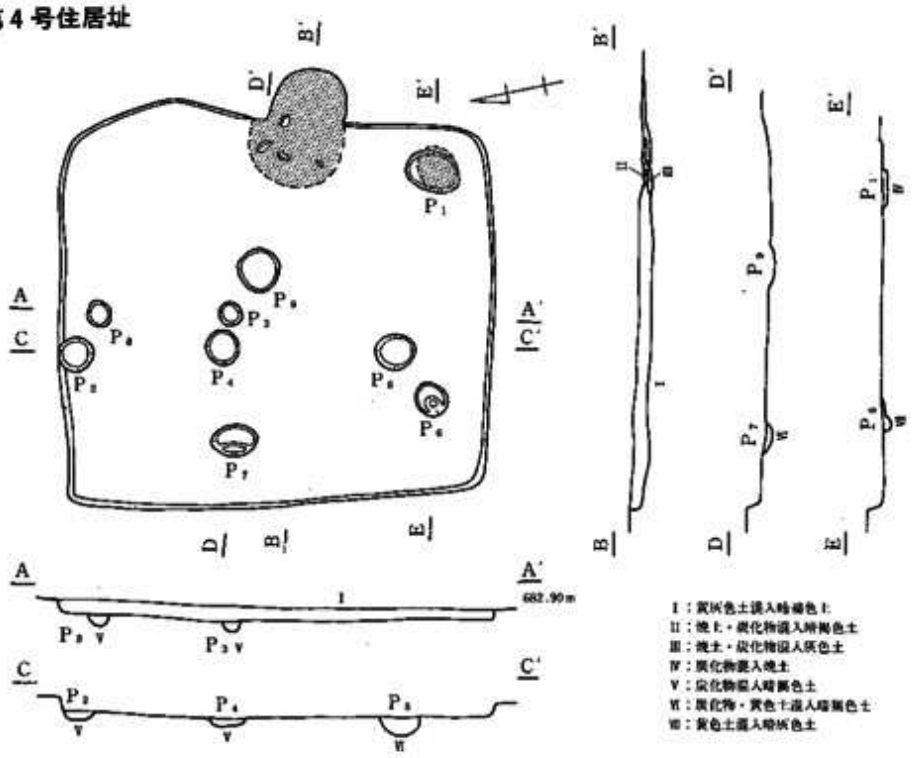


W12
S90
S60
W18
S66
S72
W24
S78
W30
S84
S90
S96
S102
S108
S114
W30
凡　例
住：竪穴式住居址
建：掘立柱建物址
竪：竪穴状遺構
上：土坑
溝：溝址
：調査不能部分
0
10
20m

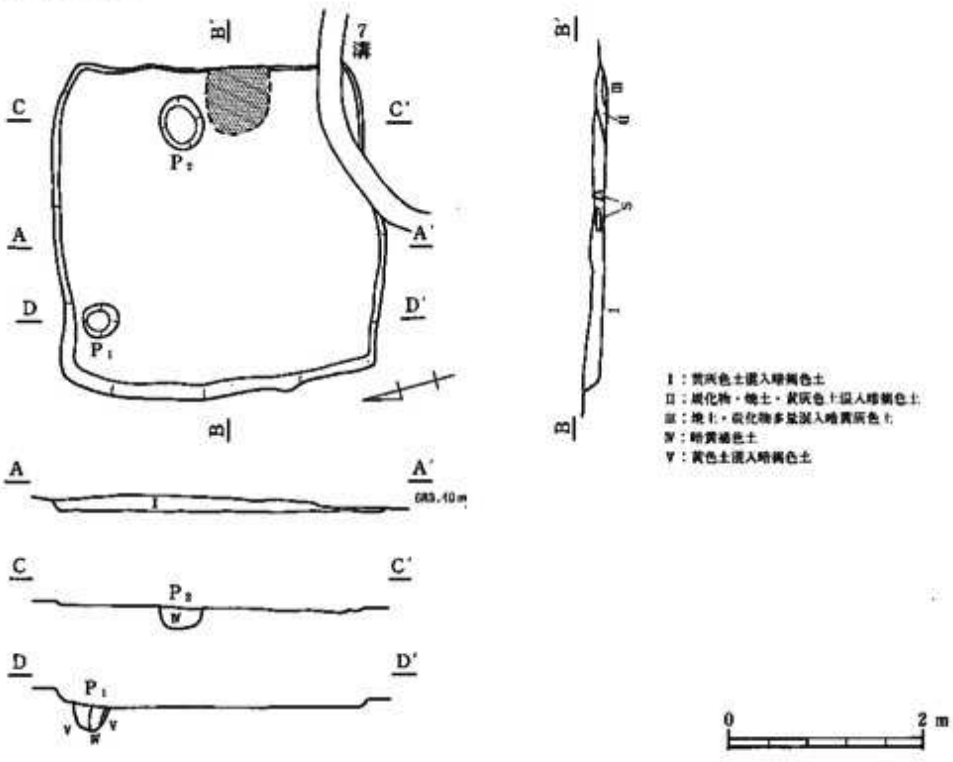

P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
P8
P9
P10
P11
A
A'
B
B'
C
C'
D
D'
E
E'
I
II
III
IV
V
VI
周溝
683.40m
0
2 m
I：炭化物・焼土・黄灰色土（φ1cm大）混入暗褐色土
II：炭化物・灰混入焼土
III：炭化物・焼土混入暗褐色土
IV：暗褐色土混入黄灰色土
V：炭化物混入暗褐色土
VI：黄灰色土混入暗褐色土

第5図　第1号住居址

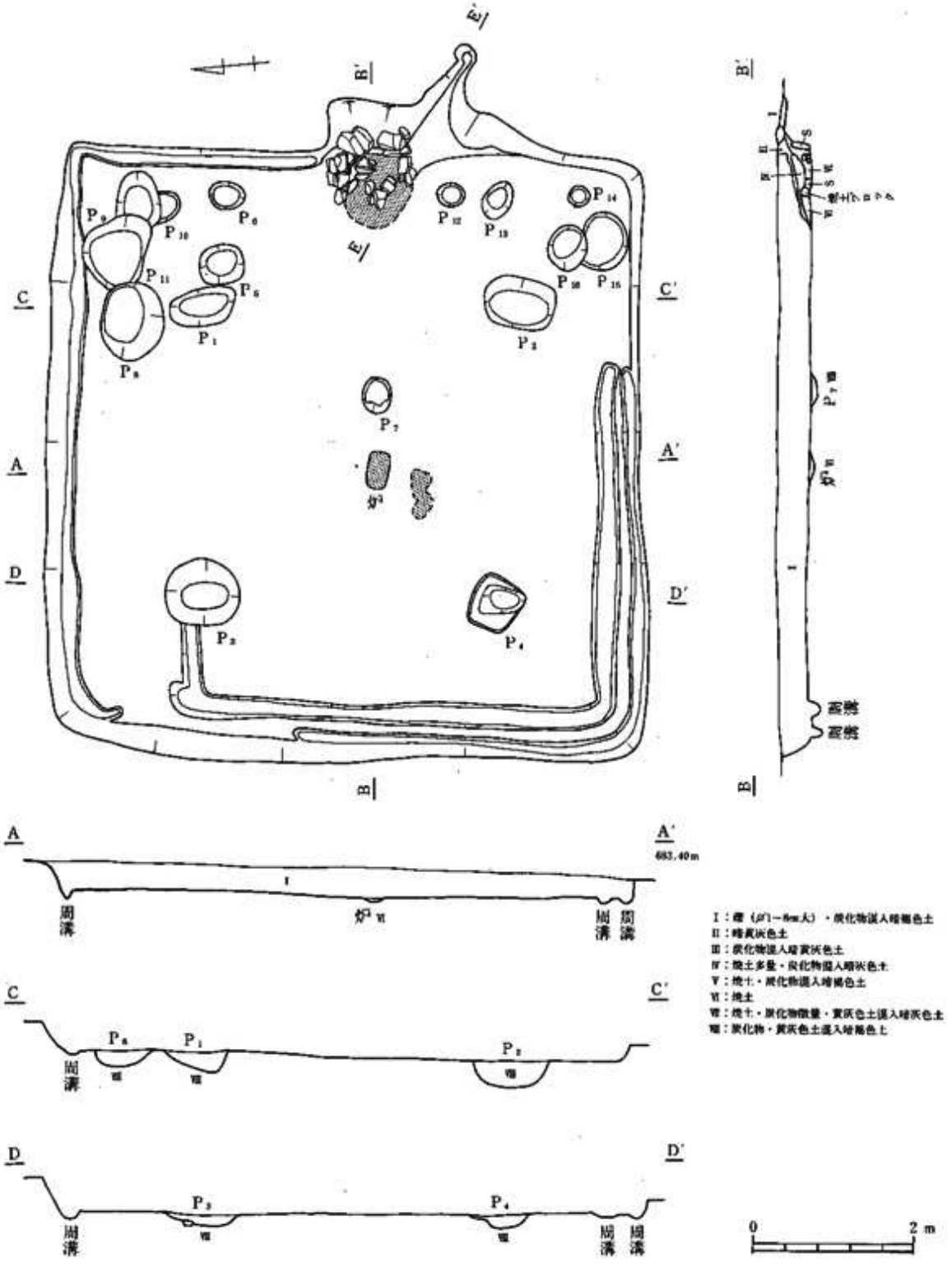
第4号住居址



第5号住居址



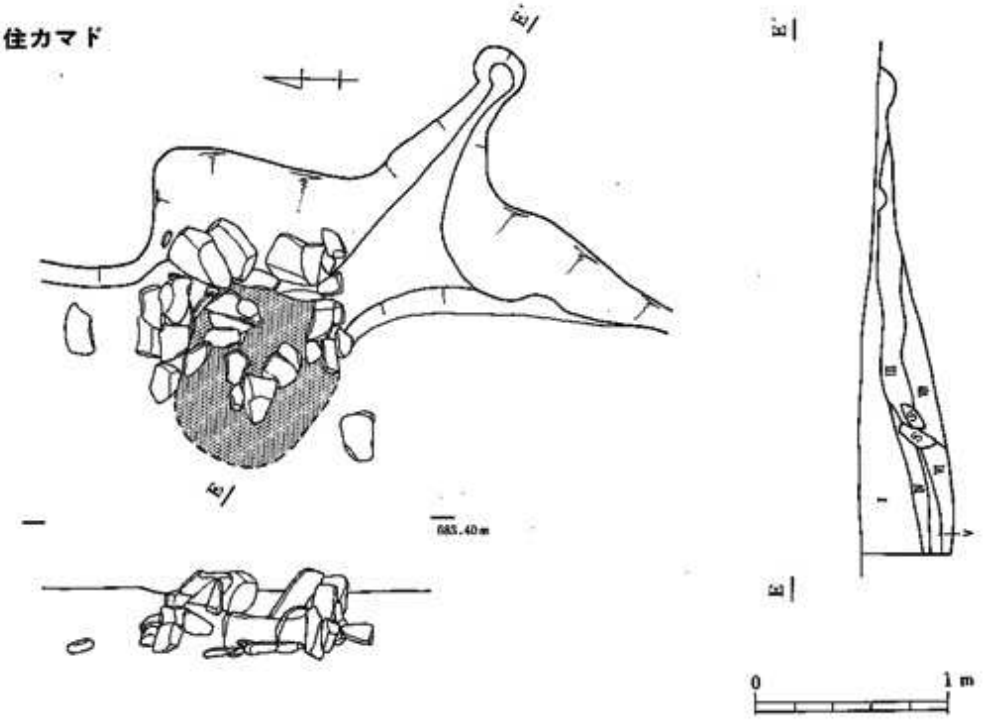
第6図　第4・5号住居址



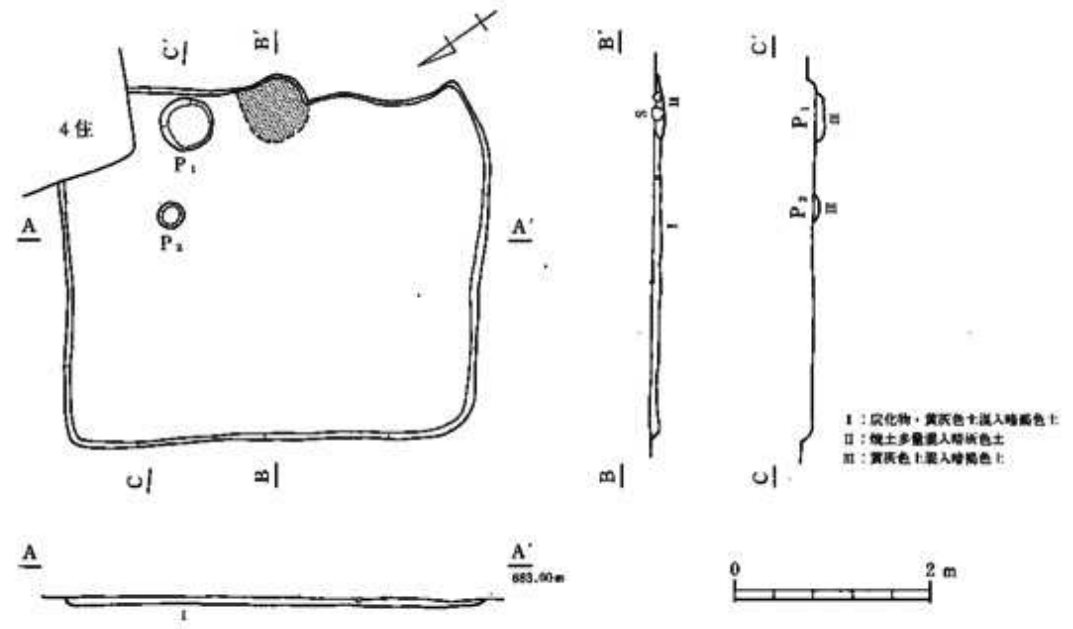
A
A'
B
B'
C
C'
D
D'
E
E'
P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
P8
P9
P10
P11
P12
P13
P14
P15
P16
炉1
炉2
周溝
683.40m
I：礫（ρ1～8cm大）・炭化物混入暗褐色土
II：暗黄灰色土
III：炭化物混入暗黄灰色土
IV：焼土多量・炭化物混入暗灰色土
V：焼土・炭化物混入暗褐色土
VI：焼土
VII：焼土・炭化物微量・黄灰色土混入暗灰色土
VIII：炭化物・黄灰色土混入暗褐色土
0
2 m

第7図　第2号住居址（1）

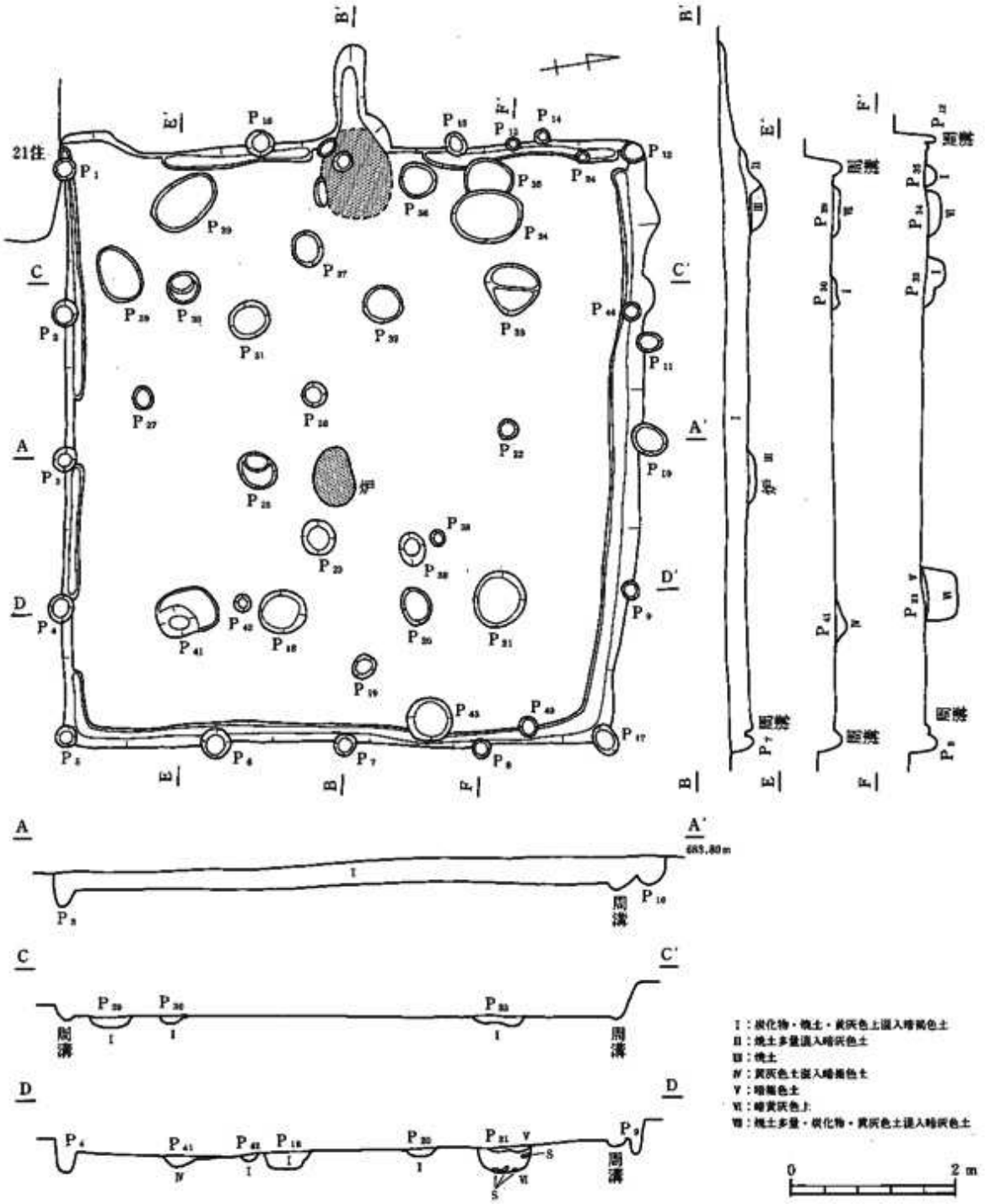
2住カマド



第3号住居址

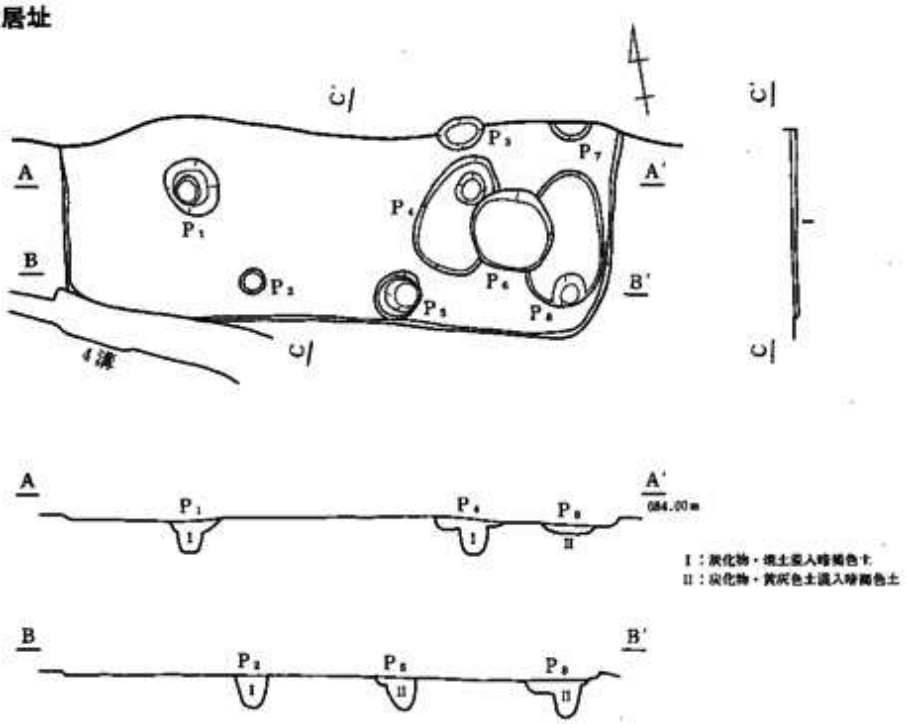


第8図　第2(2)・3号住居址

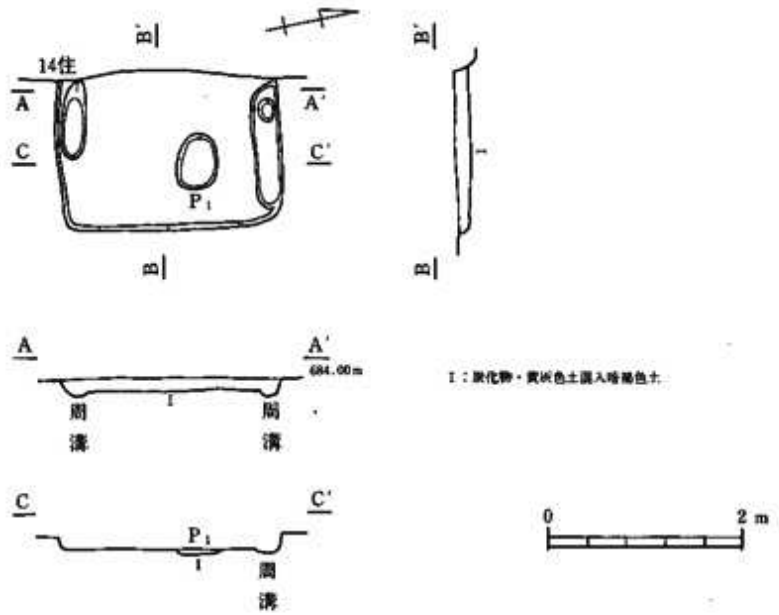

21住
炉
周溝
I：炭化物・焼土・黄灰色土混入暗褐色土
II：焼土多量混入暗灰色土
III：焼土
IV：黄灰色土混入暗褐色土
V：暗褐色土
VI：暗黄灰色土
VII：焼土多量・炭化物・黄灰色土混入暗灰色土
0
2 m

第9図　第6号住居址

第７号住居址

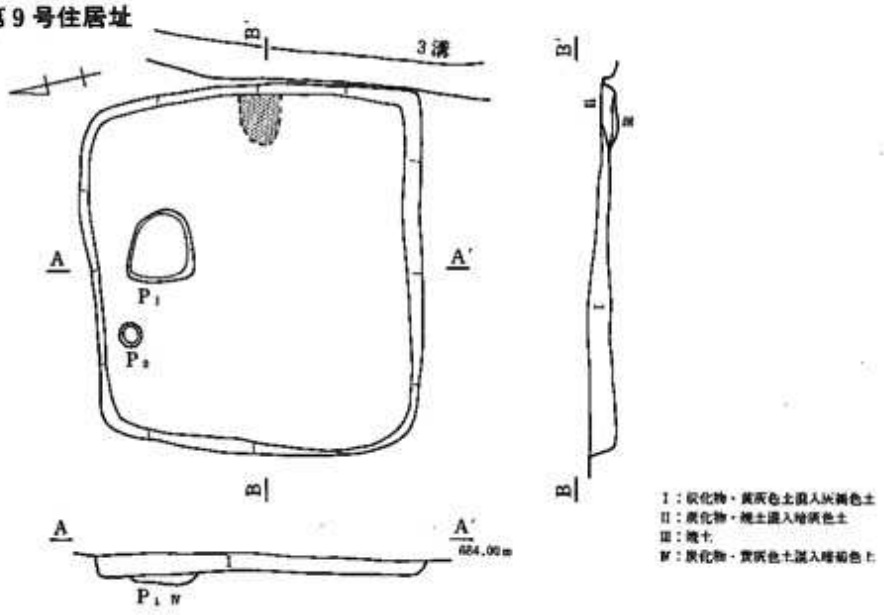


第８号住居址

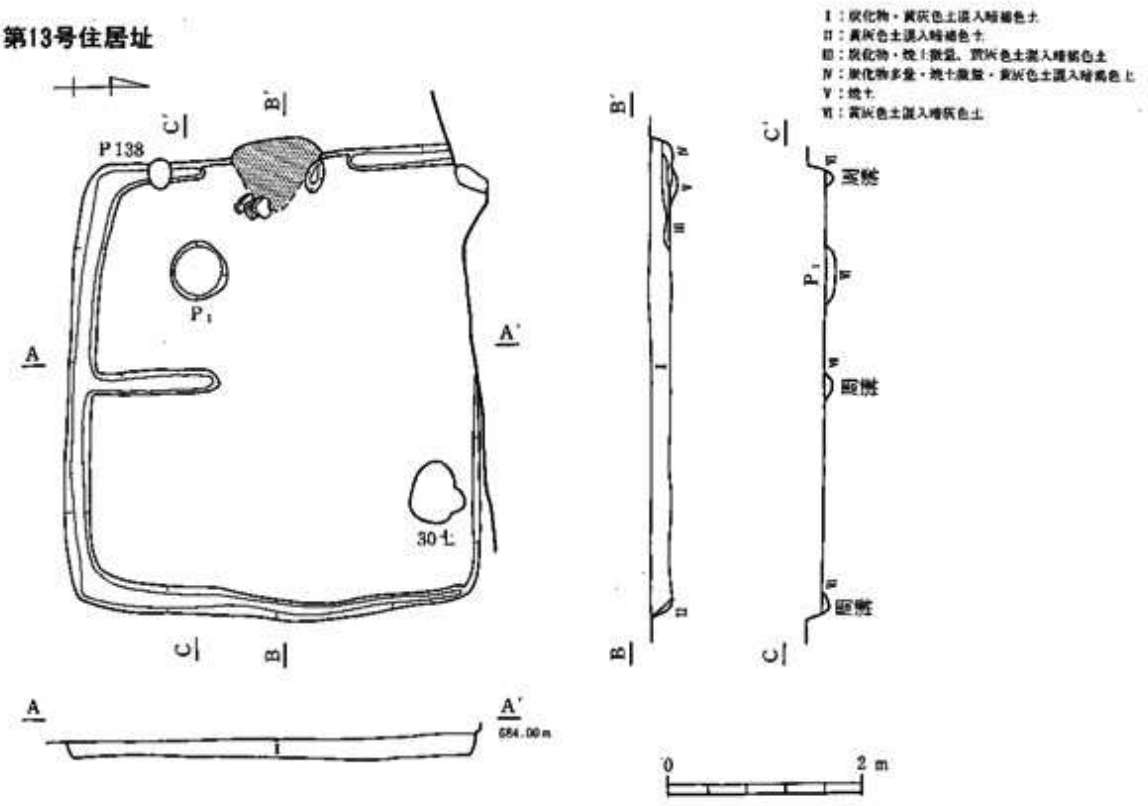


第10図　第７・８号住居址

第９号住居址

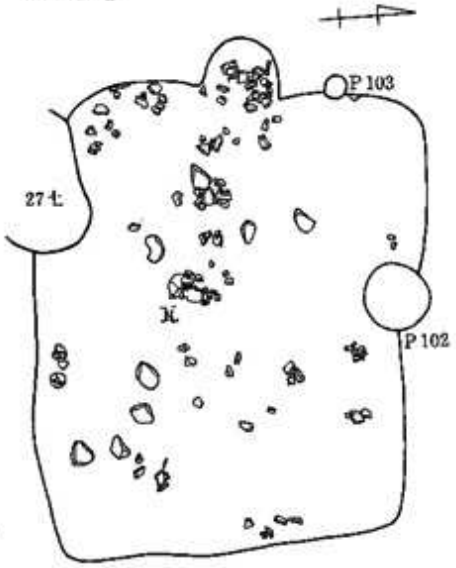


第13号住居址

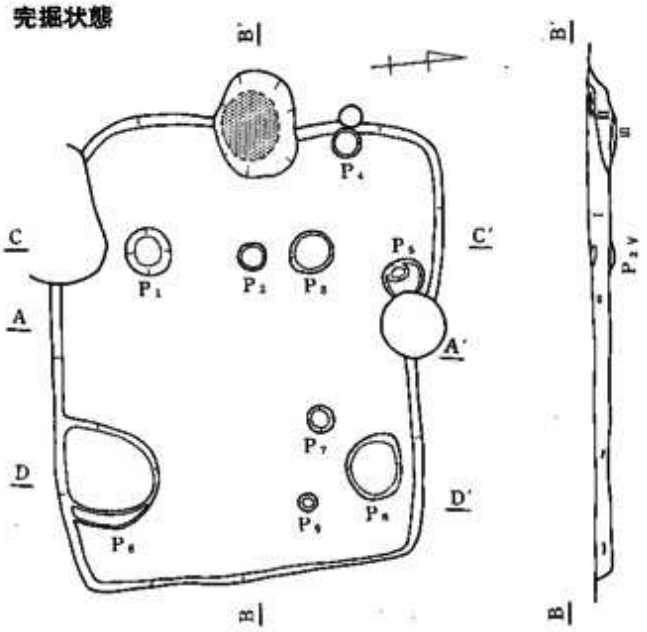


第11図　第９・13号住居址

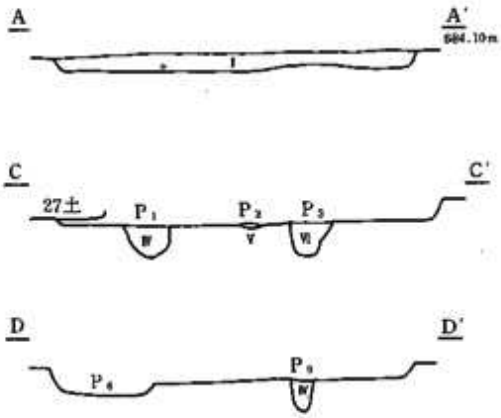
出土状態

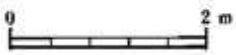


完掘状態

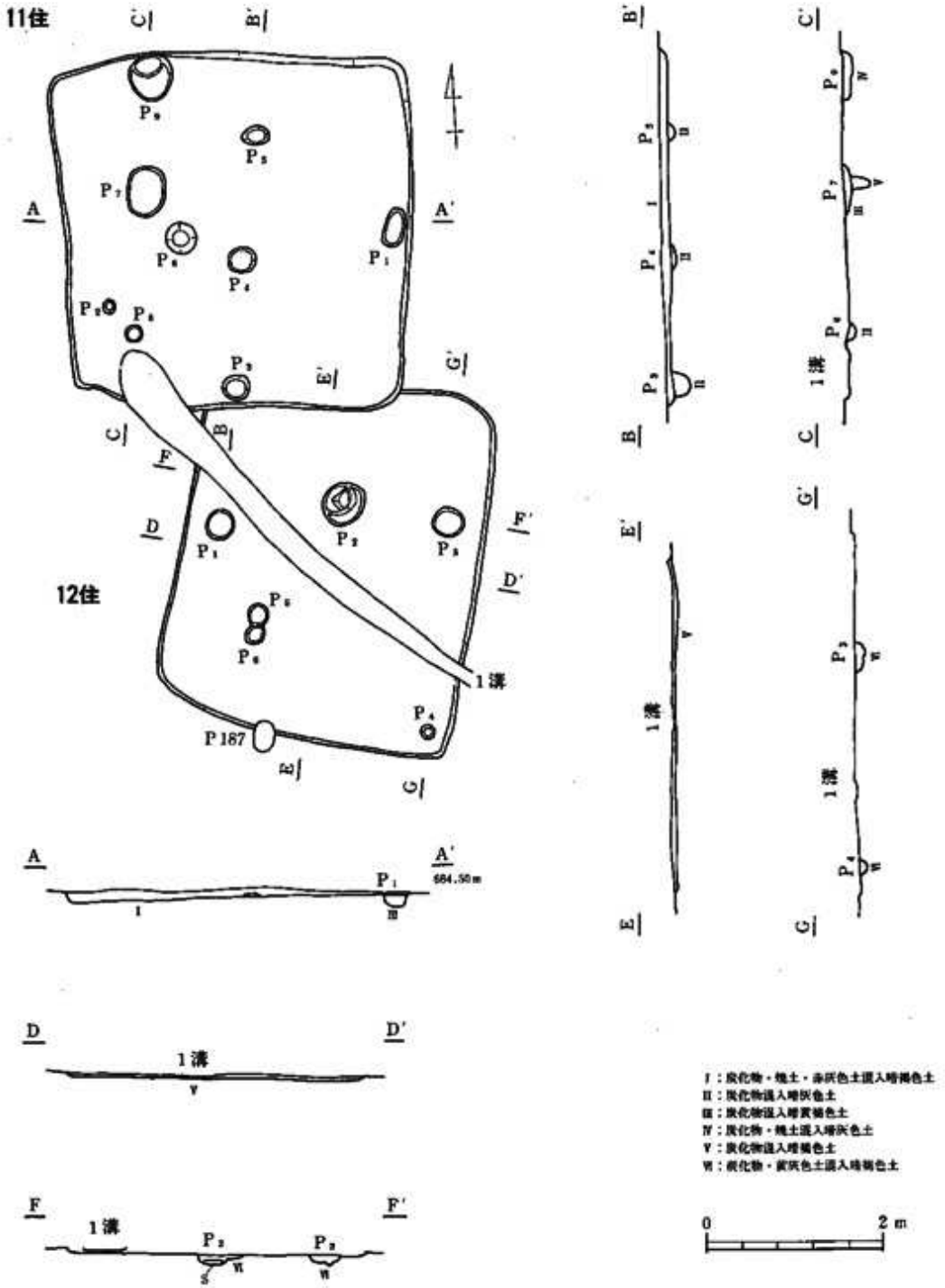


I：炭化物・焼土混入灰褐色土
（カマド付近は特に炭化物・焼土が多くなる）
II：焼土多量・炭化物混入暗灰褐色土
III：地土
IV：炭化物・焼土混入暗褐色土
V：炭化物混入黄灰色土
VI：炭化物・黄灰色土混入暗褐色土

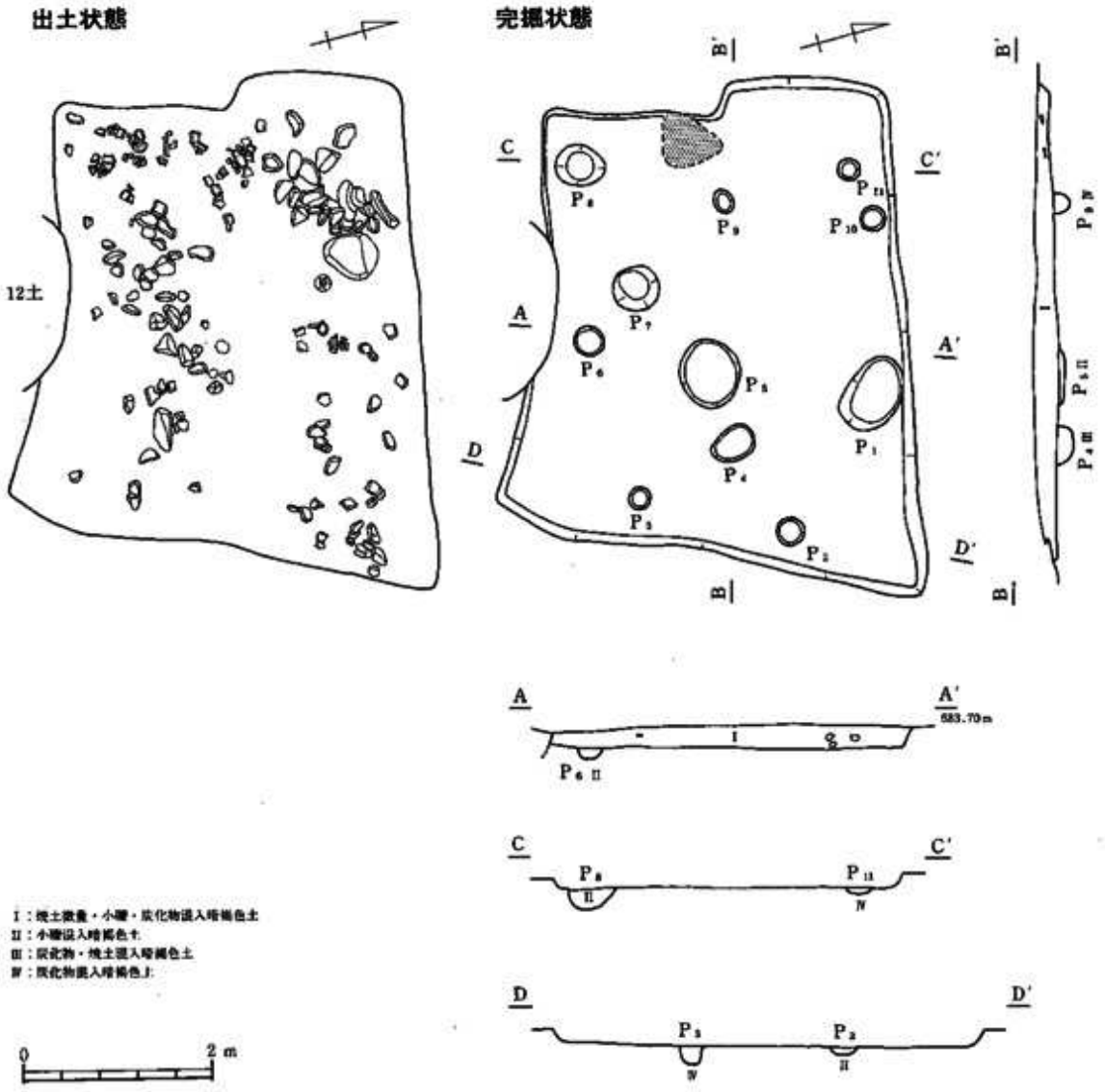




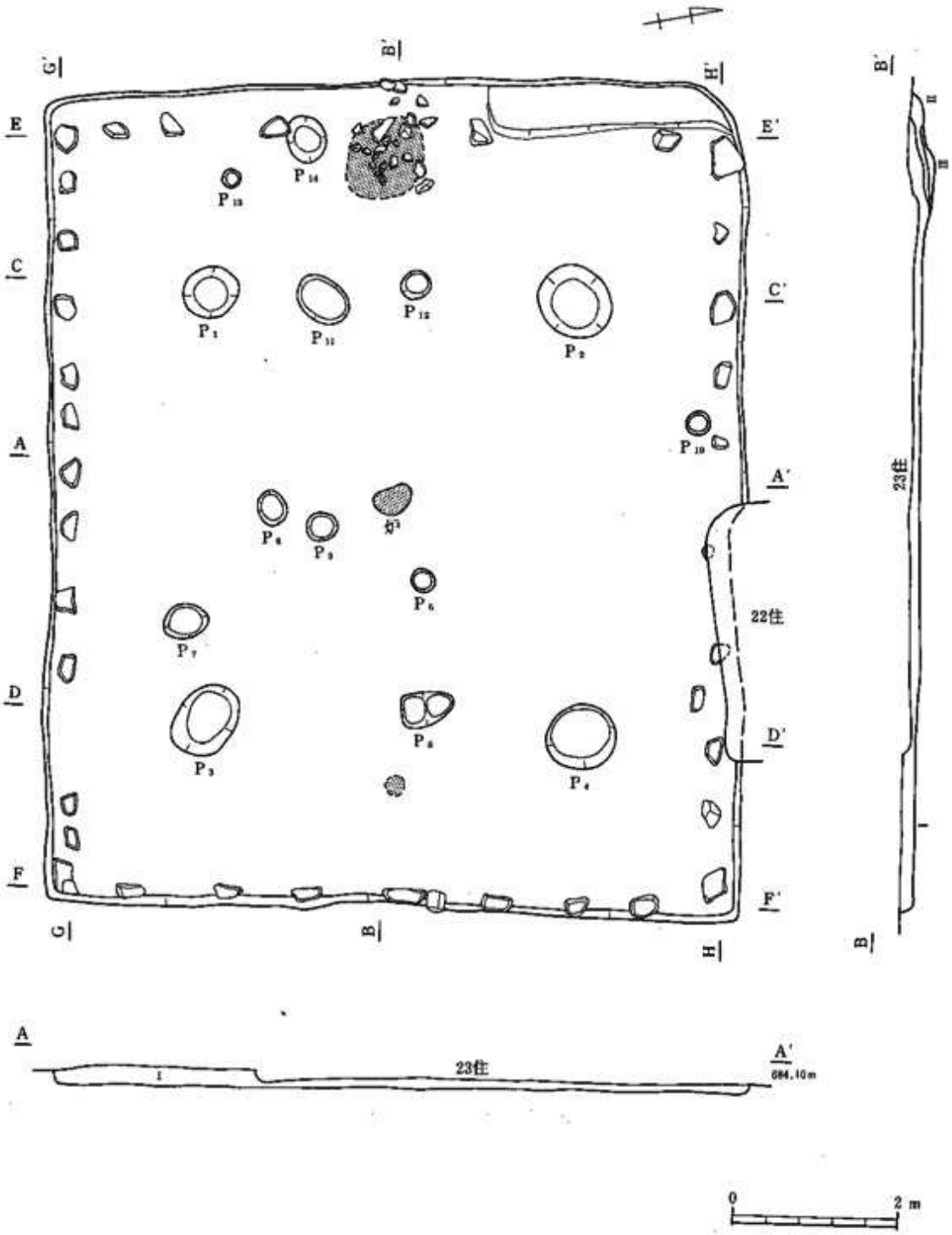
第12図　第10号住居址



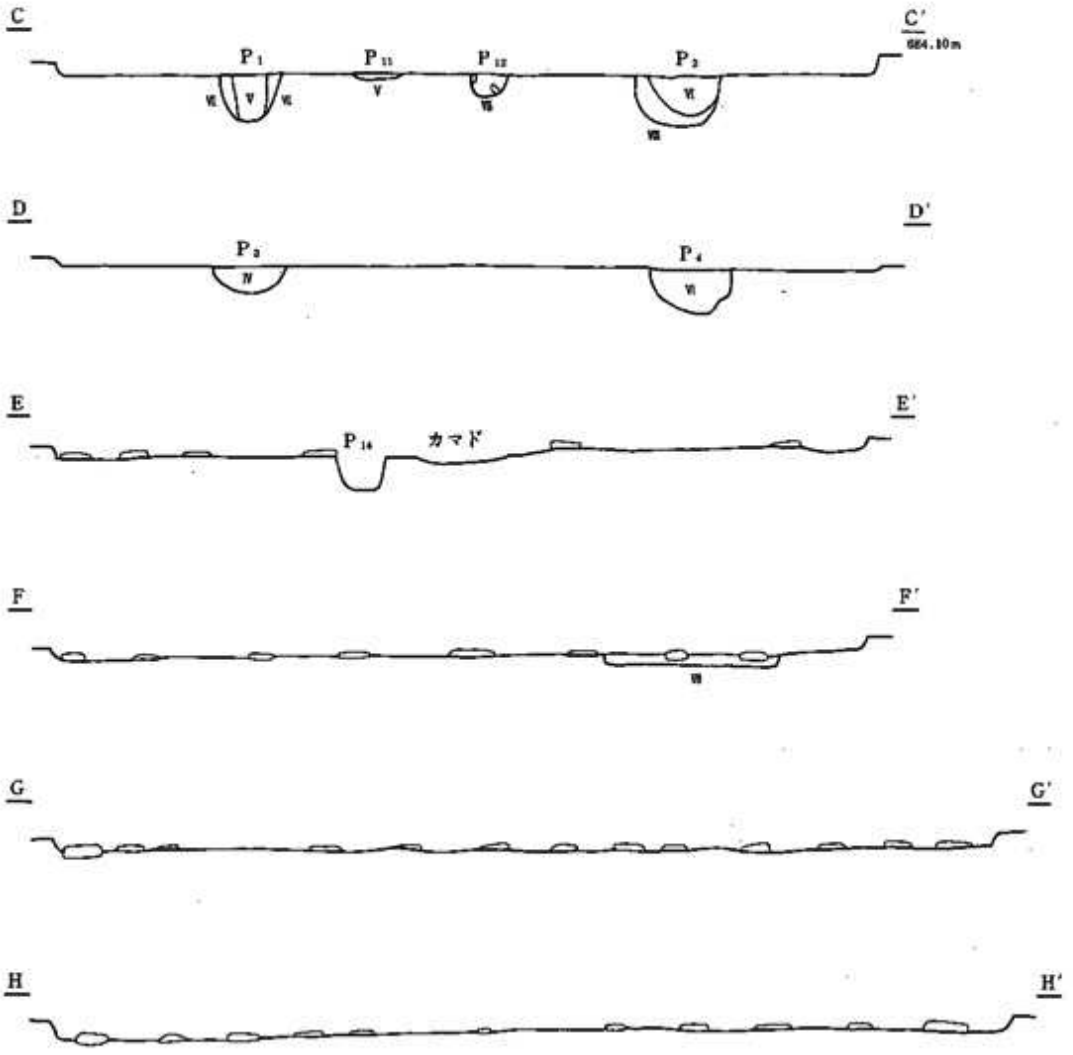
第13図　第11・12号住居址



第14図　第15号住居址



第15図　第14号住居址（1）

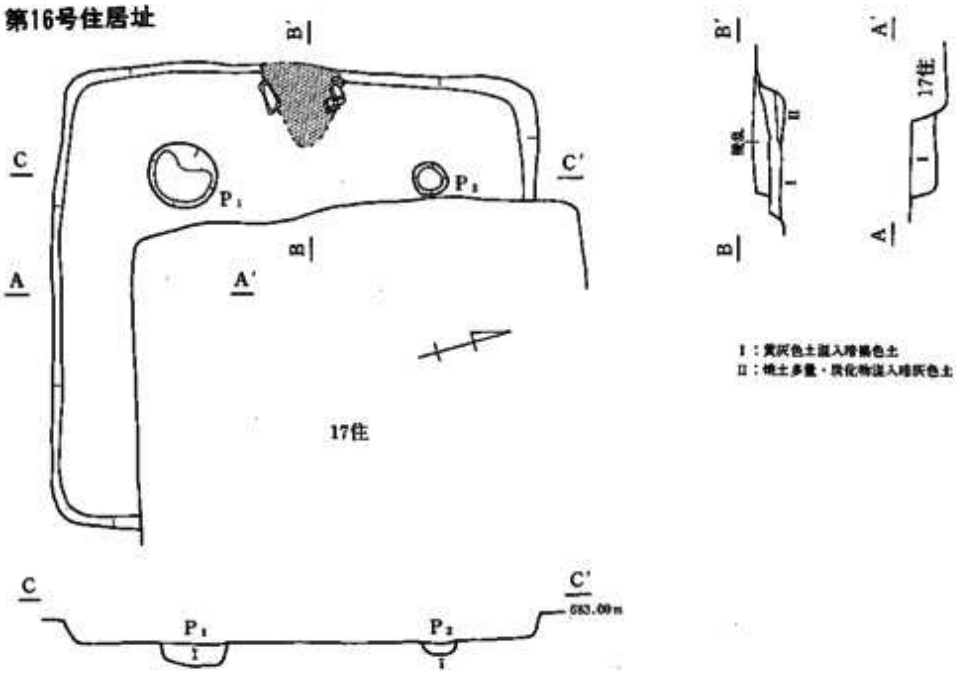


Ⅰ：炭化物混入暗褐色土
（東西ベルト、カマド付近は焼土・炭化物が多い）
Ⅱ：焼土多量・炭化物微量混入暗灰色土
Ⅲ：焼土
Ⅳ：炭化物・黄灰色土混入暗褐色土
Ⅴ：暗褐色土
Ⅵ：焼土・炭化物・黄灰色土混入暗褐色土
Ⅶ：黄灰色土混入暗褐色土
Ⅷ：暗黄灰色土混入暗褐色土（砂質）

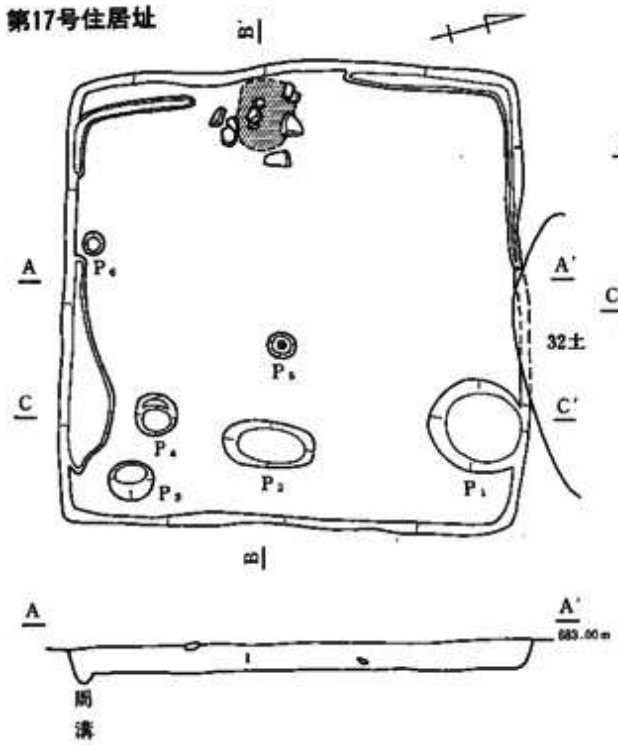
0　2 m

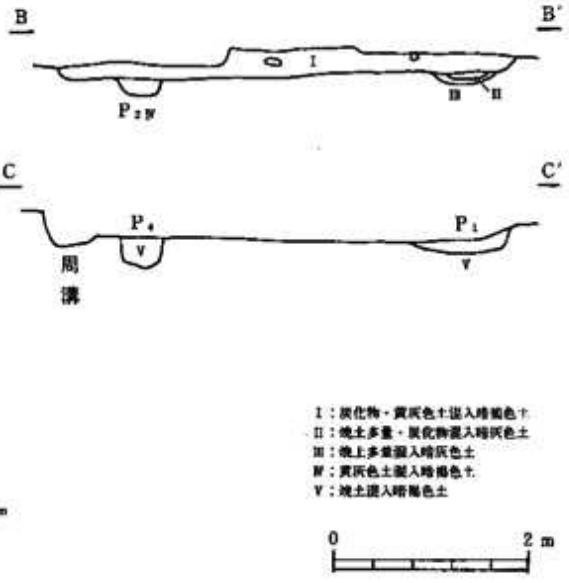
第16図　第14号住居址（2）

第16号住居址



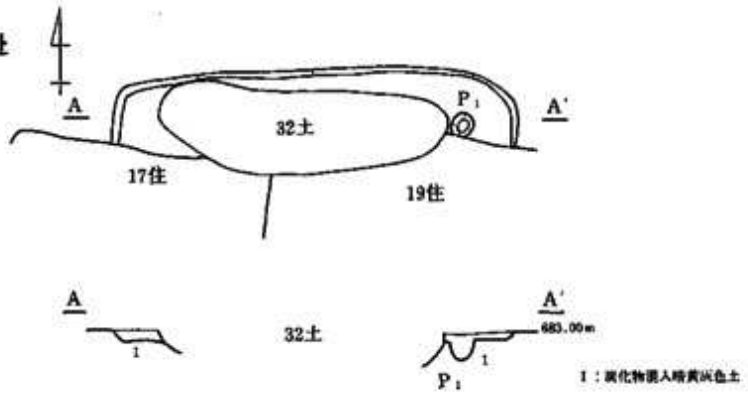
第17号住居址



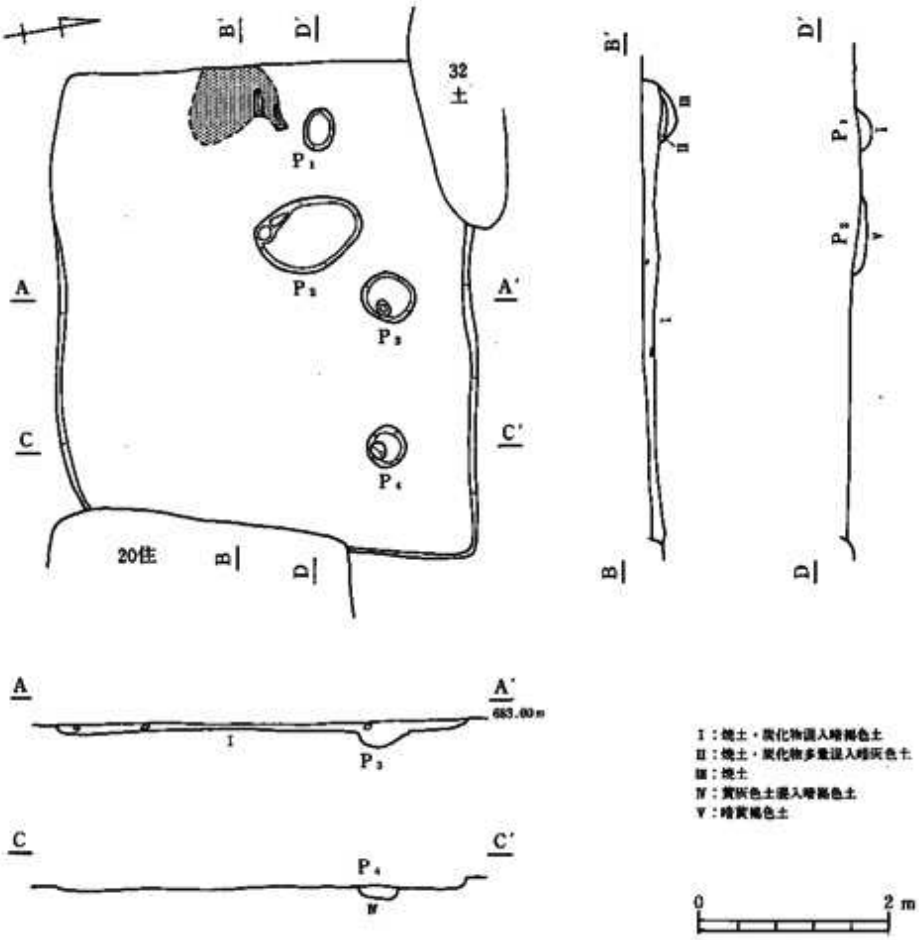


第17図　第16・17号住居址

第18号住居址

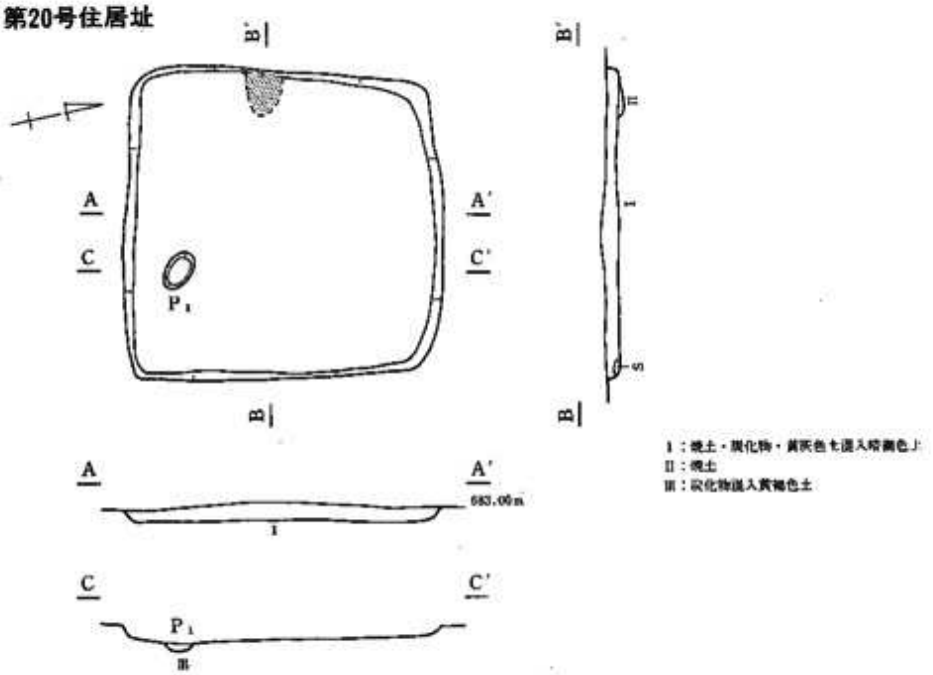


第19号住居址

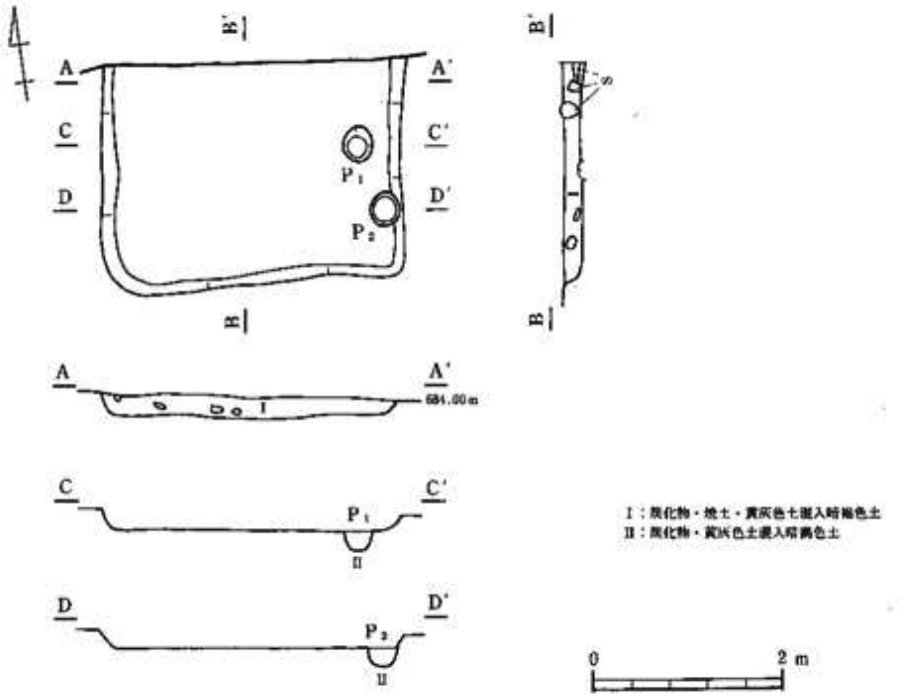


第18図　第18・19号住居址

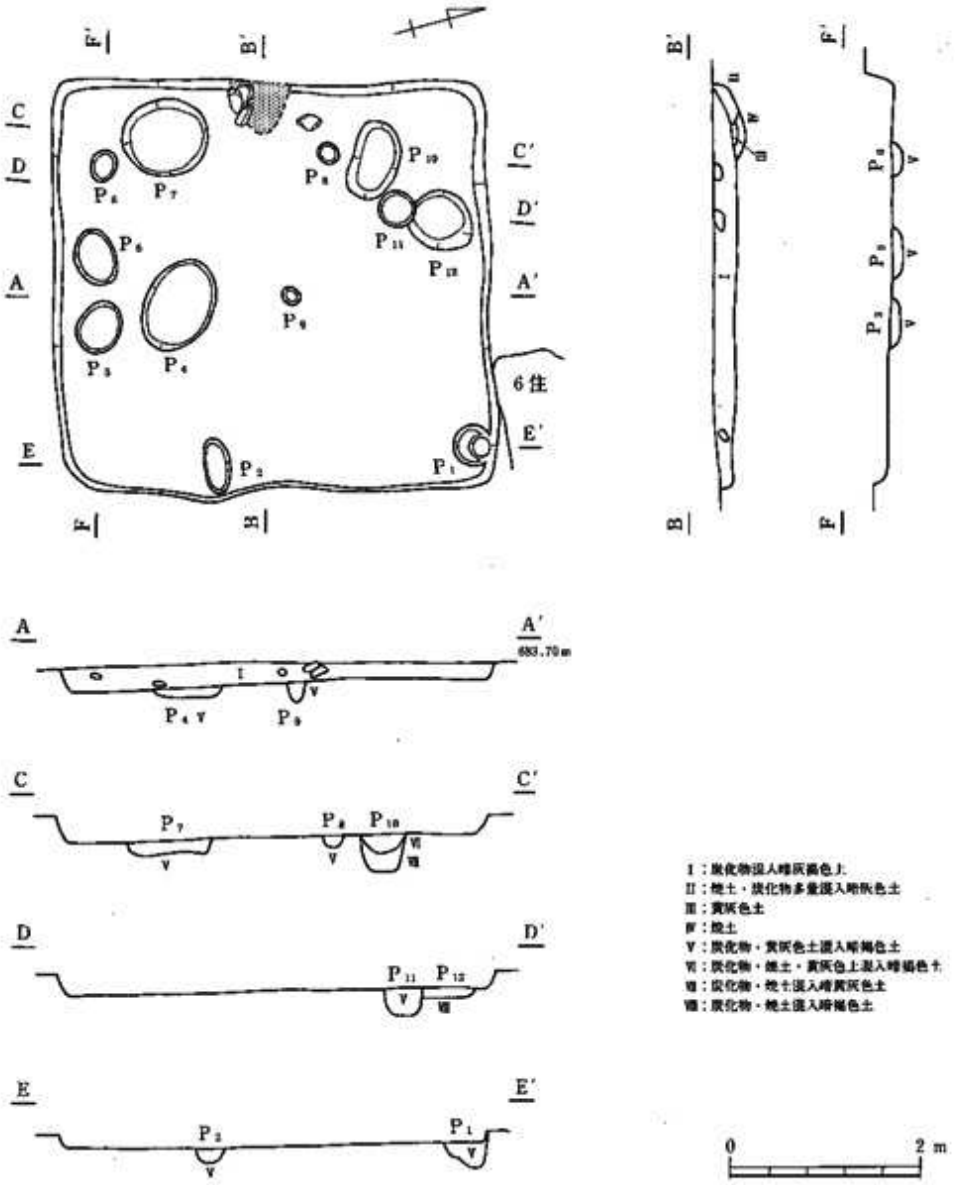
第20号住居址



第22号住居址



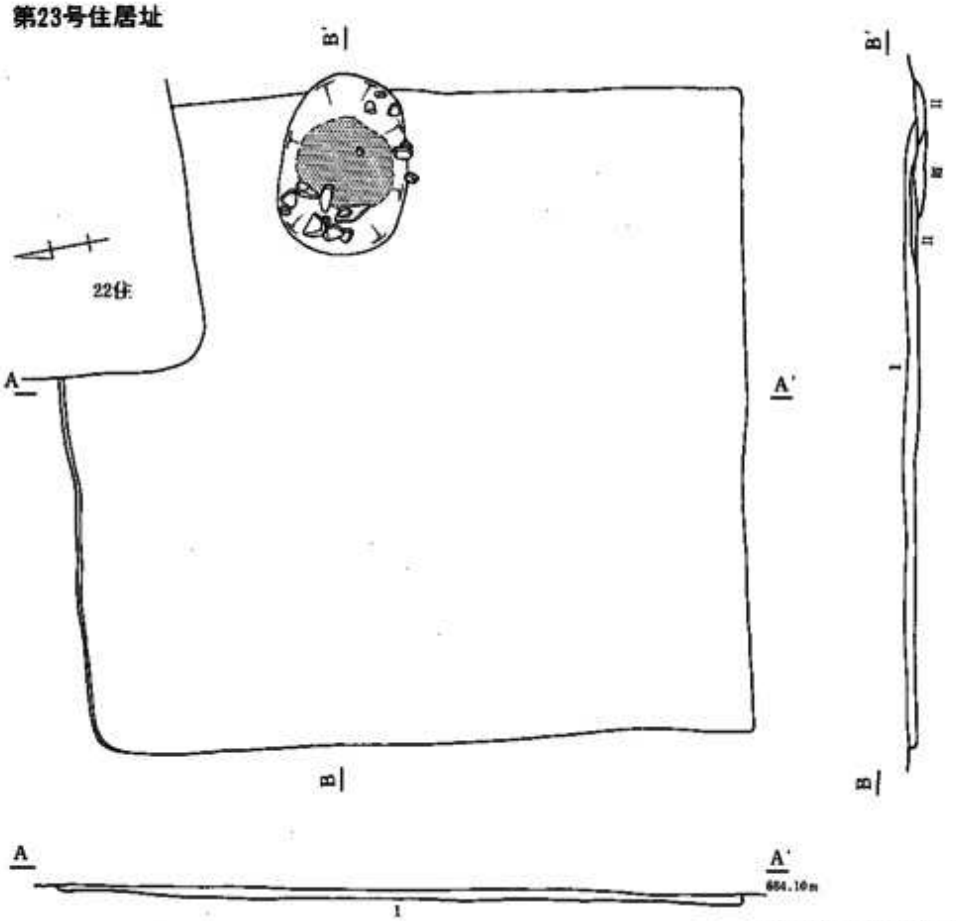
第19図　第20・22号住居址



I：炭化物混入暗灰褐色土
II：地土・炭化物多量混入暗灰色土
III：黄灰色土
IV：地土
V：炭化物・黄灰色土混入暗褐色土
VI：炭化物・地土・黄灰色土混入暗褐色土
VII：炭化物・地土混入暗黄灰色土
VIII：炭化物・地土混入暗褐色土

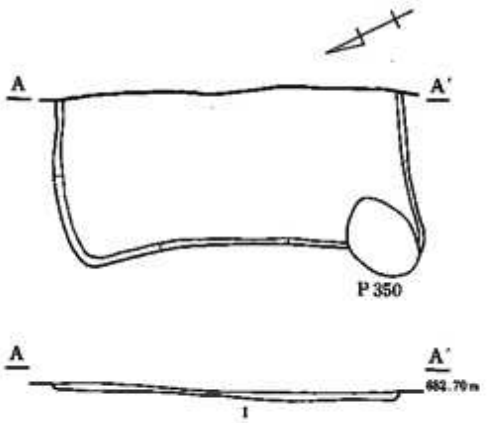
第20図　第21号住居址

第23号住居址



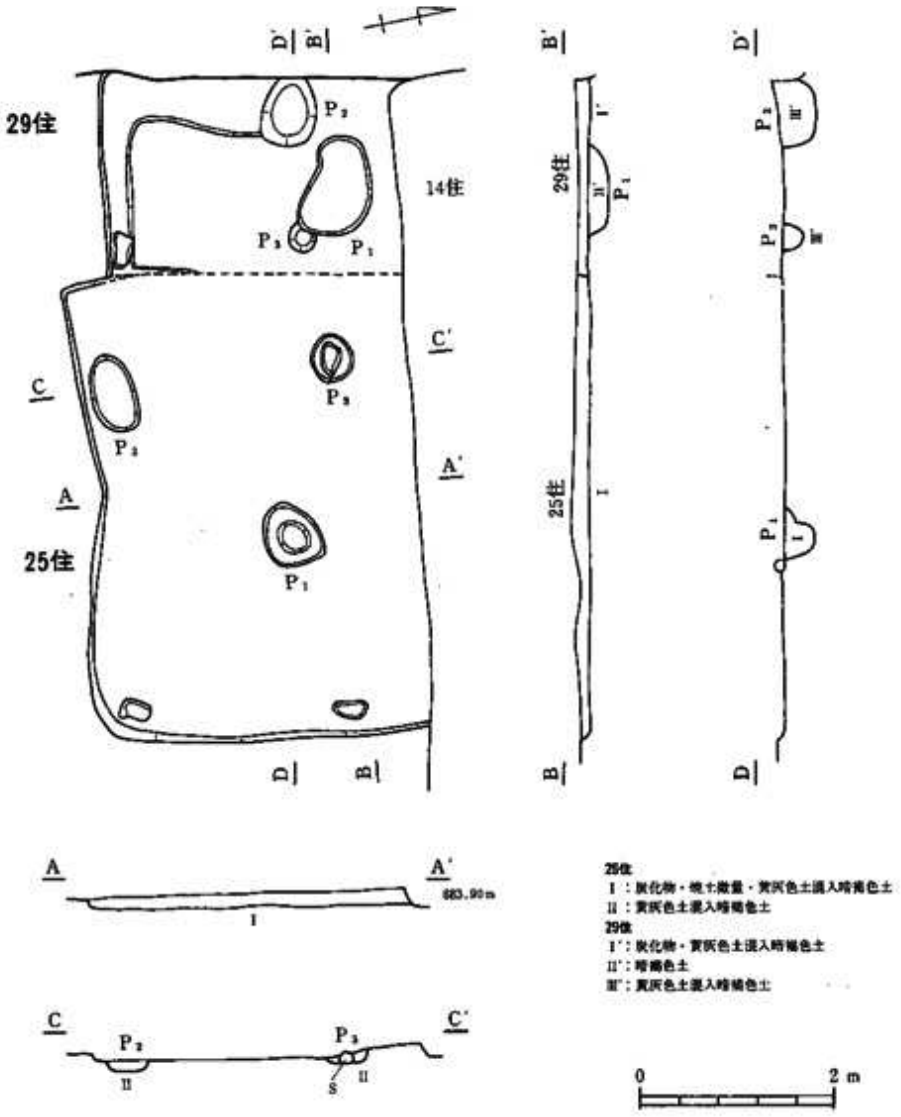
I：層（φ5cm大）・焼化物・黄灰色土混入暗黄褐色土
II：焼土多量・炭化物混入暗灰色土
III：焼土

第24号住居址



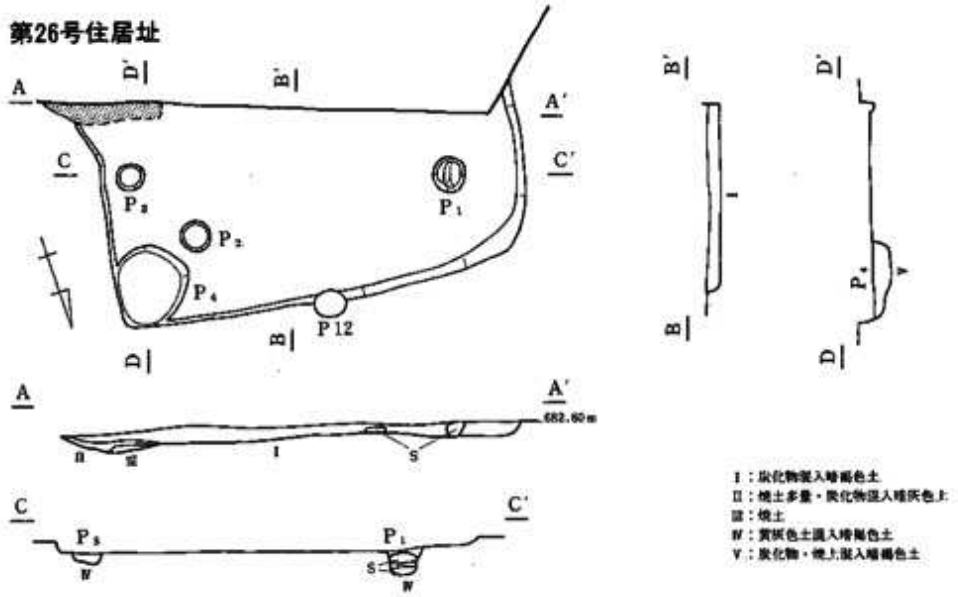
I：炭化物混入暗褐色土

第21図　第23・24号住居址

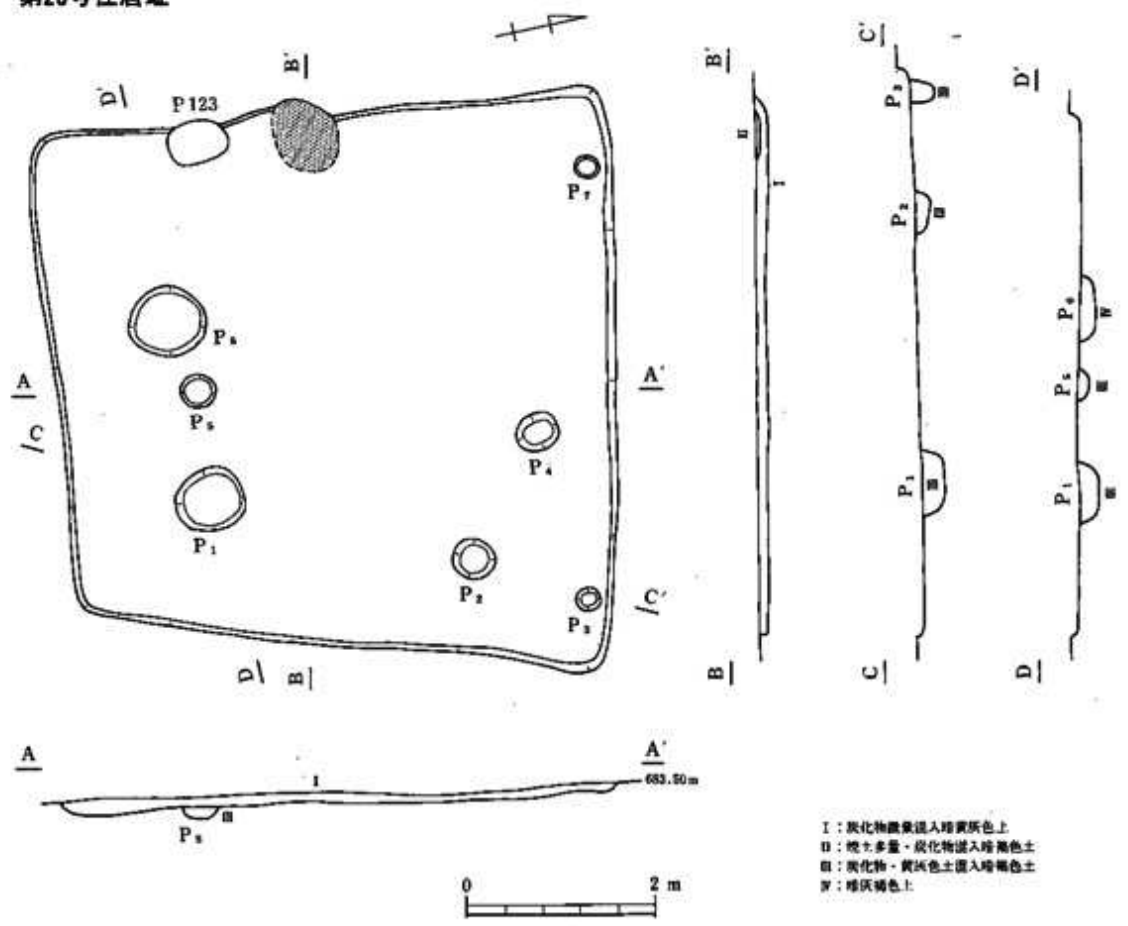


第22図　第25・29号住居址

第26号住居址

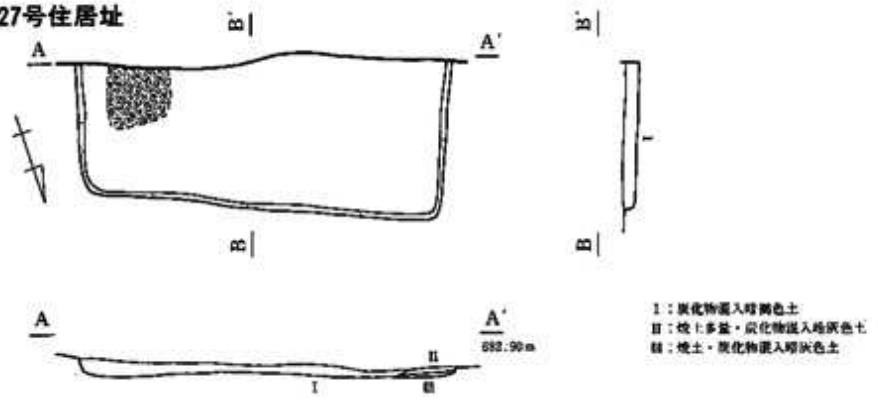


第28号住居址

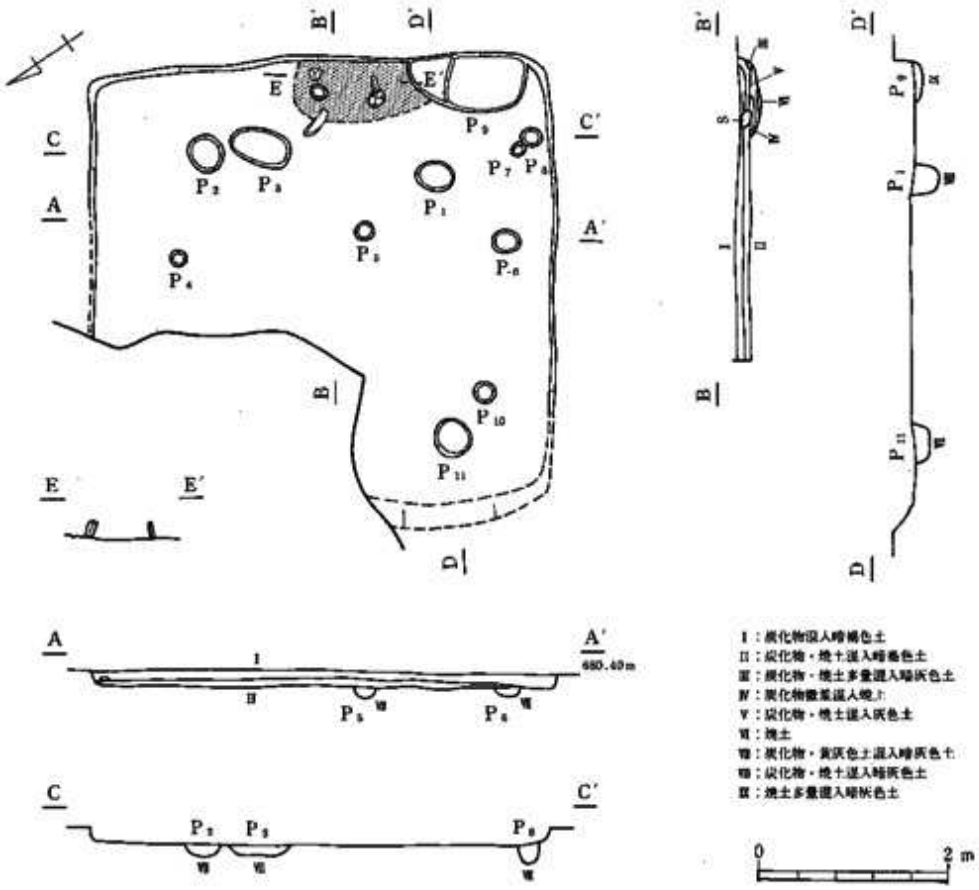


第23図　第26・28号住居址

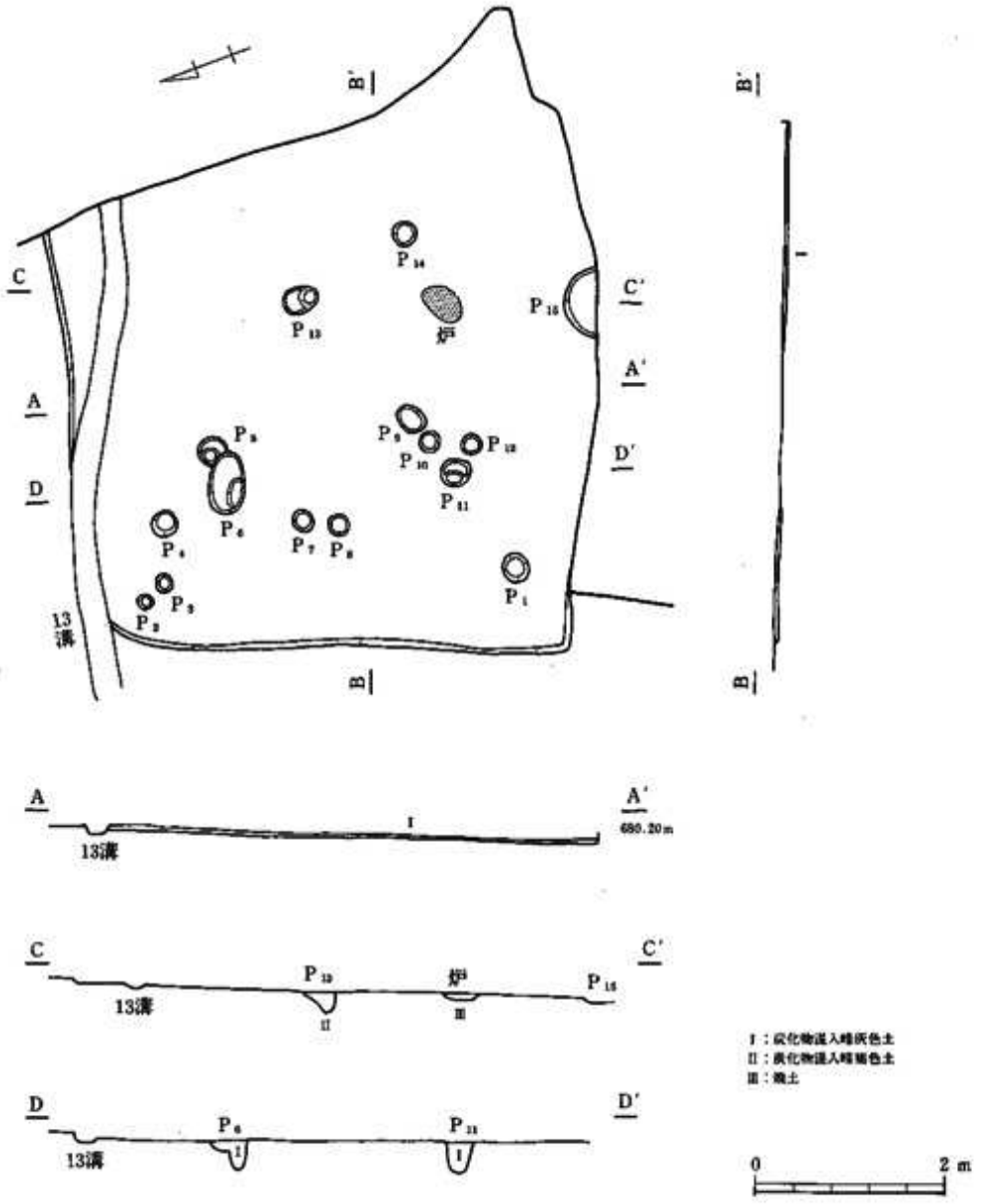
第27号住居址



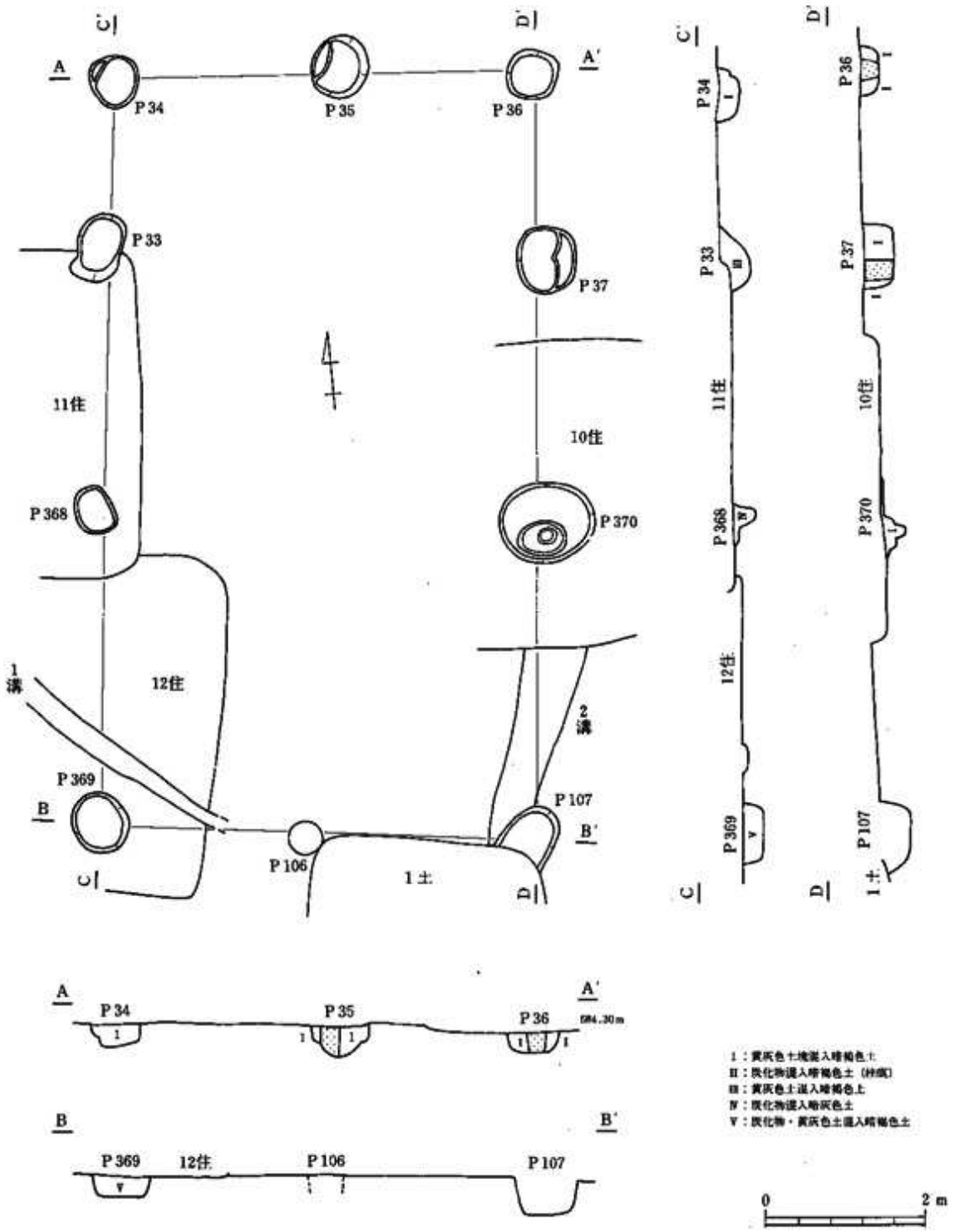
第30号住居址



第24図　第27・30号住居址

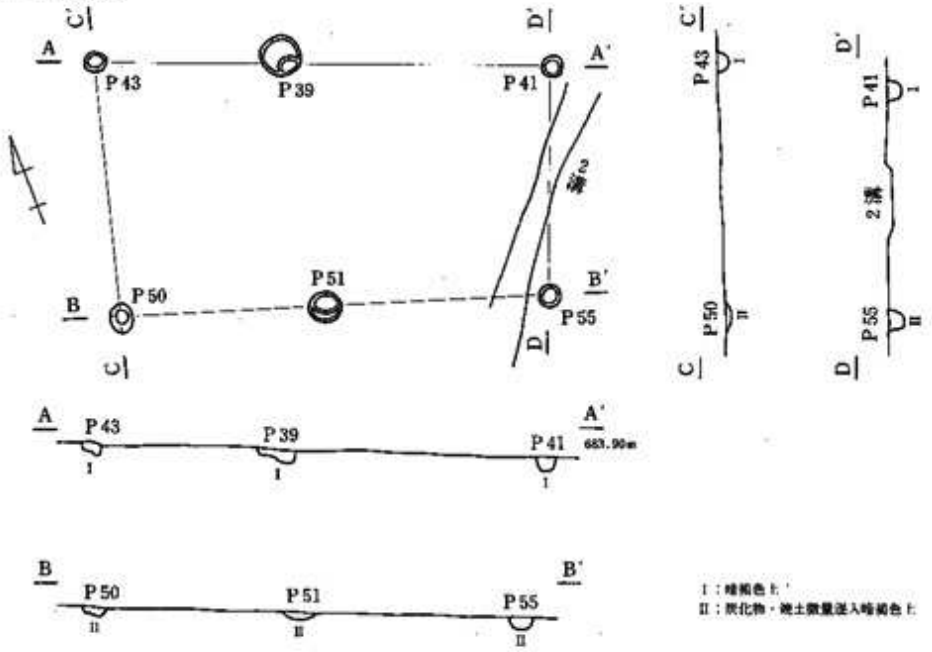


第25図　第31号住居址

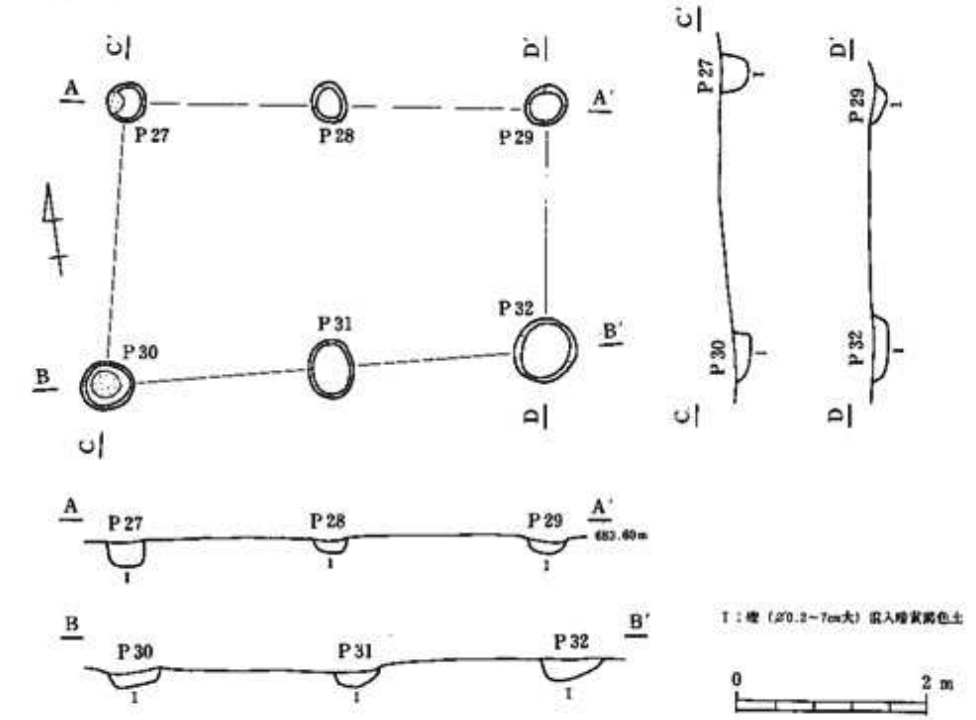

C'
D'
A
A'
P 34
P 35
P 36
P 33
P 37
11住
10住
P 368
P 370
1
溝
12住
2
溝
P 369
P 107
B
B'
P 106
1 土
C
D
C'
D'
P 34
P 36
P 33
P 37
11住
10住
P 368
P 370
12住
P 369
P 107
1 土
A
A'
P 34
P 35
P 36
584.30m
B
B'
P 369
12住
P 106
P 107
I：黄灰色土塊混入暗褐色土
II：炭化物混入暗褐色土（柱痕）
III：黄灰色土混入暗褐色土
IV：炭化物混入暗灰色土
V：炭化物・黄灰色土混入暗褐色土
0
2 m

第26図　第1号建物址

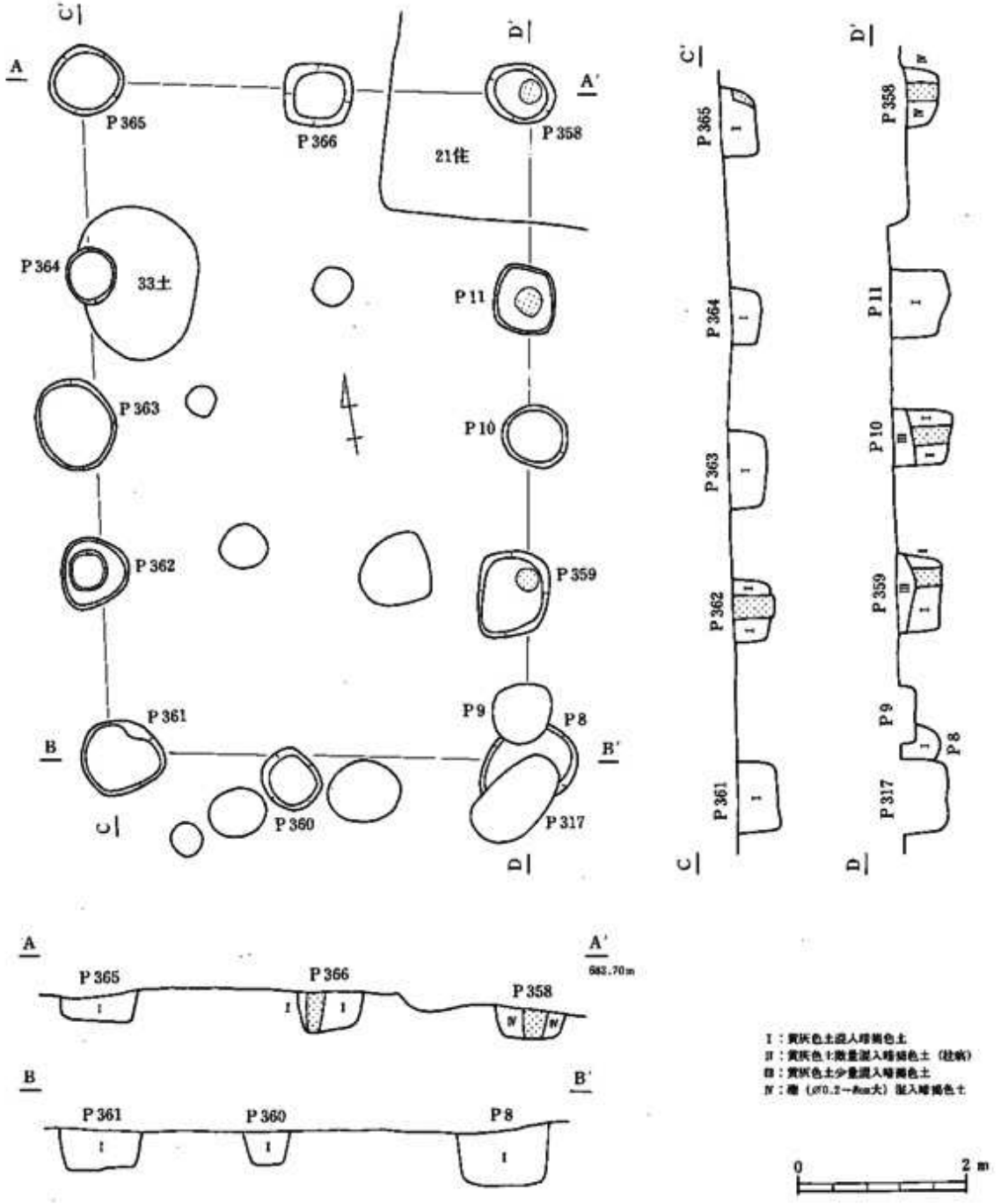
第２号建物址



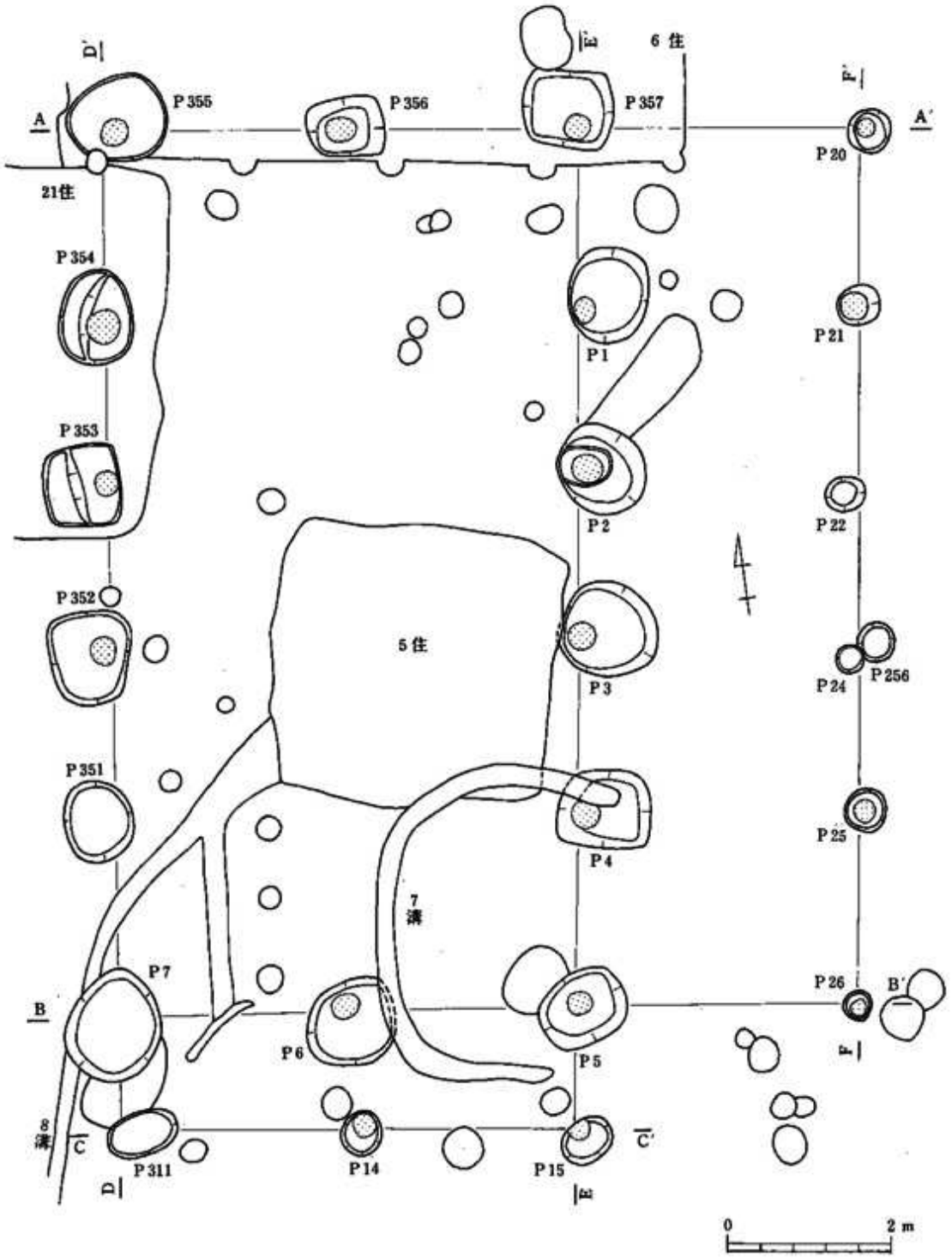
第３号建物址



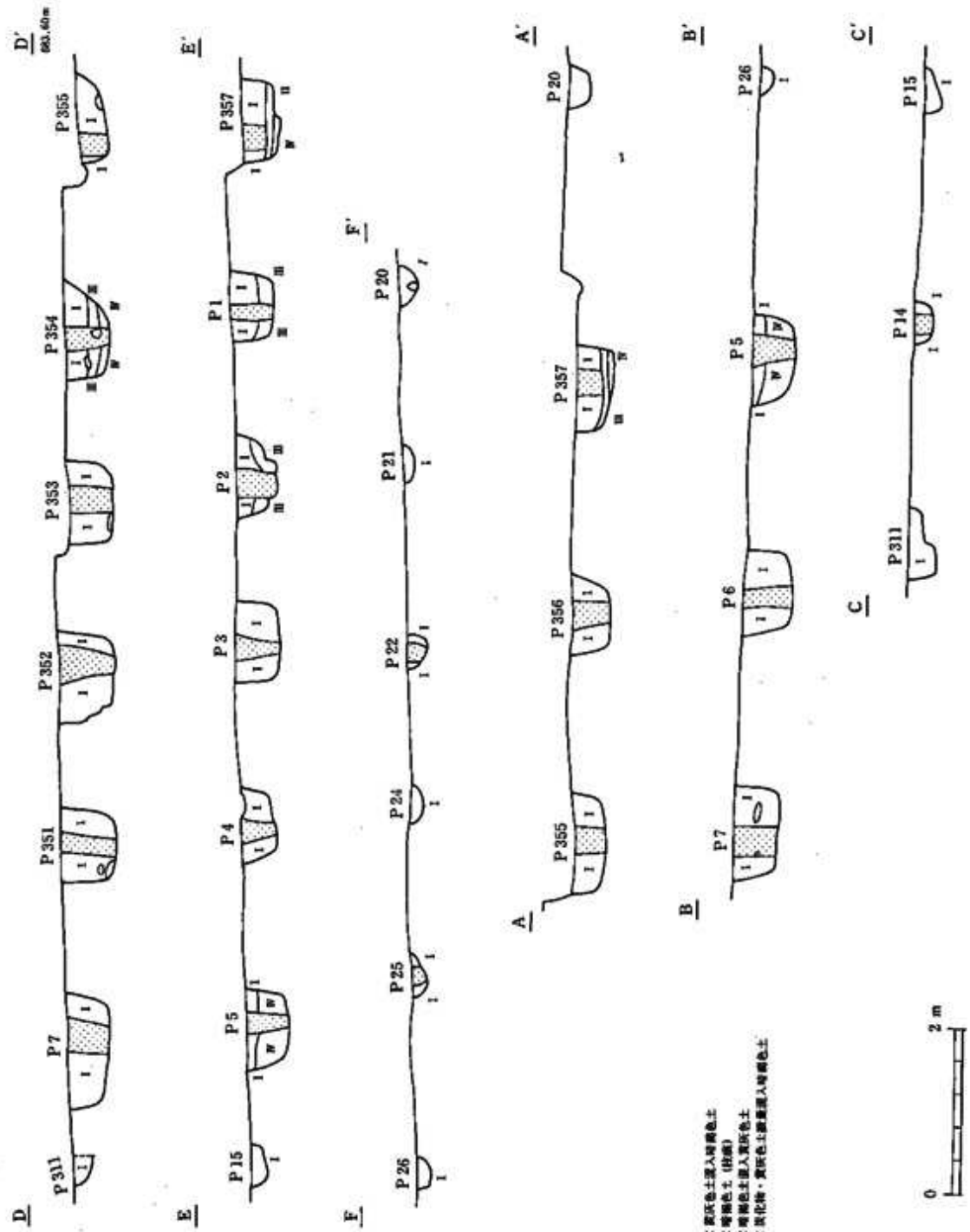
第27図　第２・３号建物址


C
D
A
A'
P365
P366
P358
21住
P364
33土
P11
P363
P10
P362
P359
P361
P9
P8
B
B'
P360
P317
C'
D'
P365
P364
P363
P362
P361
P358
P11
P10
P359
P9
P8
P317
I：黄灰色土混入暗褐色土
II：黄灰色土微量混入暗褐色土（柱痕）
III：黄灰色土少量混入暗褐色土
IV：礫（φ0.2～4cm大）混入暗褐色土
0
2 m

第28図　第5号建物址

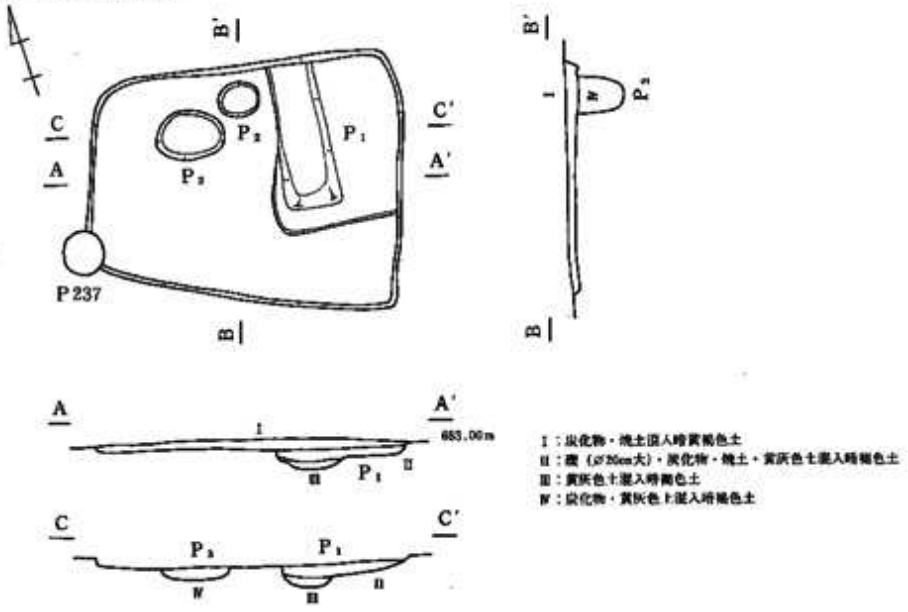


第29図　第4号建物址（1）

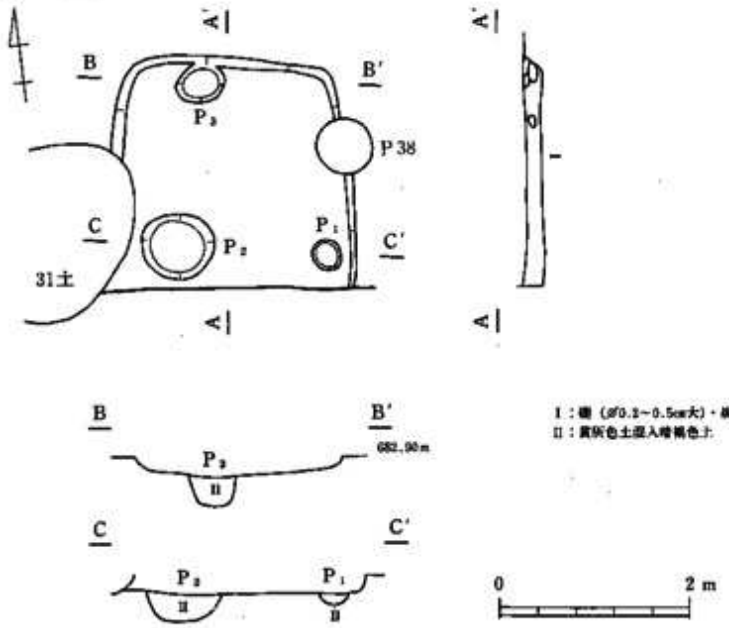


第30図　第4号建物址（2）

第1号竪穴状遺構



第2号竪穴状遺構



第31図　竪穴状遺構

第2号溝址

I：炭化物・黄灰色土混入暗褐色土

II：地土・炭化物・黄灰色土混入暗褐色土

第3号溝址

I：黄灰色土混入暗褐色土

第5号溝址

I：黄灰色土混入暗褐色土

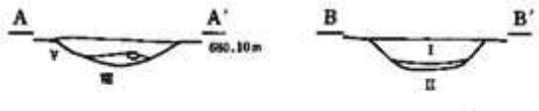
第6号溝址

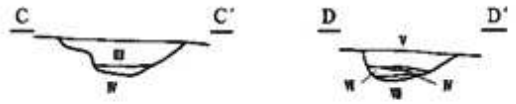
I：暗黄褐色土

第7号溝址

I：炭化物混入暗黄灰色土

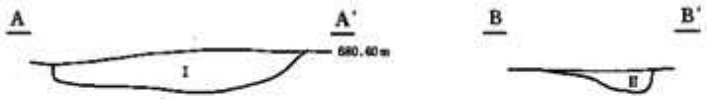
第10号溝址





I：黄灰色土混入暗褐色土
II：黄灰色土混入暗灰色砂礫（礫φ0.2～0.3cm）
III：炭化物・黄灰色土混入暗褐色土
IV：暗黄褐色砂
V：暗褐色土
VI：暗褐色土（V層より暗）
VII：暗黄灰褐色土（砂質）
VIII：暗灰色砂礫（礫φ0.2～0.3cm）

第11号溝址

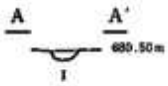


I：炭化物混入暗灰色土
II：炭化物・地土微量混入暗褐色土

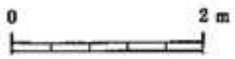
第12号溝址

I：黄灰色土混入暗褐色土

第13号溝址

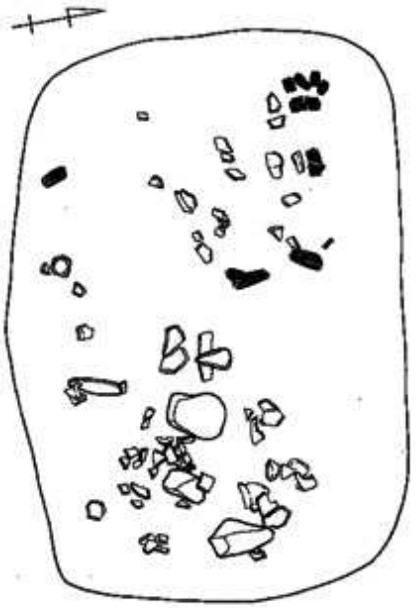


I：黄灰色土混入灰色土



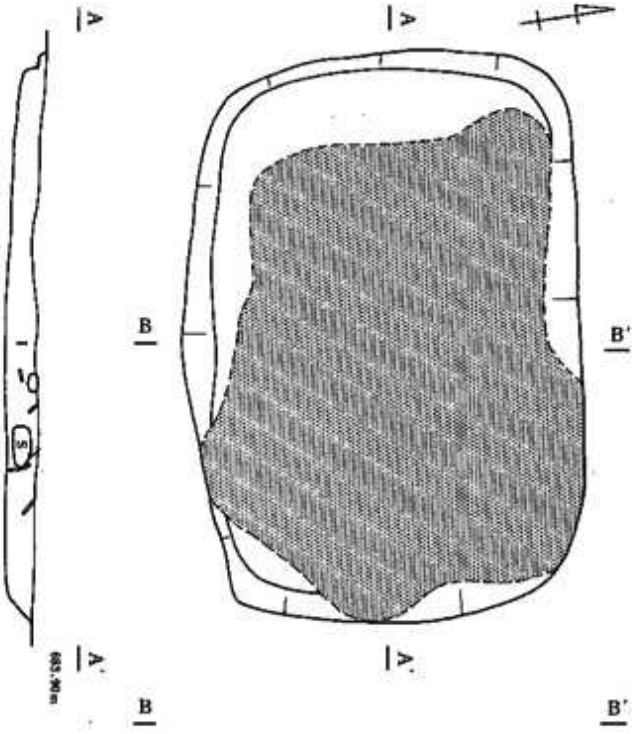
第32図　溝址土層

第１号土坑
出土状態

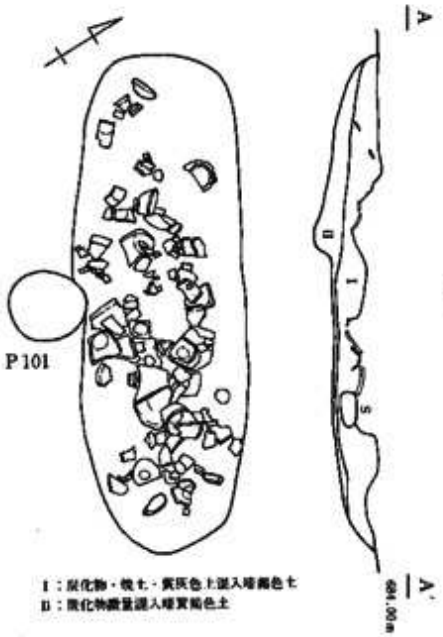


Ⅰ：炭化物・焼土多量混入黒褐色土

完掘状態

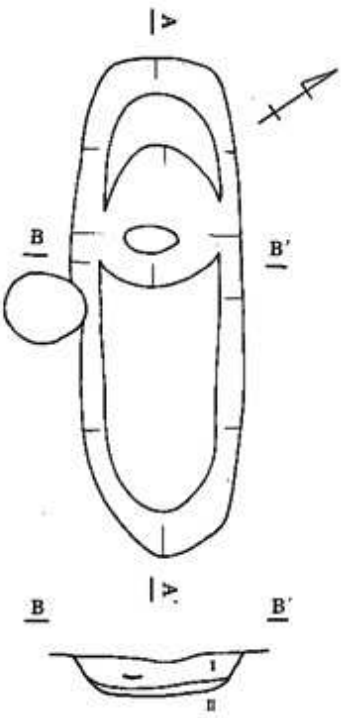


第34号土坑
出土状態

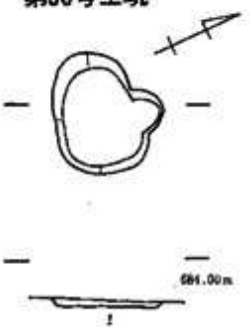


Ⅰ：炭化物・焼土・黄灰色土混入暗褐色土
Ⅱ：炭化物微量混入暗黄褐色土

完掘状態



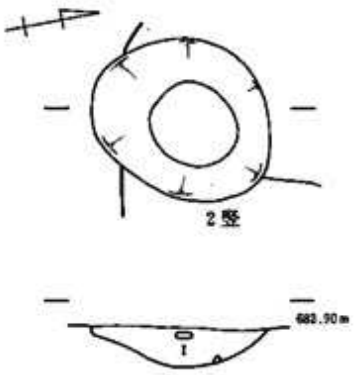
第30号土坑



Ⅰ：炭化物多量混入暗褐色土

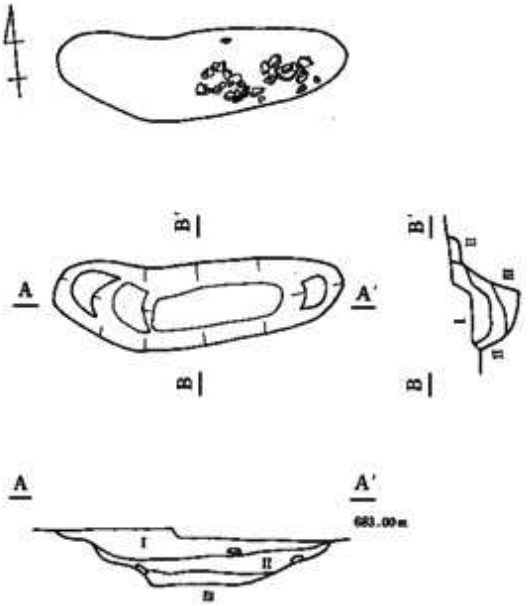
第33図　土坑（1）

第31号土坑



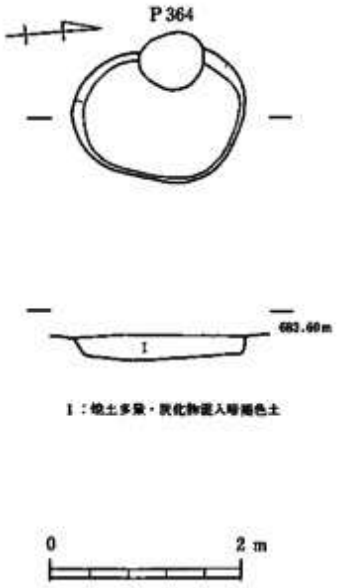
I：礫（0.2～10cm大）・灰色粘土混入暗灰色土

第32号土坑



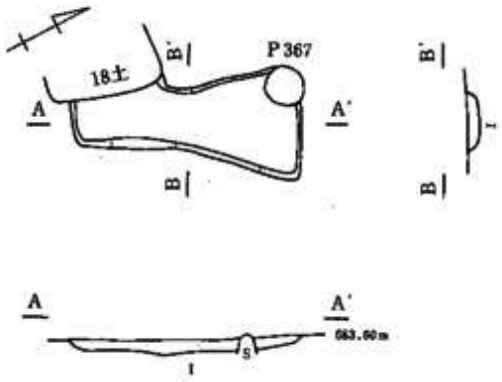
I：焼土・炭化物混入暗褐色土
（最下部に焼土・炭化物が帯状に広がる）
II：炭化物・黄灰色土混入暗褐色土
III：炭化物・黄灰色土多量混入暗褐色土

第33号土坑



I：焼土多量・炭化物混入暗褐色土

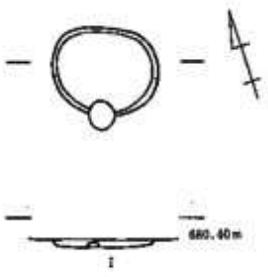
第35号土坑



I：炭化物・黄灰色土混入暗褐色土

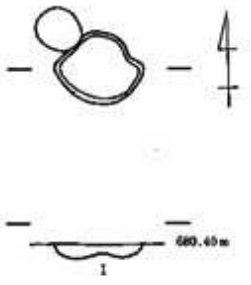
第34図　土 坑（2）

第36号土坑



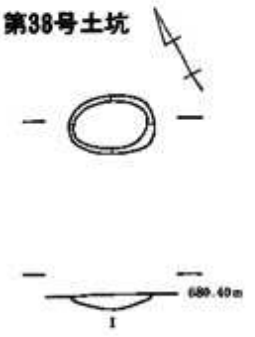
I：黄色土混入暗灰色土

第37号土坑



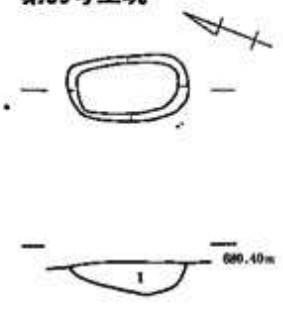
I：黄色土混入暗灰色土

第38号土坑



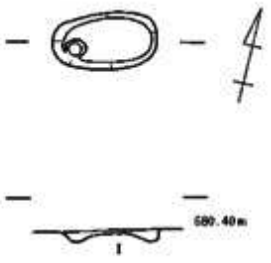
I：黄色土混入暗灰色土

第39号土坑



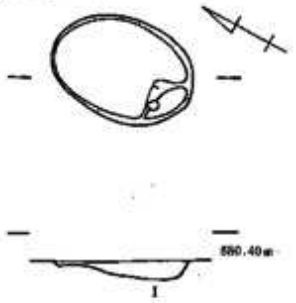
I：暗灰色土

第40号土坑



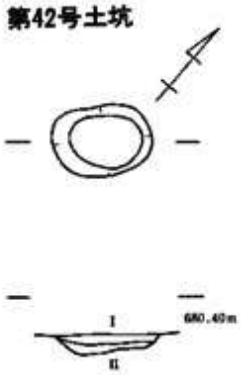
I：暗灰色土

第41号土坑



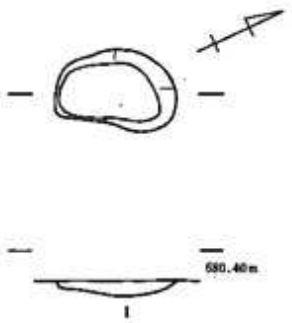
I：炭化物・焼土混入灰褐色土

第42号土坑



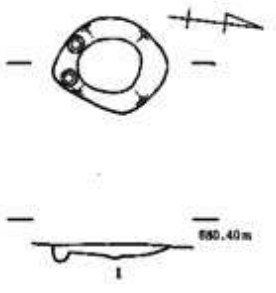
I：灰褐色土
II：炭化物混入暗灰色土

第43号土坑

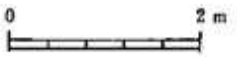


I：黄灰色土

第44号土坑

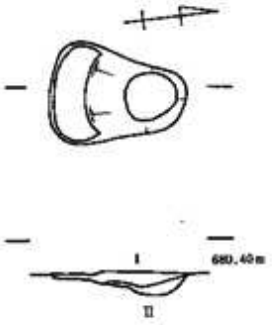


I：炭化物・黄灰色土混入暗灰色土



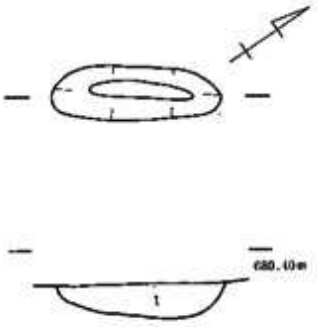
第35図　土 坑（3）

第45号土坑



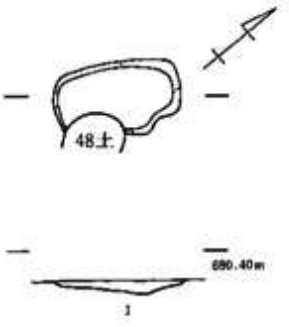
I：黄灰色粘土混入暗灰色土
II：暗灰色土

第46号土坑



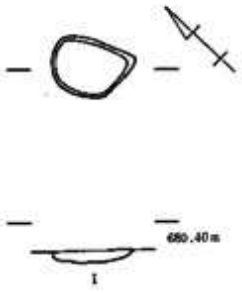
I：暗灰色土

第47号土坑



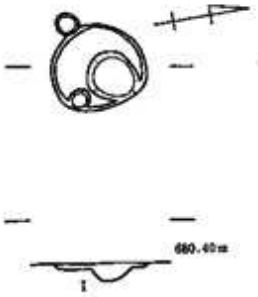
I：炭化物・焼土・灰白色粘土地混入暗褐色土

第48号土坑



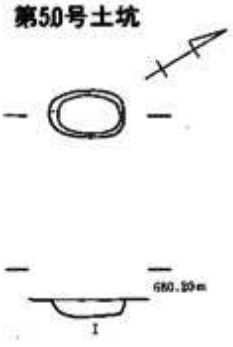
I：暗灰色土

第49号土坑



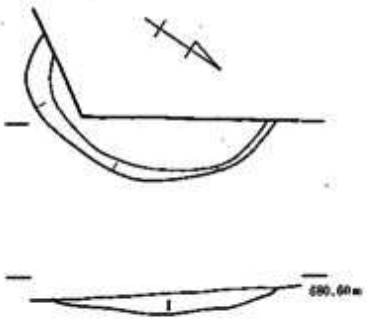
I：炭化物・焼土混入暗褐色土

第50号土坑



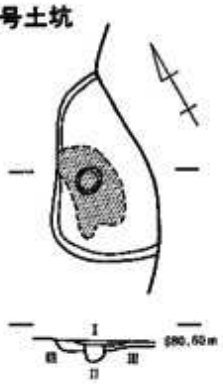
I：暗黄灰色土

第51号土坑



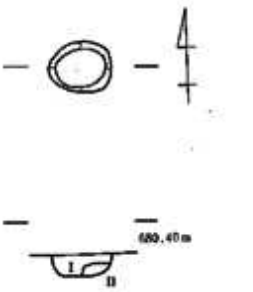
I：炭化物混入暗灰色土

第52号土坑



I：炭化物混入褐土
II：炭化物・焼土混入暗褐色土
III：炭化物混入暗灰褐色土

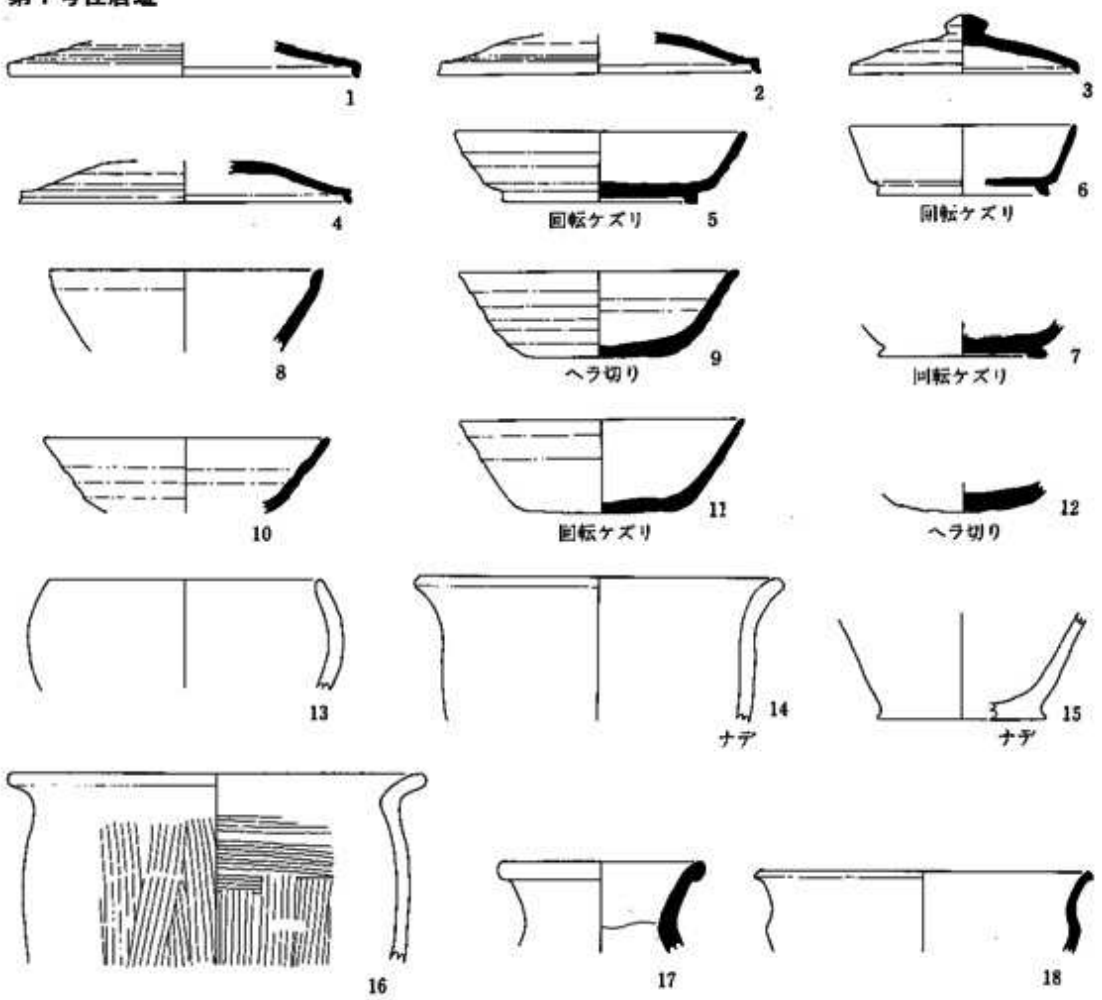
第53号土坑



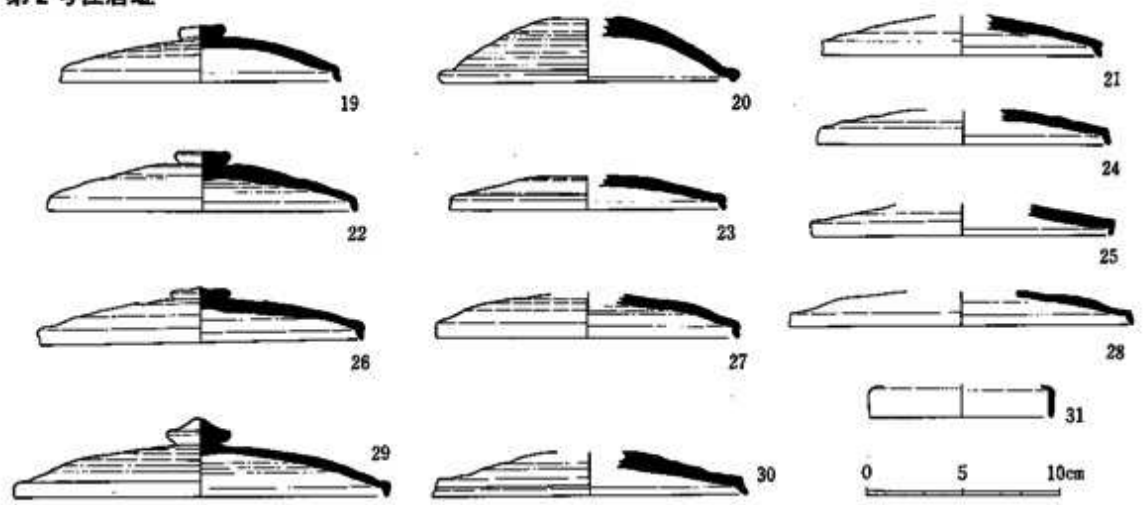
I：暗褐色土
II：灰色粘土

第36図　土坑（4）

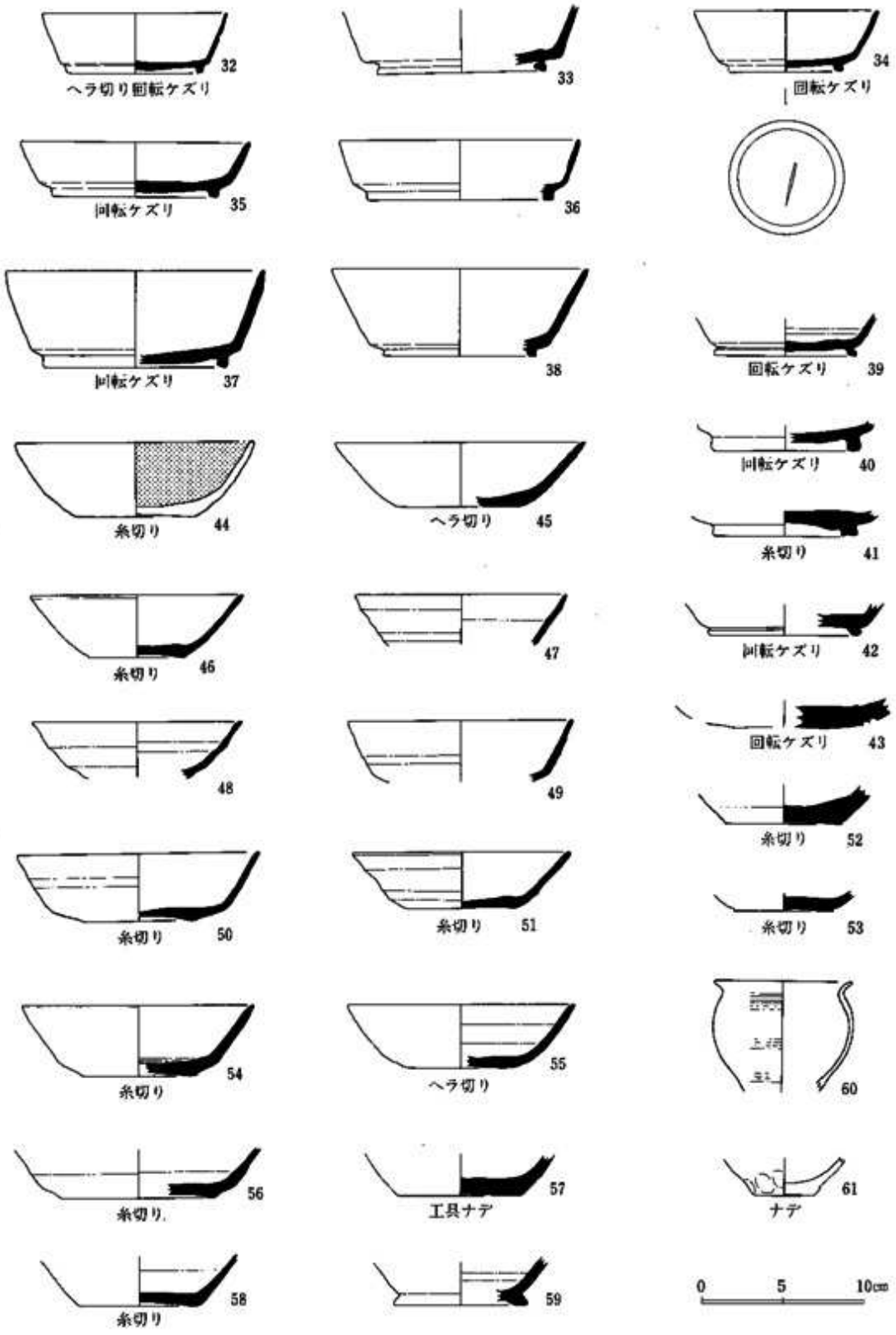
第１号住居址



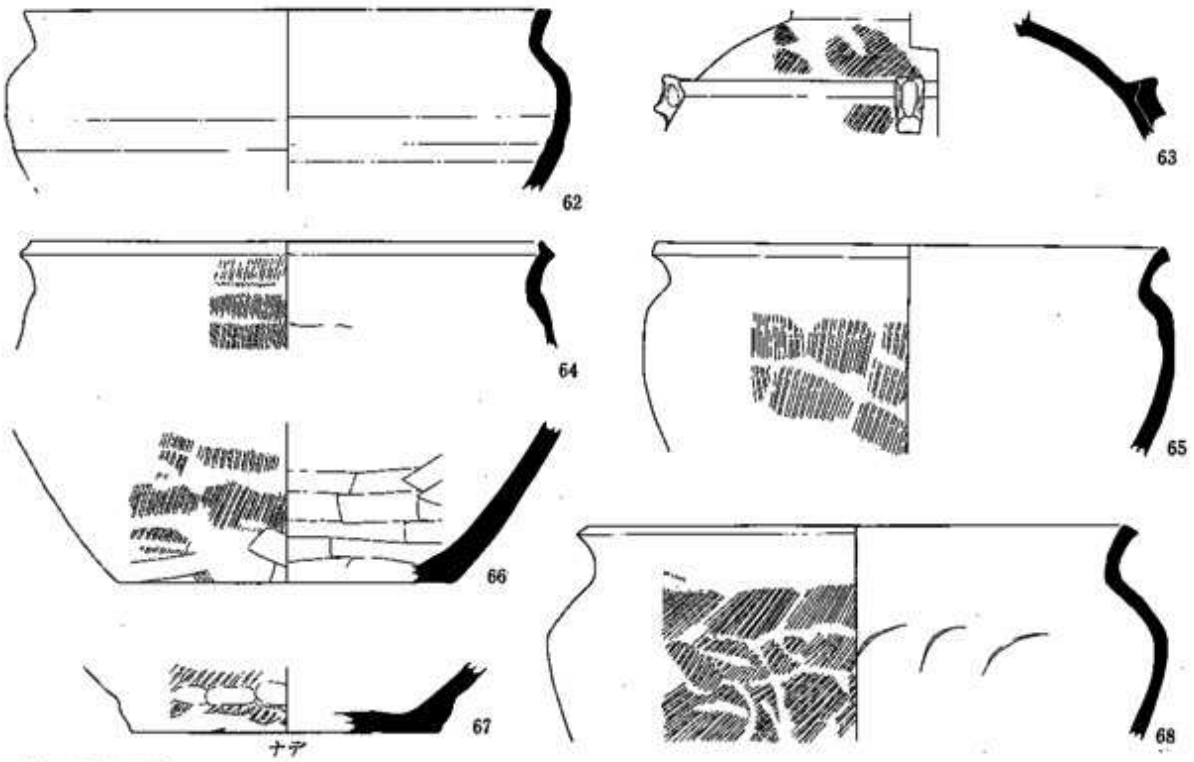
第２号住居址



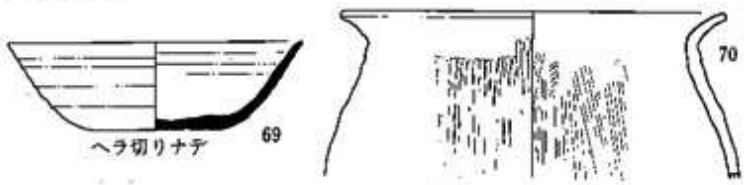
第37図　土 器 (1)


32
ヘラ切り回転ケズリ
33
34
回転ケズリ
回転ケズリ
35
36
回転ケズリ
37
38
回転ケズリ
39
糸切り
44
ヘラ切り
45
回転ケズリ
40
糸切り
41
糸切り
46
47
回転ケズリ
42
48
49
回転ケズリ
43
糸切り
52
糸切り
50
糸切り
51
糸切り
53
糸切り
54
ヘラ切り
55
60
糸切り
56
工具ナデ
57
ナデ
61
糸切り
58
59
0
5
10cm

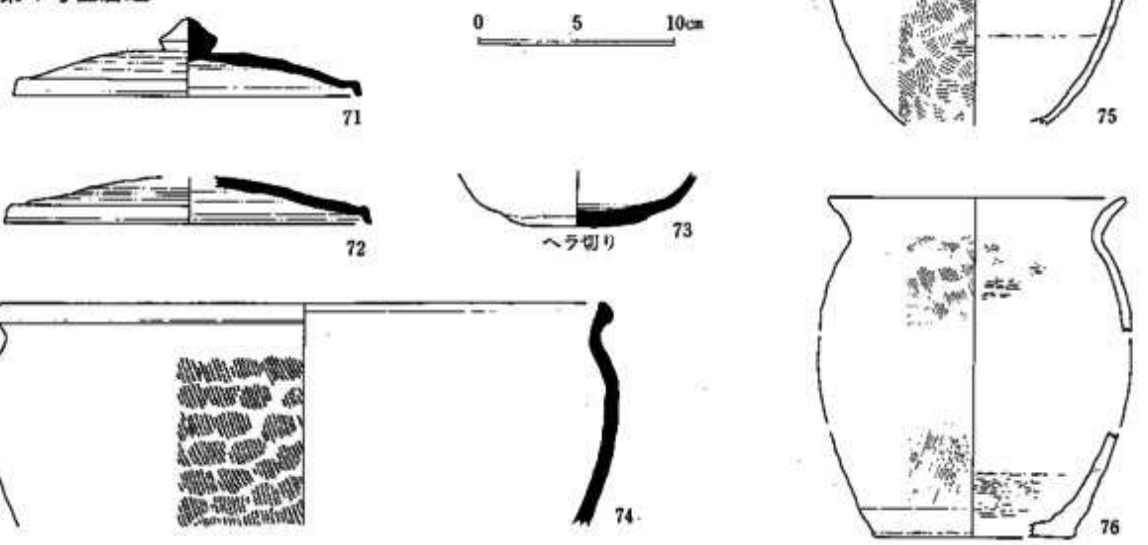
第38図　土 器 (2)



第３号住居址



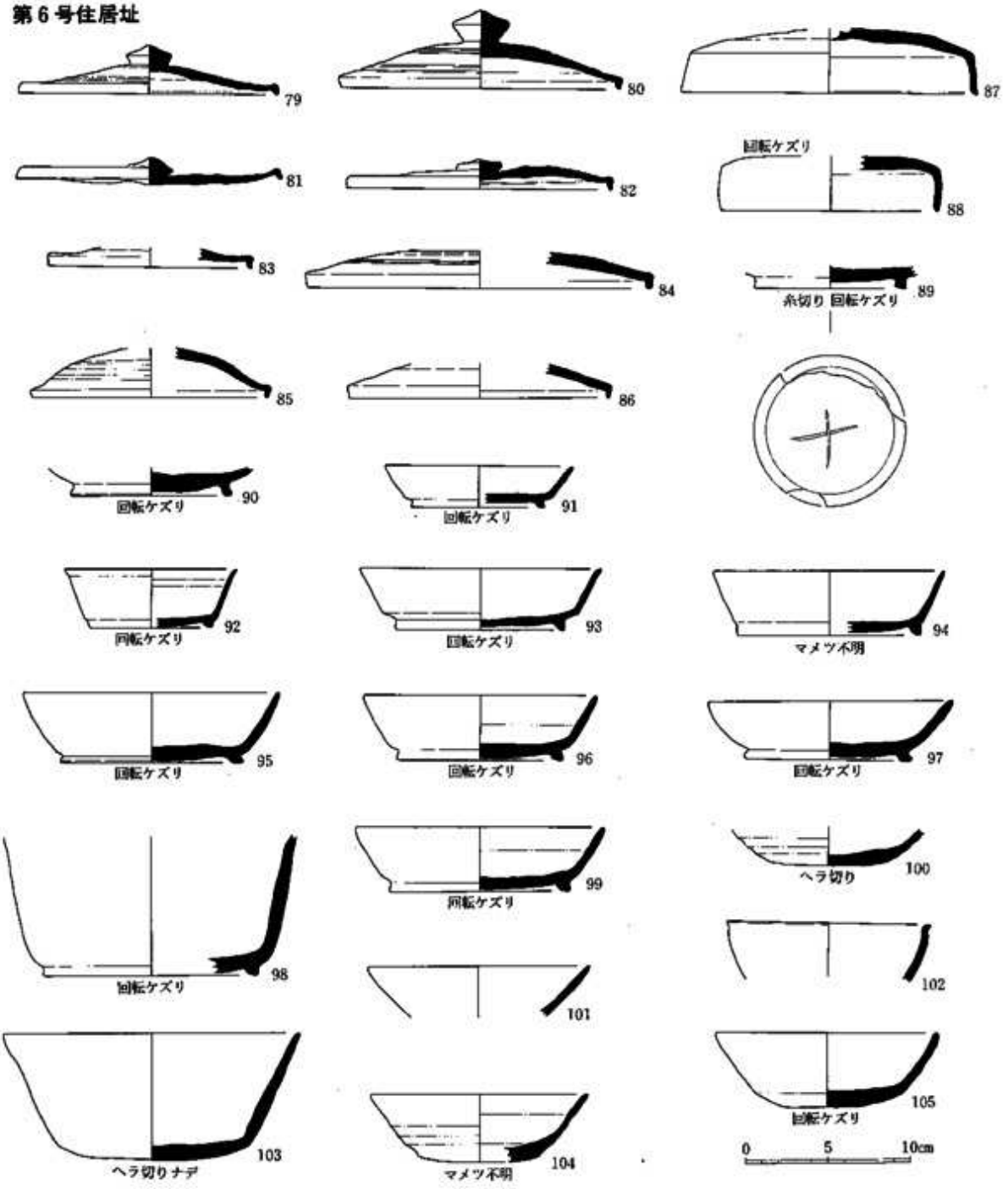
第４号住居址



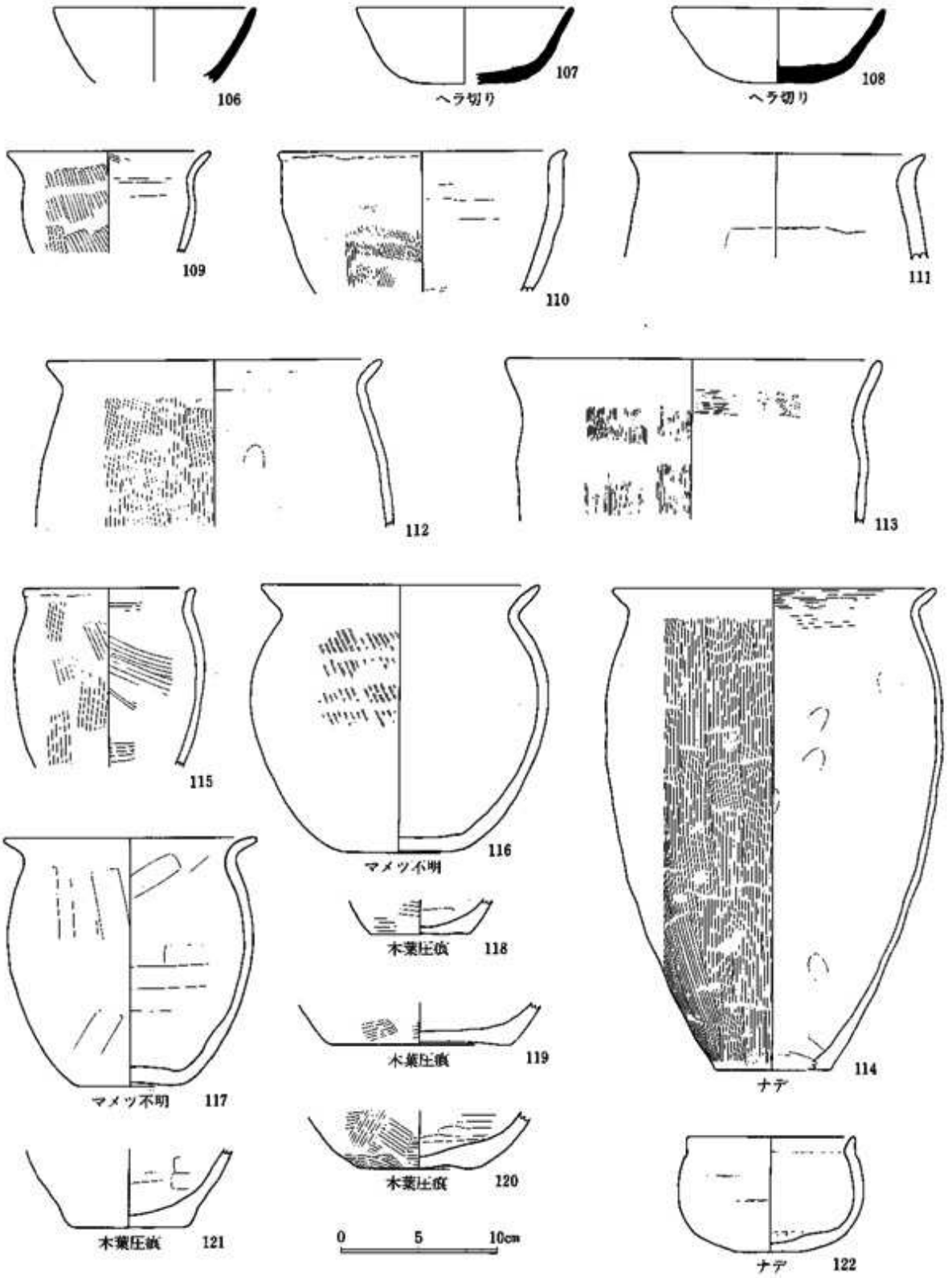
第39図　土 器 (3)

第５号住居址

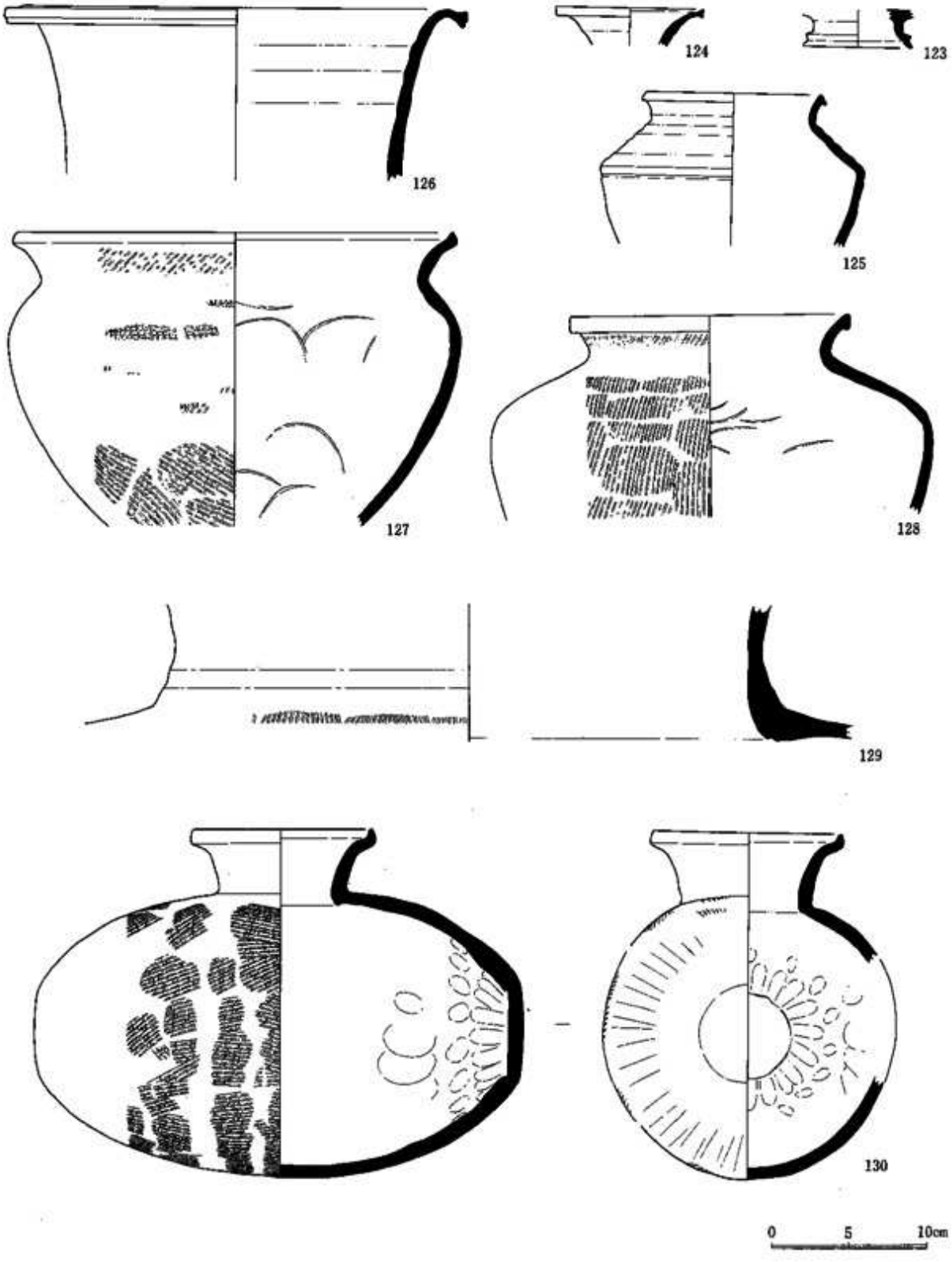
第６号住居址



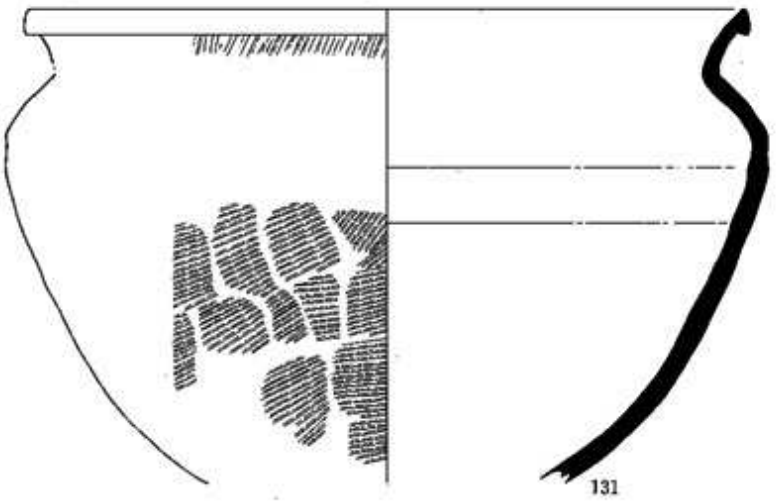
第40図　土 器 (4)


106
107
ヘラ切り
108
ヘラ切り
109
110
111
112
113
115
116
マメツ不明
117
マメツ不明
118
木葉圧痕
119
木葉圧痕
120
木葉圧痕
121
木葉圧痕
114
ナデ
122
ナデ
0
5
10cm

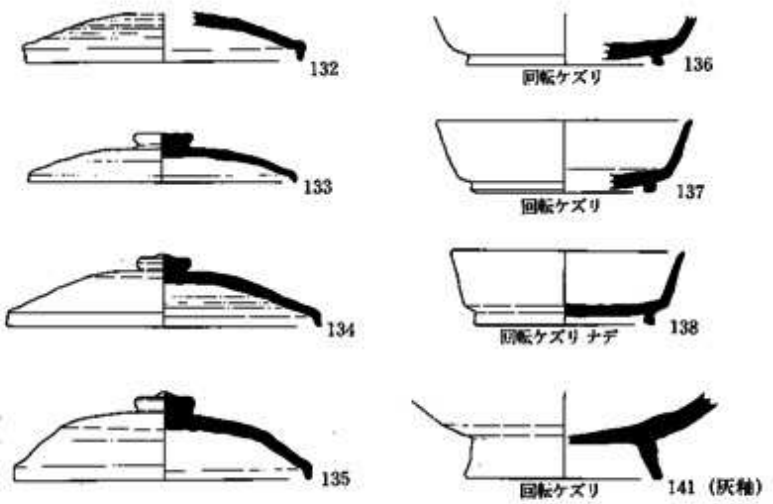
第41図　土 器 (5)



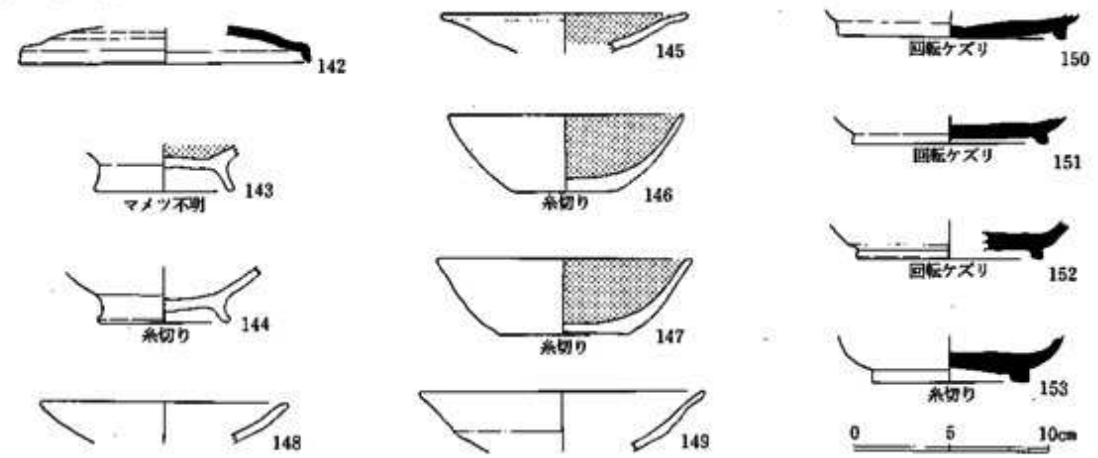
第42図　土 器 (6)



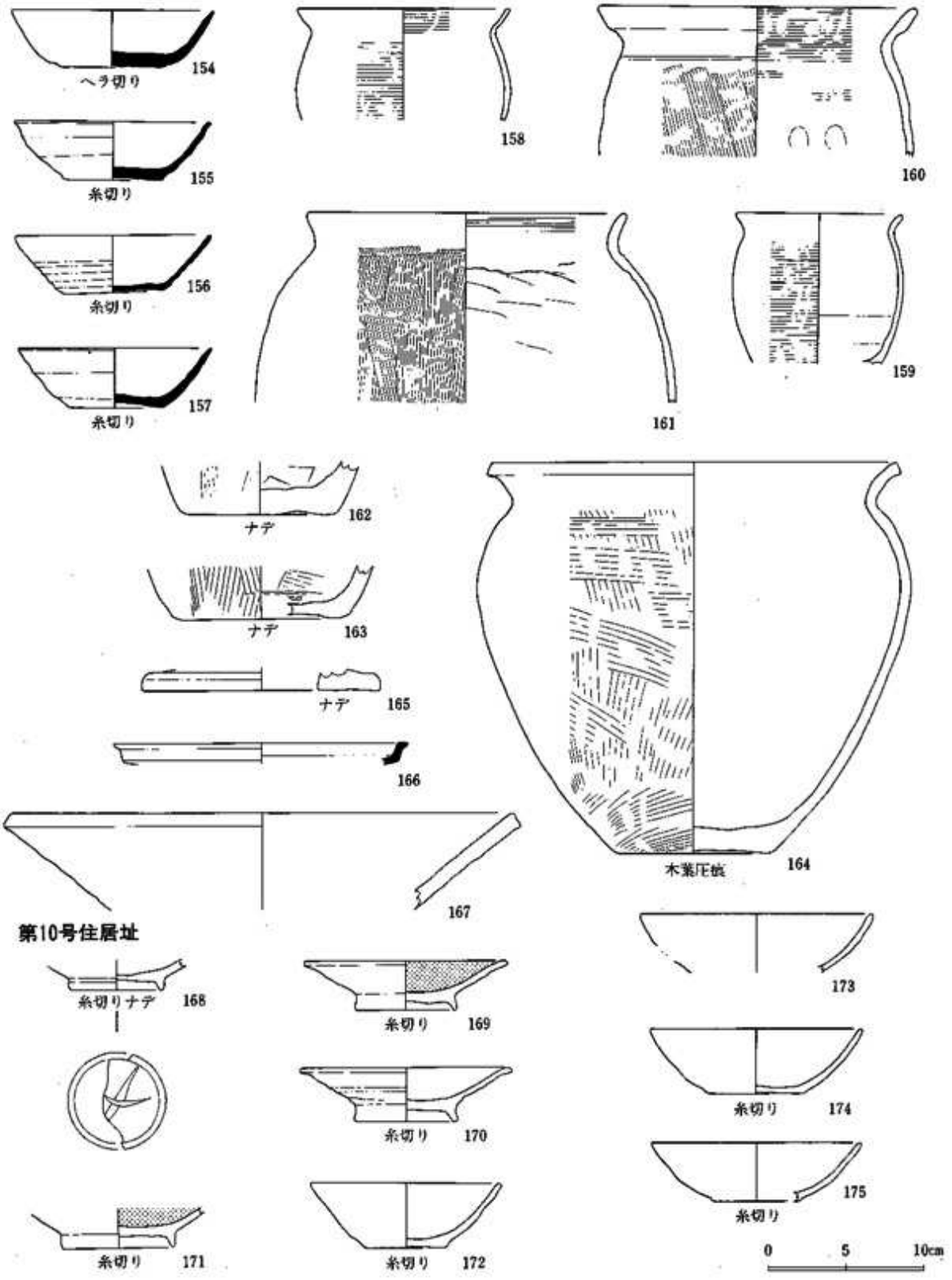
第7号住居址



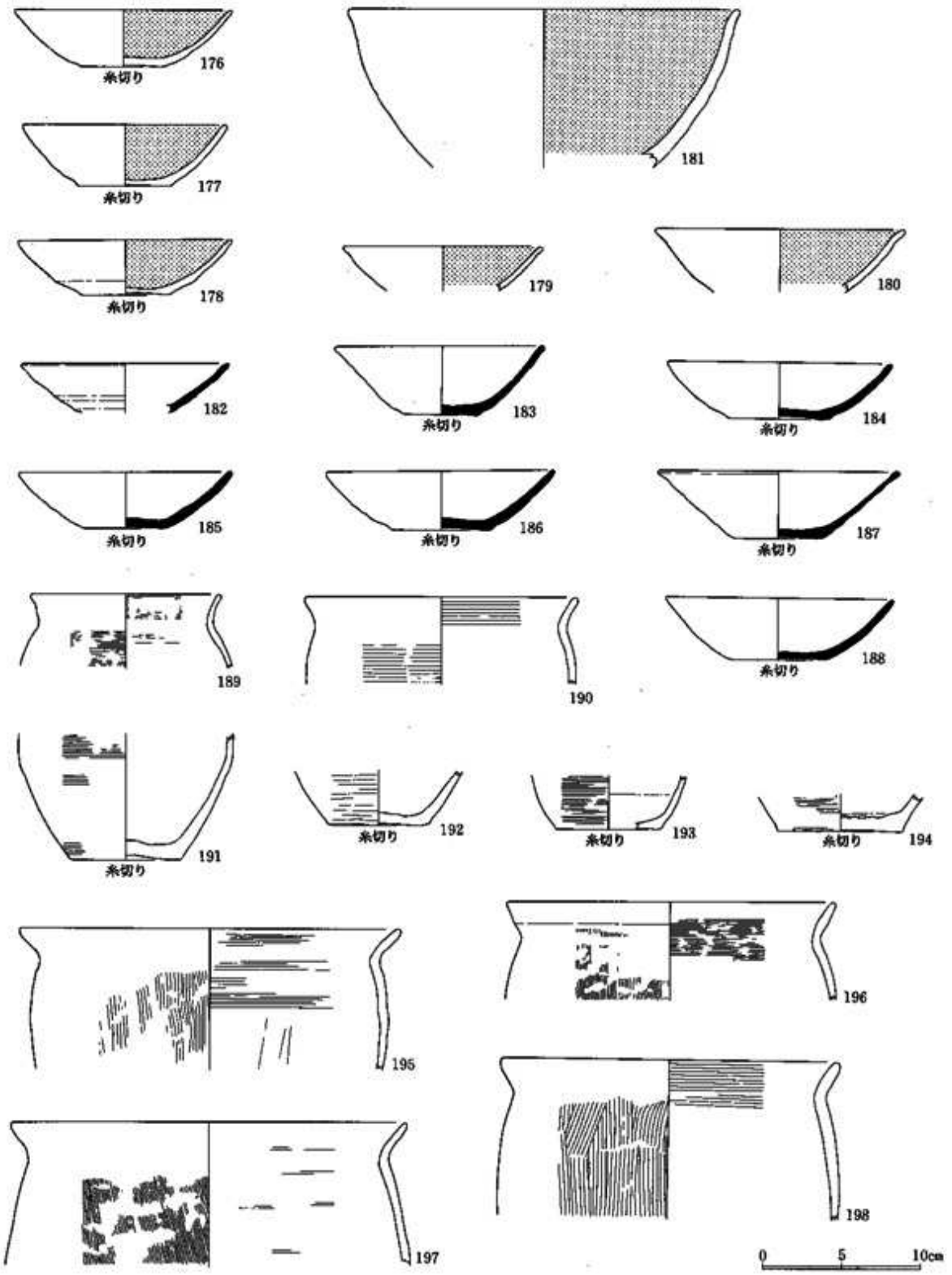
第9号住居址



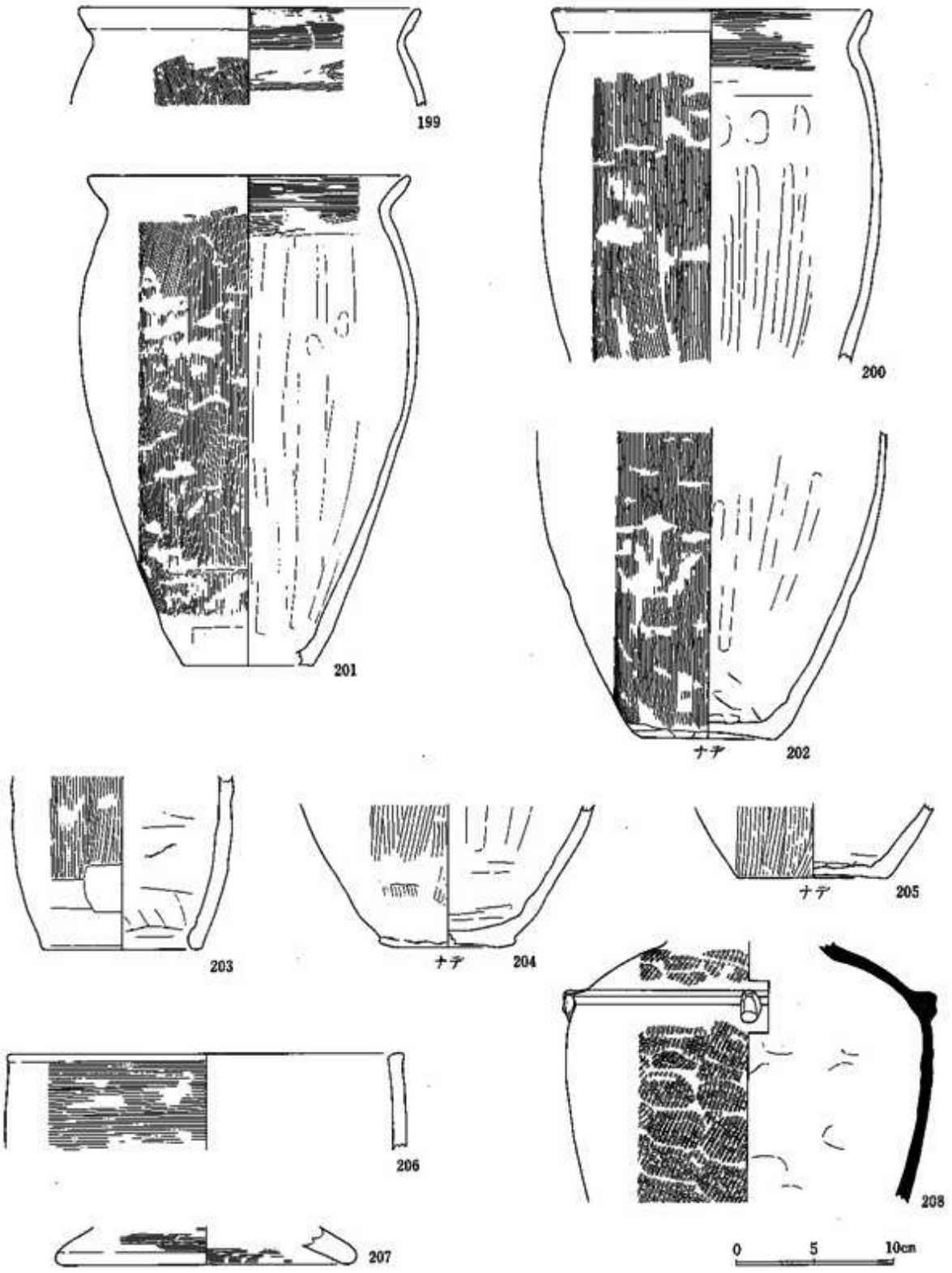
第43図　土器（7）


154
ヘラ切り
155
糸切り
156
糸切り
157
糸切り
158
160
161
159
162
ナデ
163
ナデ
165
ナデ
166
167
164
木葉圧痕
第10号住居址
168
糸切りナデ
169
糸切り
170
糸切り
171
糸切り
172
糸切り
173
174
糸切り
175
糸切り
0
5
10cm

第44図　土 器 (8)

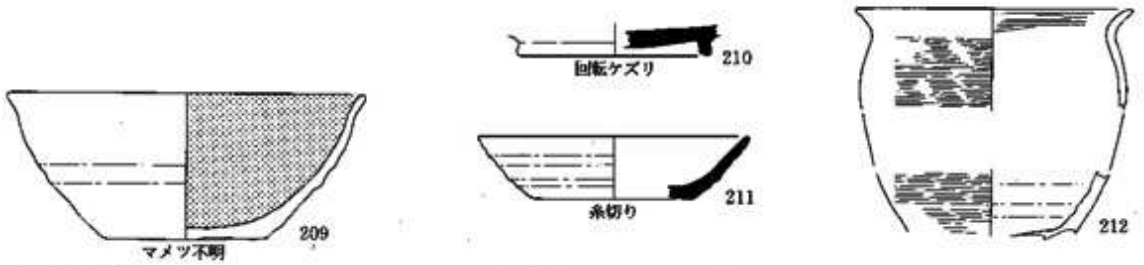

176
糸切り
177
糸切り
178
糸切り
181
179
180
182
183
糸切り
184
糸切り
185
糸切り
186
糸切り
187
糸切り
189
190
188
糸切り
191
糸切り
192
糸切り
193
糸切り
194
糸切り
196
195
198
197
0
5
10cm

第45図　土 器 (9)

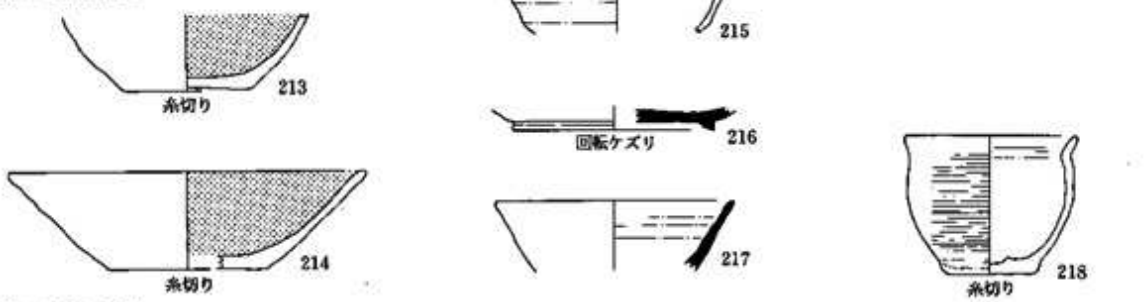


第46図　土 器 (10)

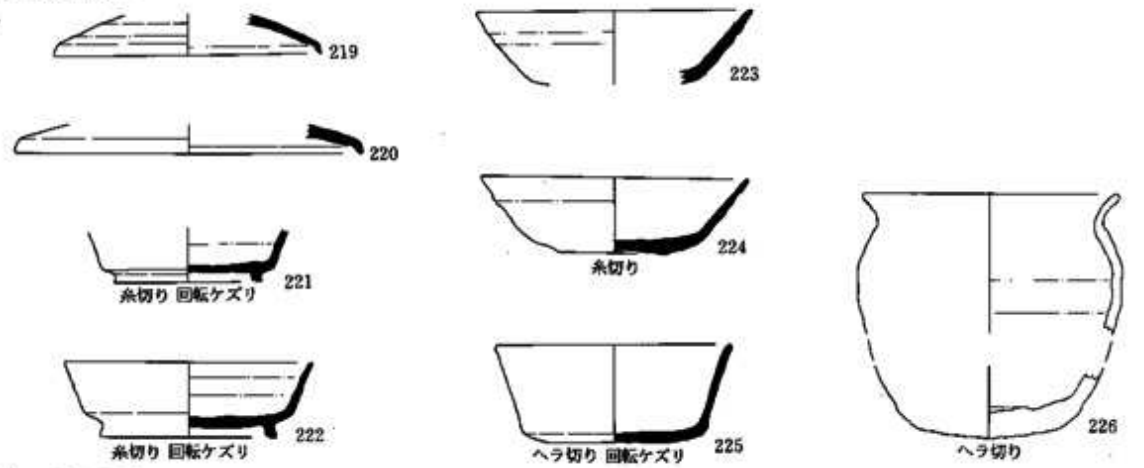
第11号住居址



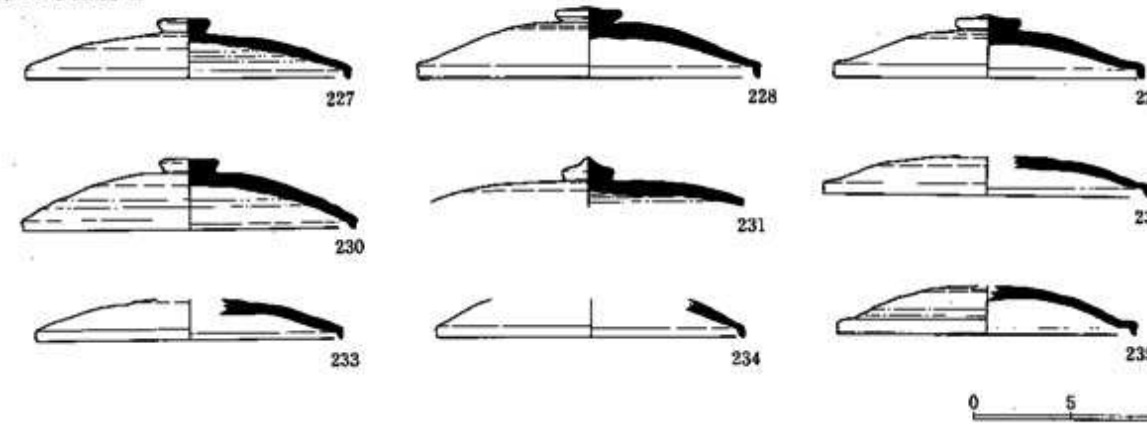
第12号住居址



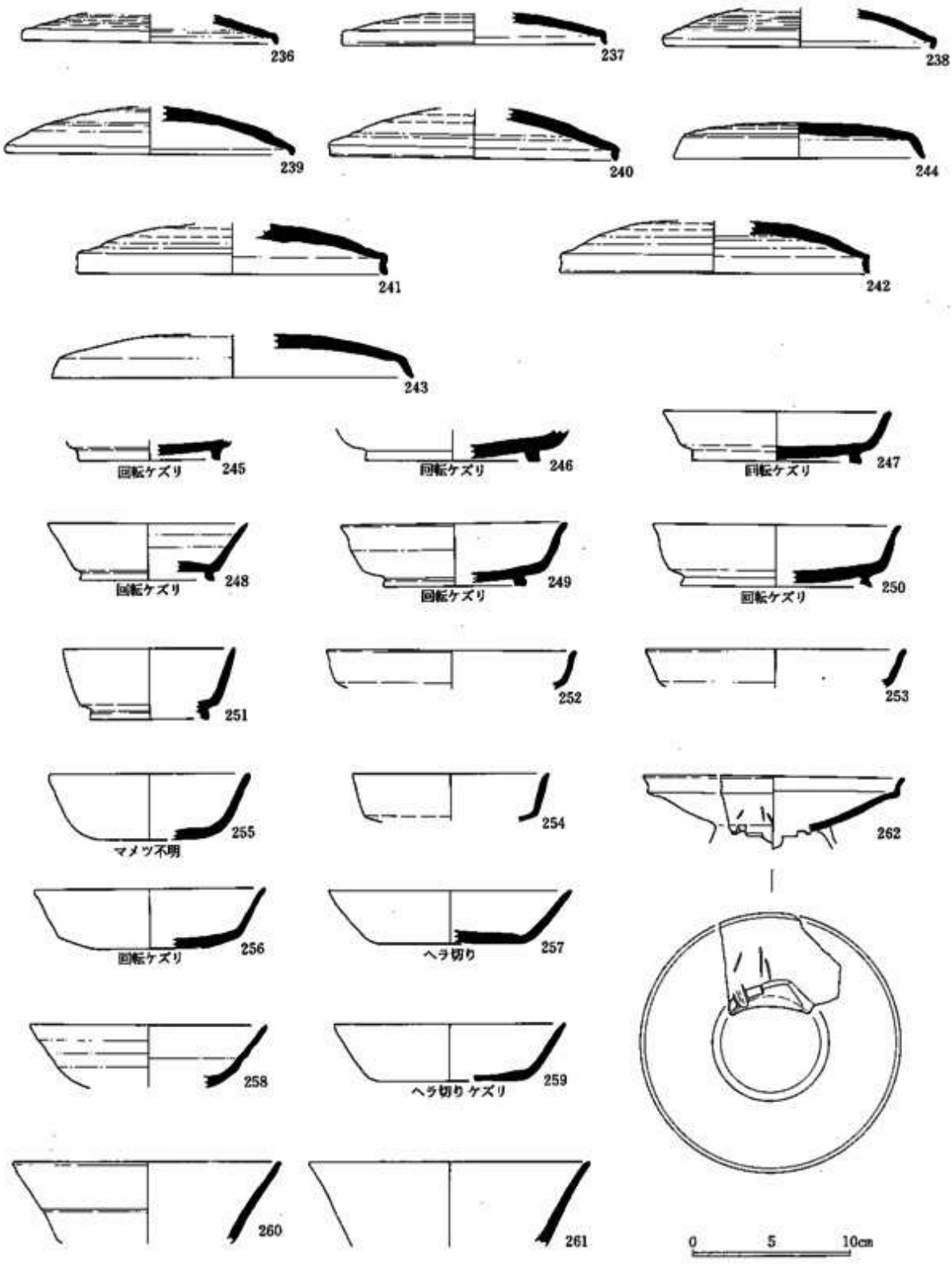
第13号住居址



第14号住居址



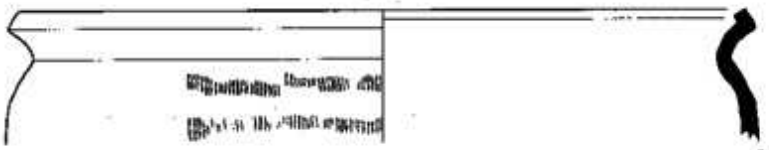
第47図　土 器 (11)

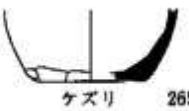

236
237
238
239
240
244
241
242
243
回転ケズリ
245
回転ケズリ
246
回転ケズリ
247
回転ケズリ
248
回転ケズリ
249
回転ケズリ
250
251
252
253
255
マメツ不明
254
262
回転ケズリ
256
ヘラ切り
257
258
ヘラ切りケズリ
259
260
261
0
5
10cm

第48図　土 器 (12)

263

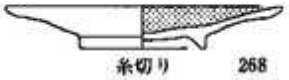
ナデ 264

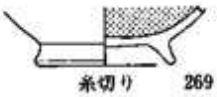

266


ケズリ 265

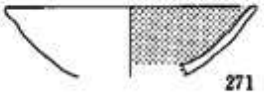
第15号住居址

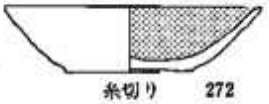
267

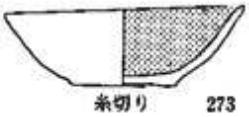

糸切り 268


糸切り 269

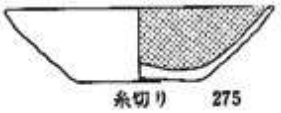
糸切り 270

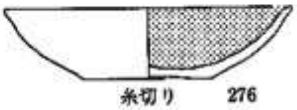

271

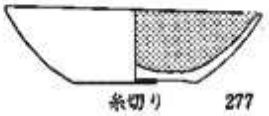

糸切り 272

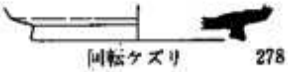

糸切り 273

糸切り 274


糸切り 275


糸切り 276


糸切り 277


回転ケズリ 278

糸切り 279

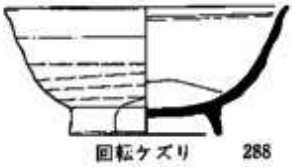
280

糸切り 281

糸切り 282

糸切り 283

糸切り 284

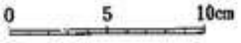

回転ケズリ 288

糸切り 285

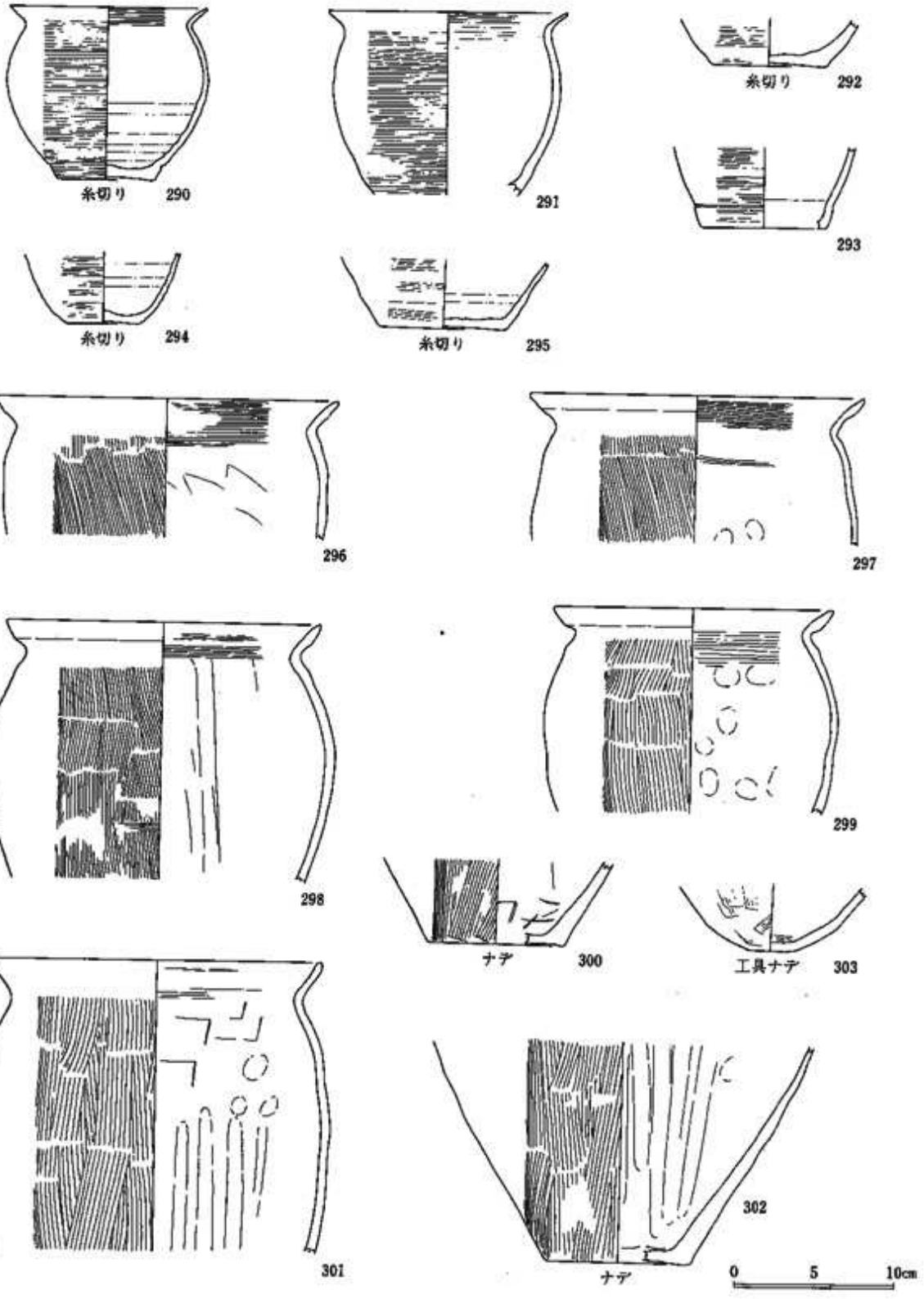
286

287

289

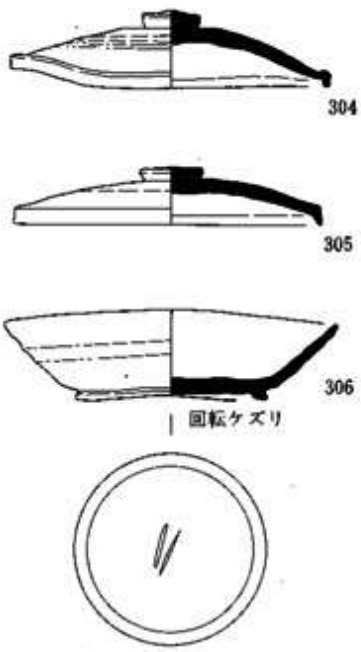


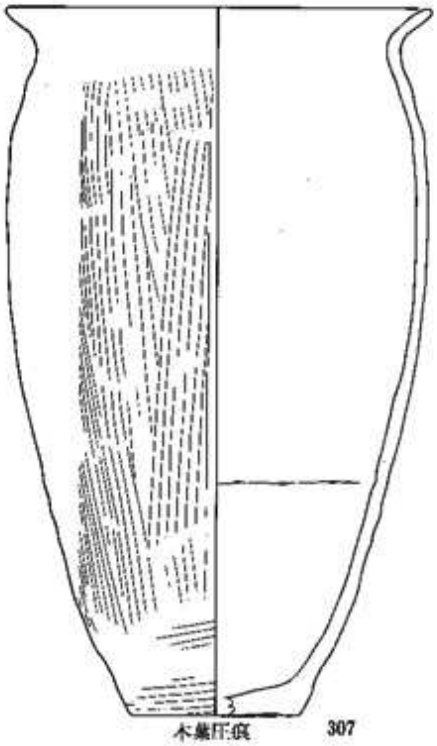
第49図　土 器 (13)


糸切り
290
291
糸切り
292
293
糸切り
294
糸切り
295
296
297
298
299
ナデ
300
工具ナデ
303
301
302
ナデ
0
5
10cm

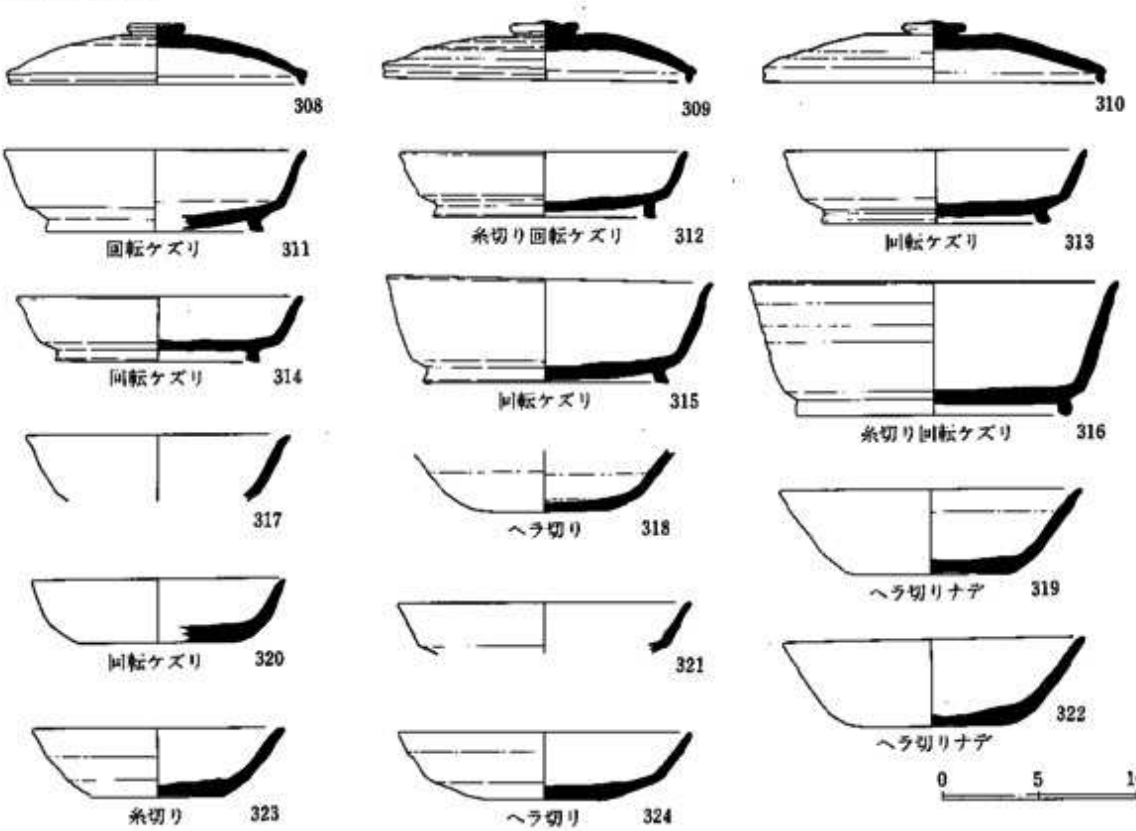
第50図　土器（14）

第16号住居址

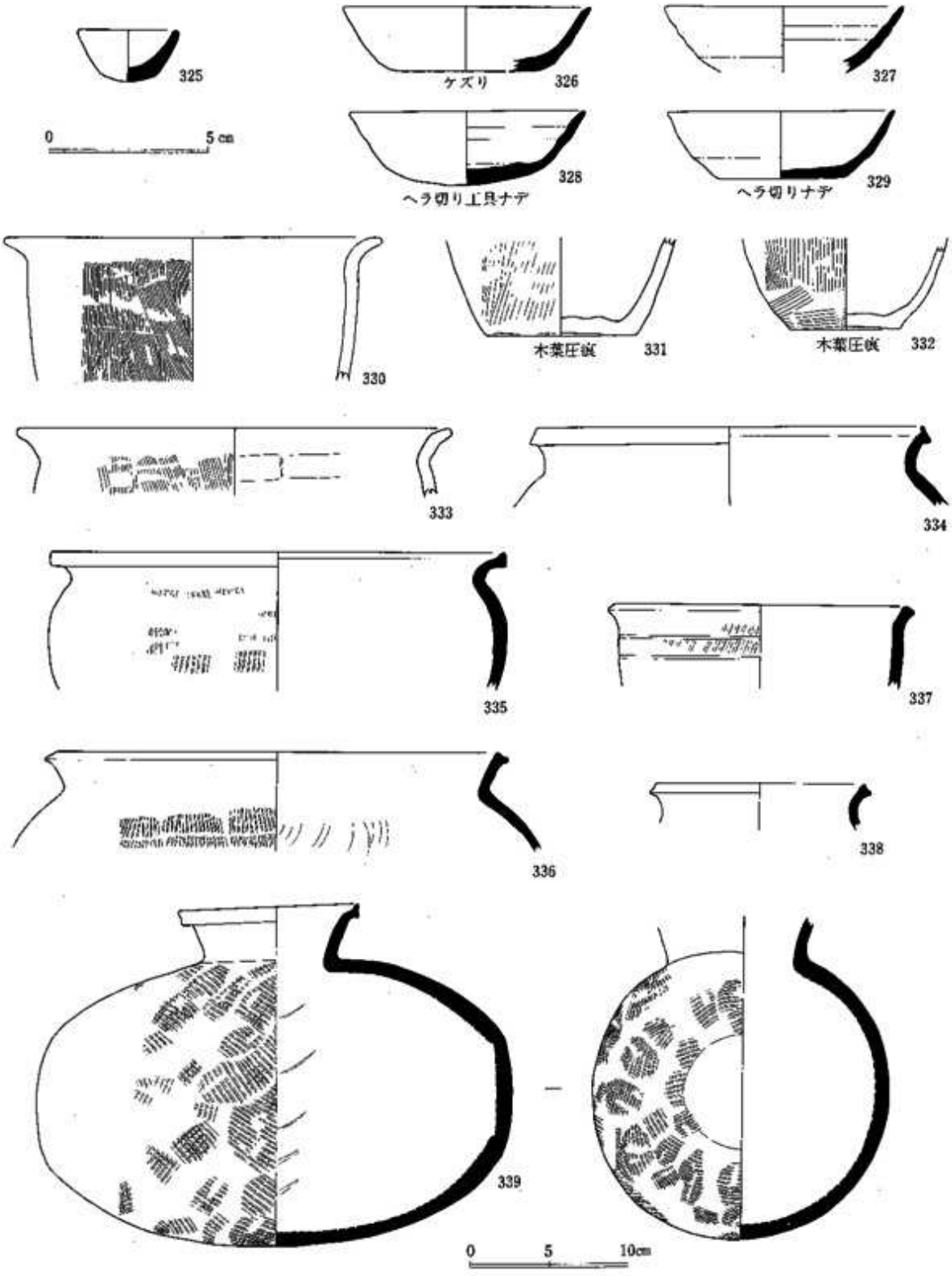




第17号住居址



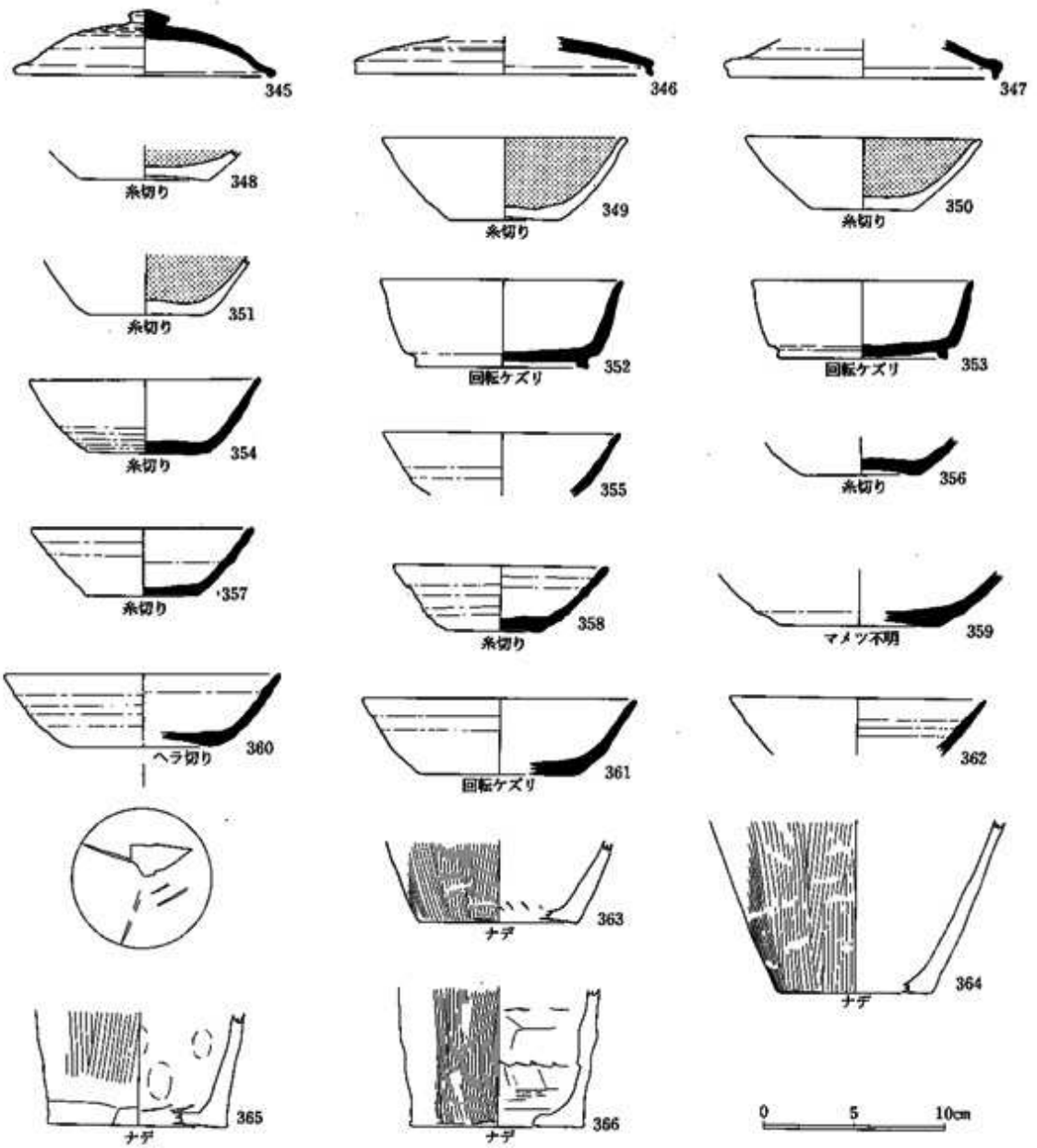
第51図　土 器 (15)


325
0
5 cm
ケズり
326
327
328
ヘラ切り工具ナデ
329
ヘラ切りナデ
330
木葉圧痕
331
木葉圧痕
332
333
334
335
337
336
338
339
0
5
10cm

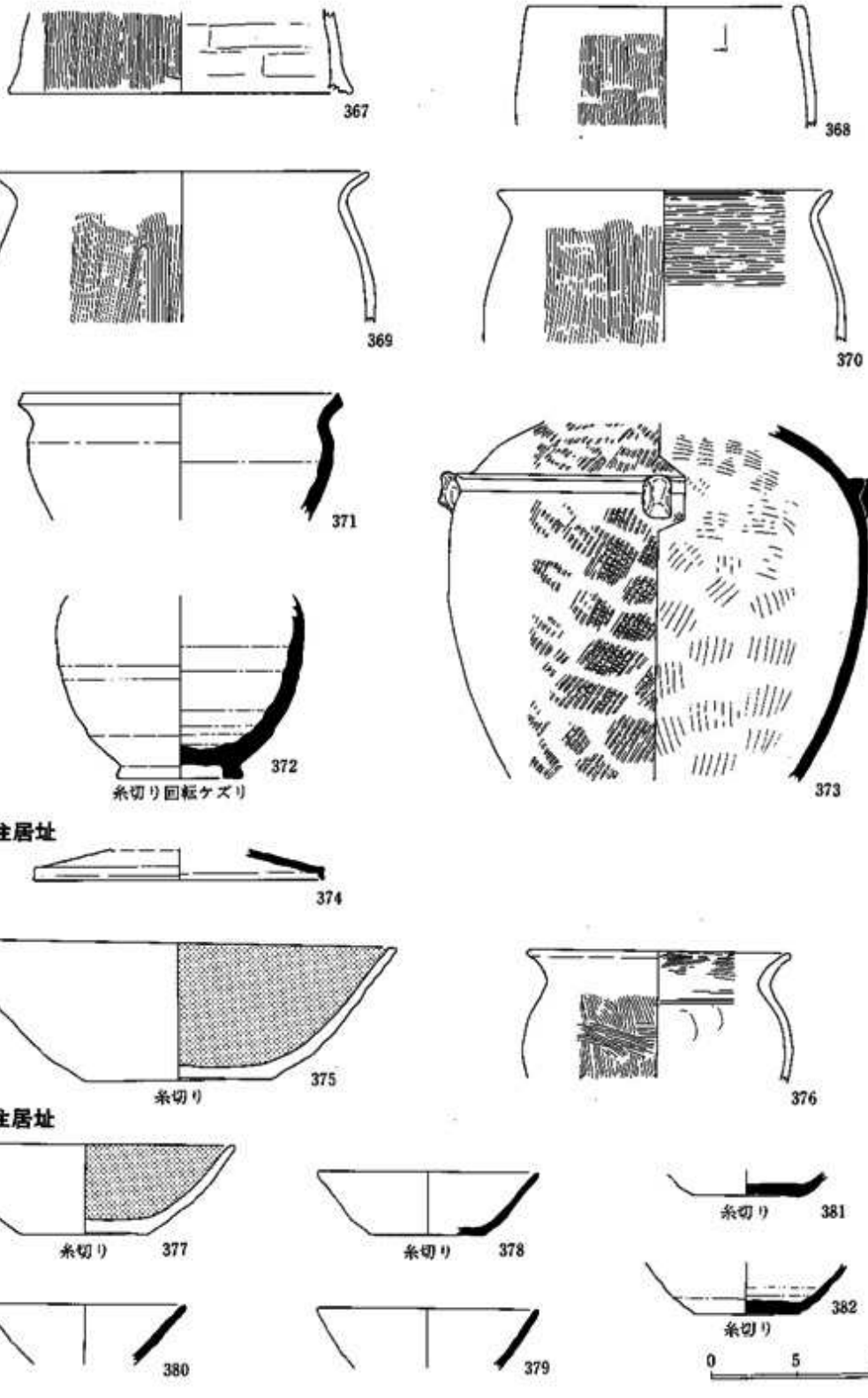
第52図　土 器 (16)

第18号住居址

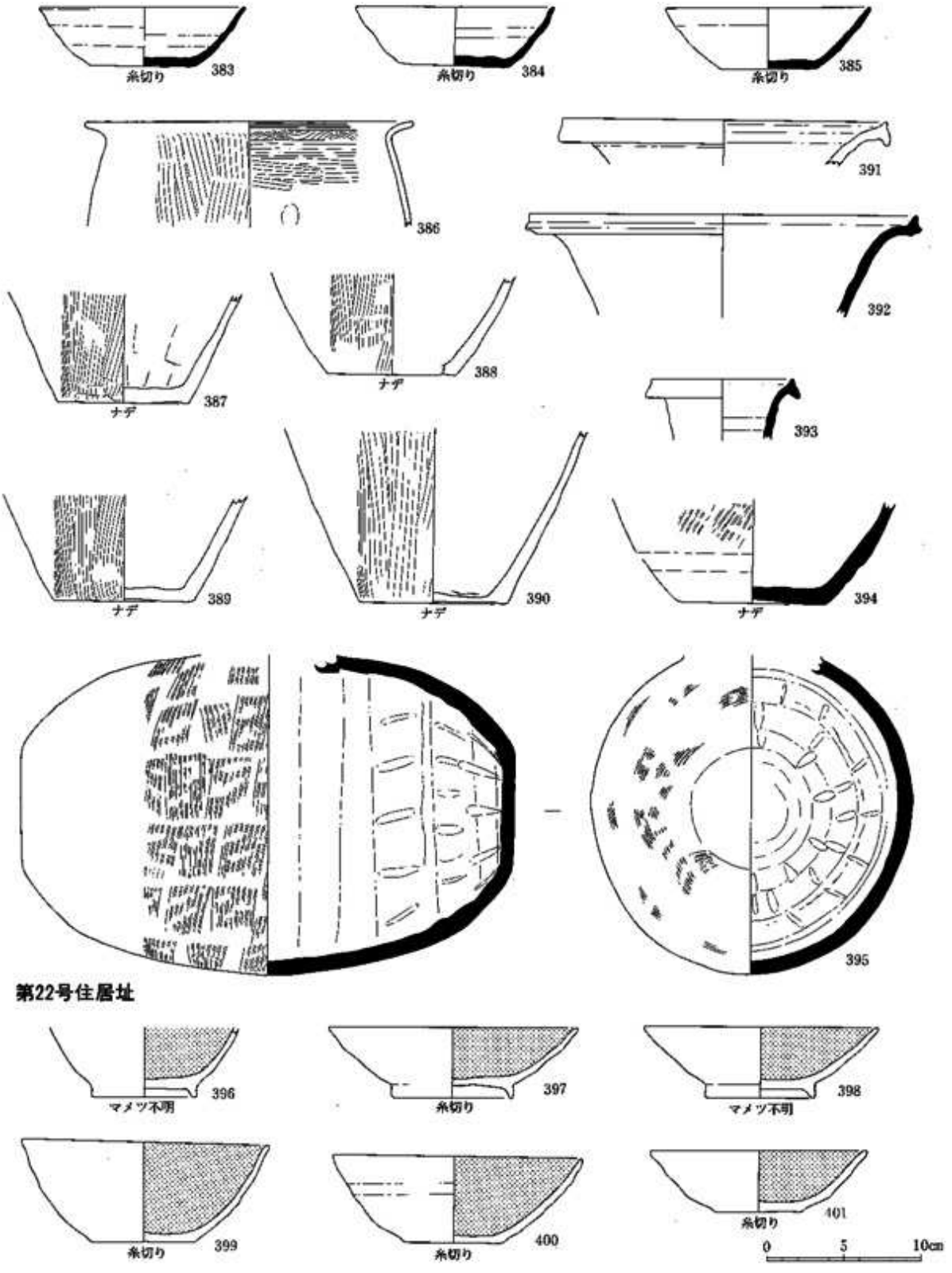
第19号住居址



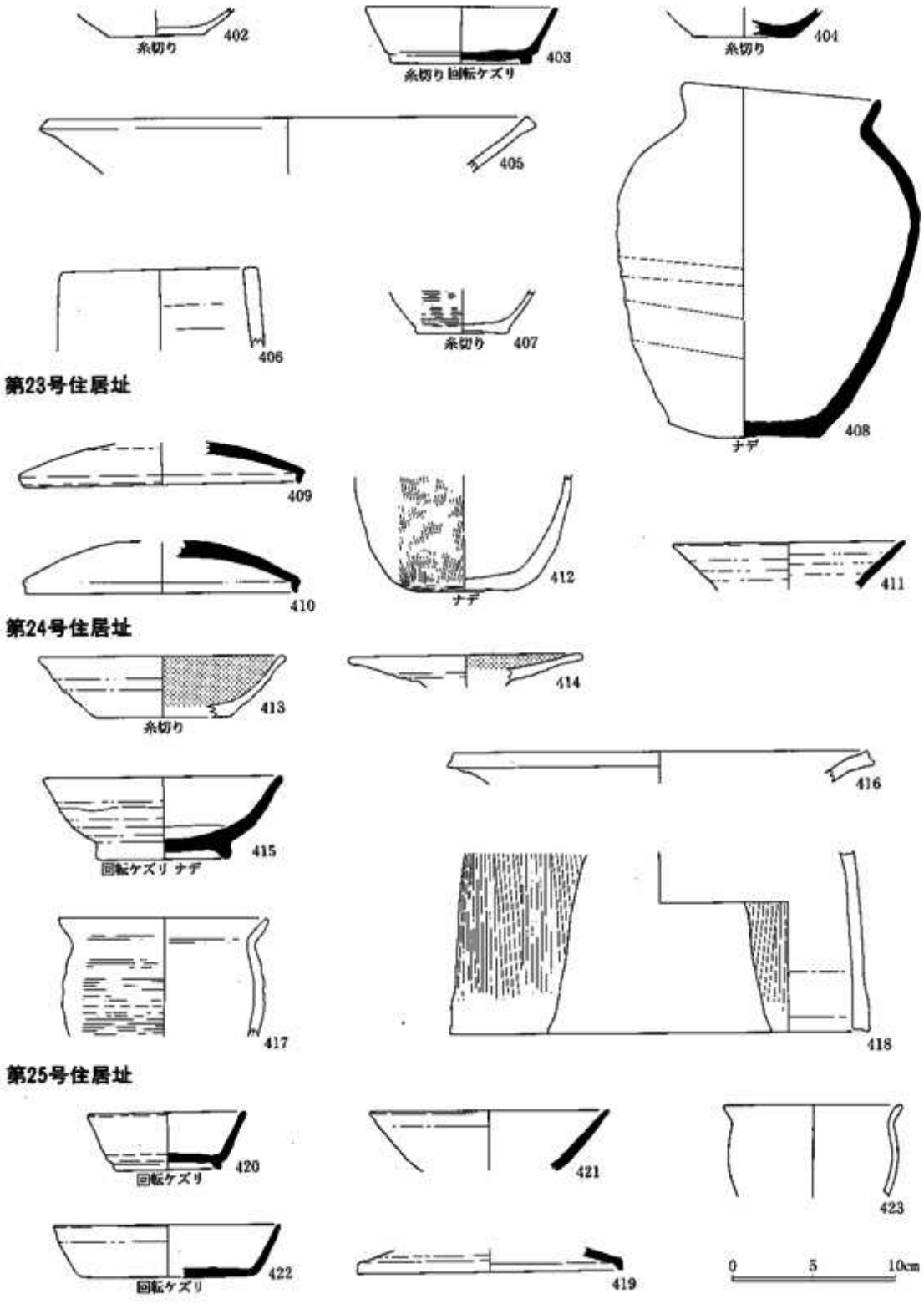
第53図　土 器 (17)


367
368
369
370
371
372
糸切り回転ケズリ
373
第20号住居址
374
糸切り
375
376
第21号住居址
糸切り
377
糸切り
378
糸切り
381
382
糸切り
380
379
0
5
10cm

第54図　土 器 (18)

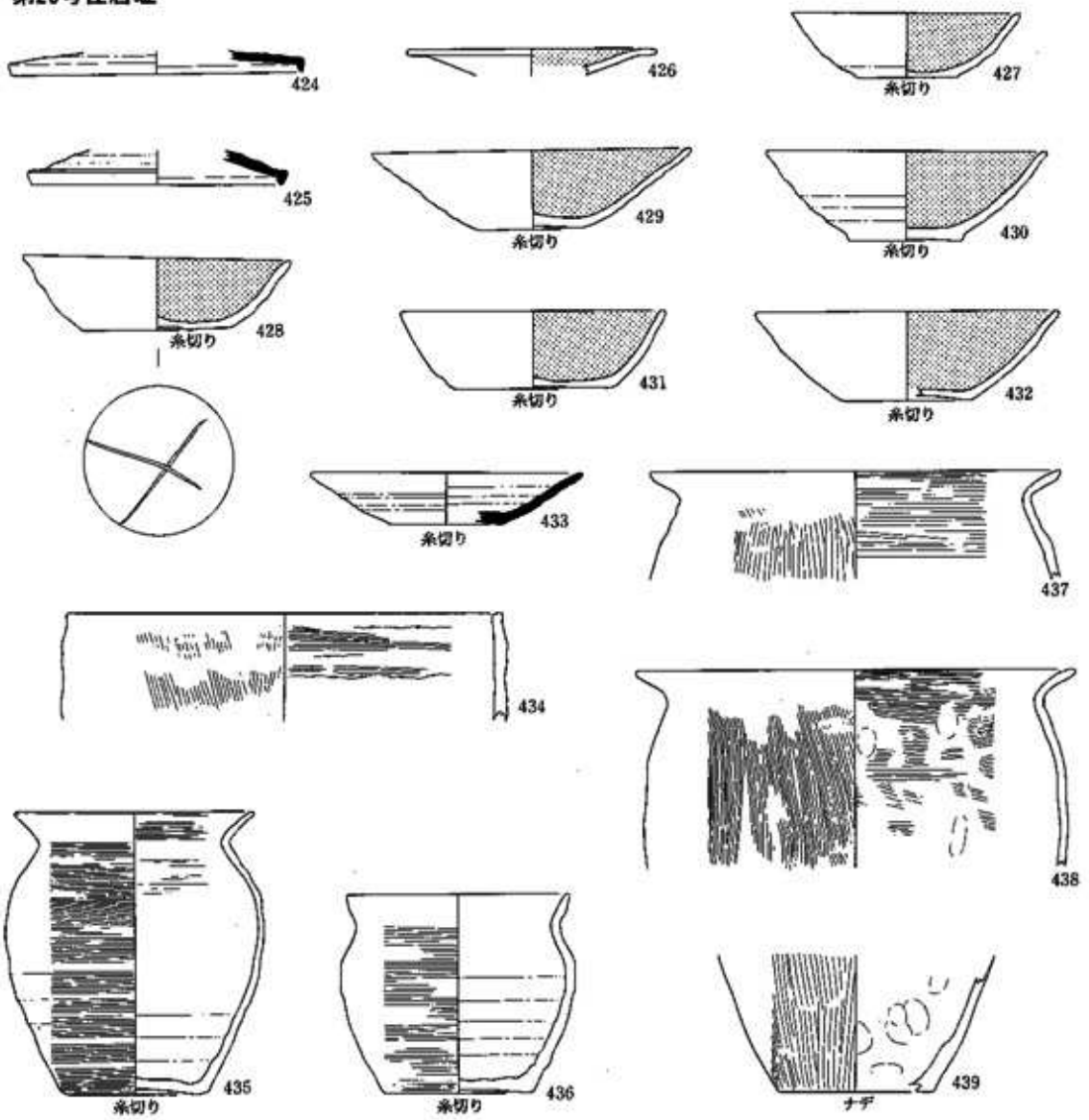

糸切り
383
糸切り
384
糸切り
385
386
391
392
ナデ
387
ナデ
388
393
ナデ
389
ナデ
390
ナデ
394
395
第22号住居址
マメツ不明
396
糸切り
397
マメツ不明
398
糸切り
399
糸切り
400
糸切り
401
0
5
10cm

第55図　土 器（19）


402
糸切り
403
糸切り 回転ケズリ
404
糸切り
405
406
407
糸切り
408
ナデ
第23号住居址
409
410
412
ナデ
411
第24号住居址
413
糸切り
414
416
415
回転ケズリ ナデ
417
418
第25号住居址
420
回転ケズリ
421
423
422
回転ケズリ
419
0 5 10cm

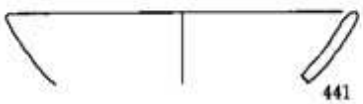
第56図　土 器（20）

第26号住居址

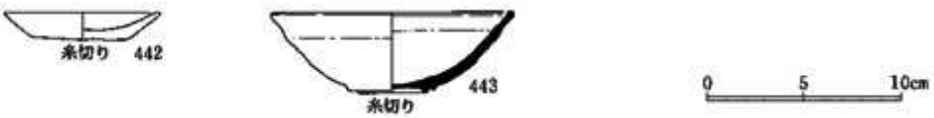


第28号住居址

第29号住居址

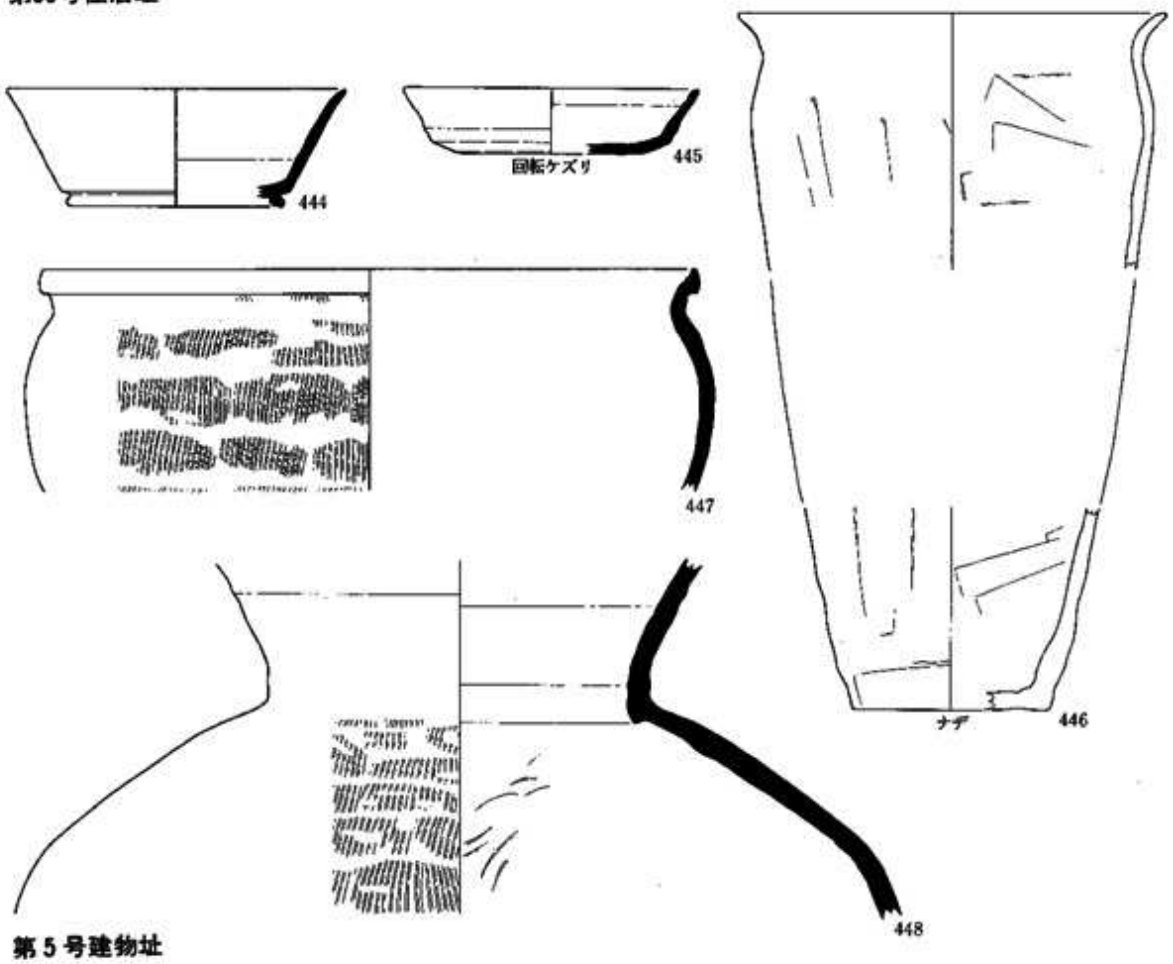


第31号住居址

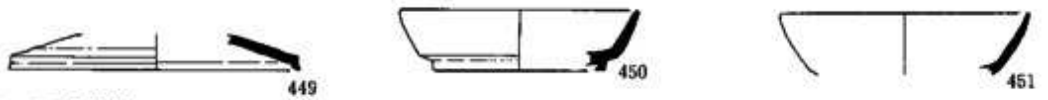


第57図　土 器（21）

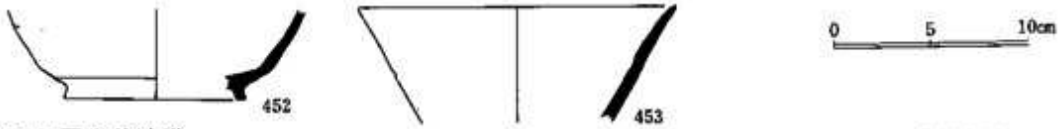
第30号住居址



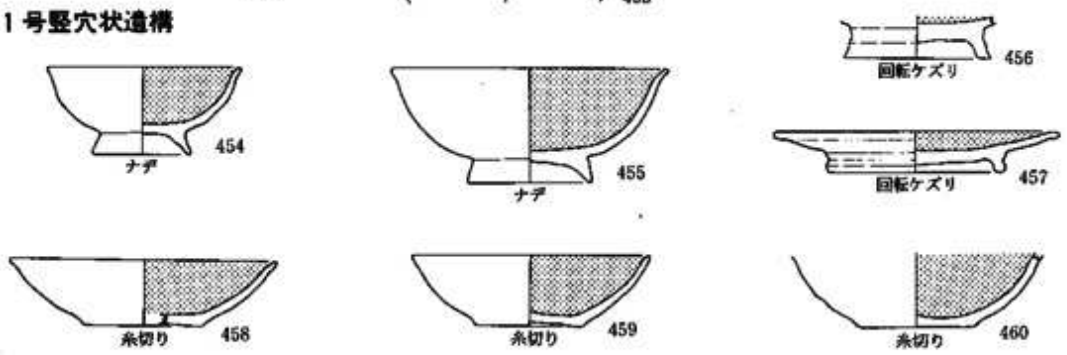
第5号建物址



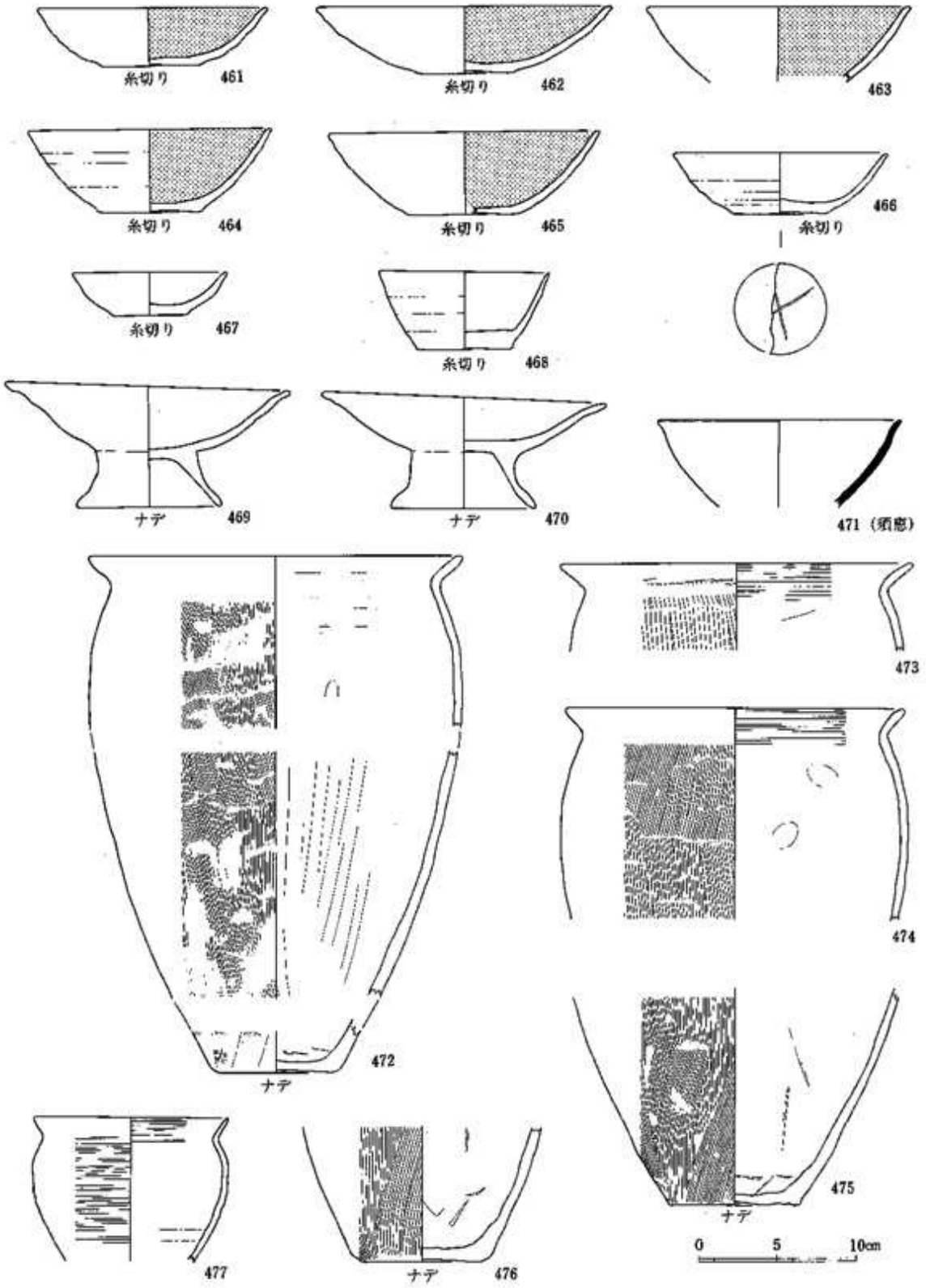
第4号建物址



第1号竪穴状遺構

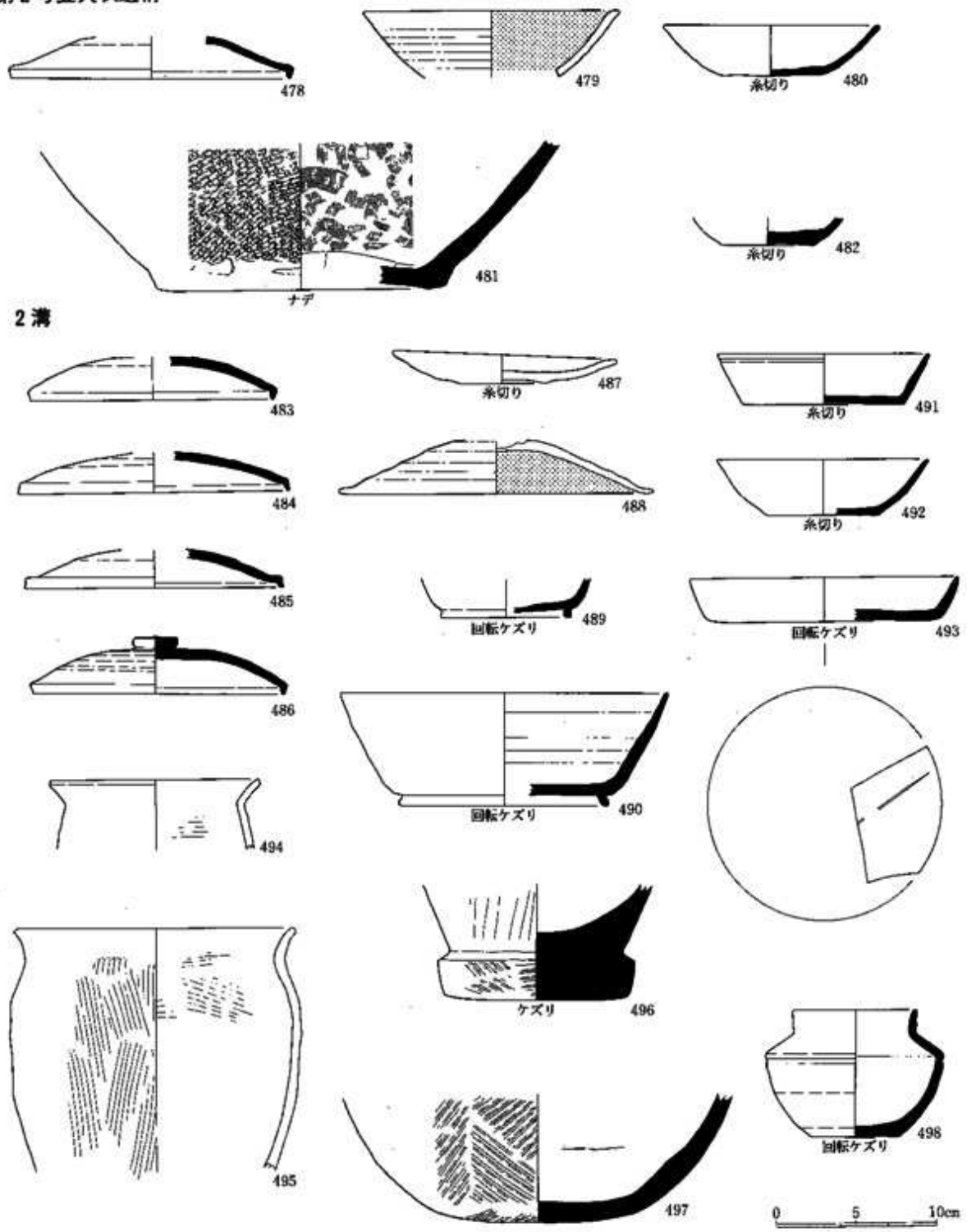


第58図　土器（22）


糸切り 461
糸切り 462
463
糸切り 464
糸切り 465
466
糸切り
糸切り 467
糸切り 468
ナデ 469
ナデ 470
471（須恵）
473
472
ナデ
474
475
ナデ
477
ナデ 476
0 5 10cm

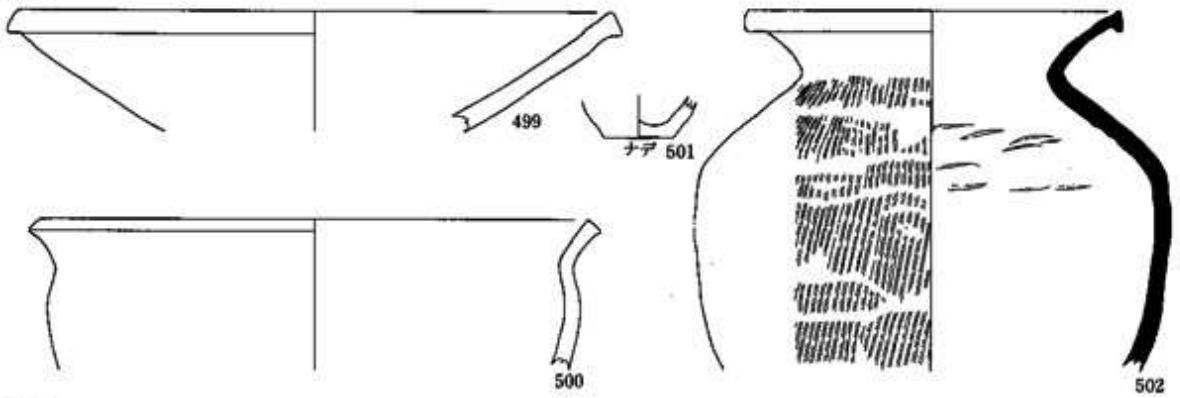
第59図　土 器（23）

第２号竪穴状遺構



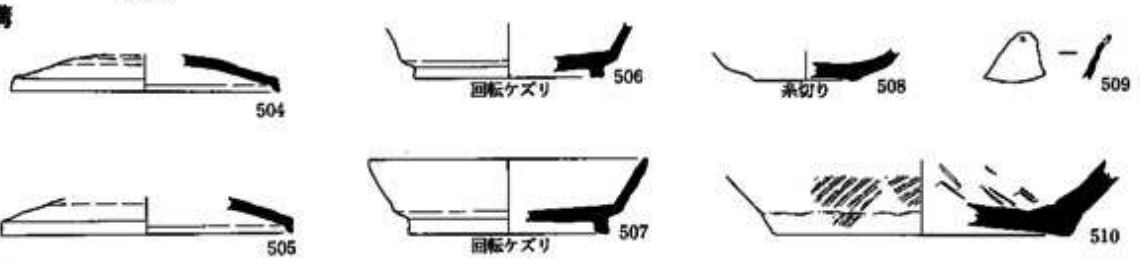
第60図　土 器（24）

3溝

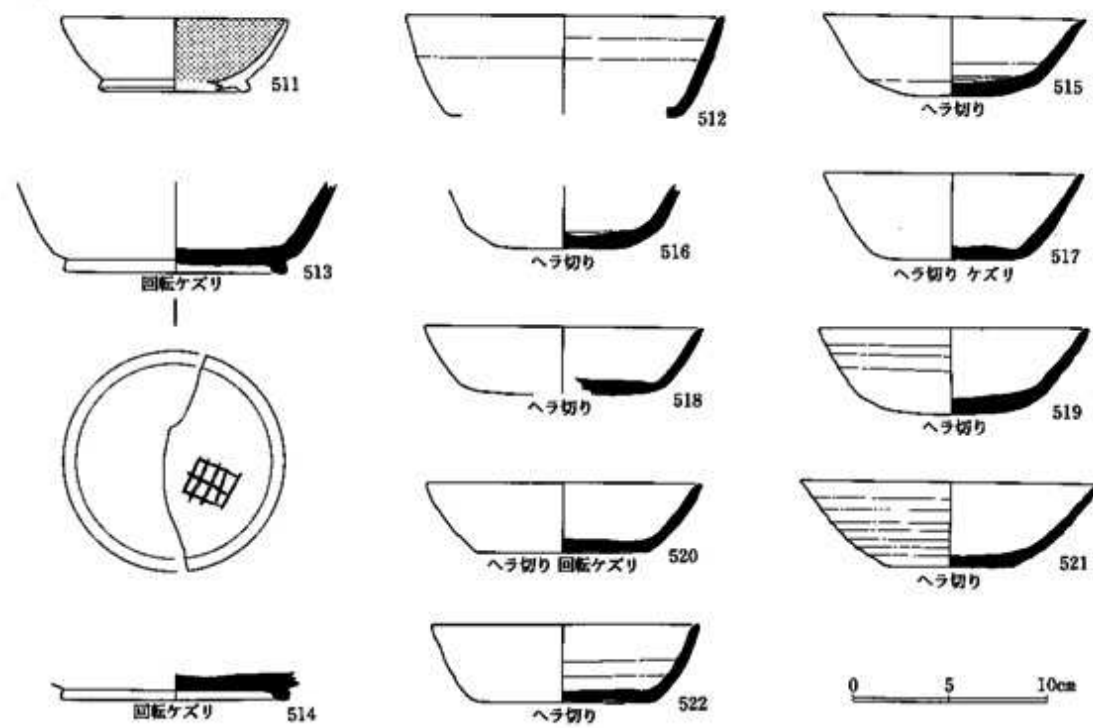


5溝

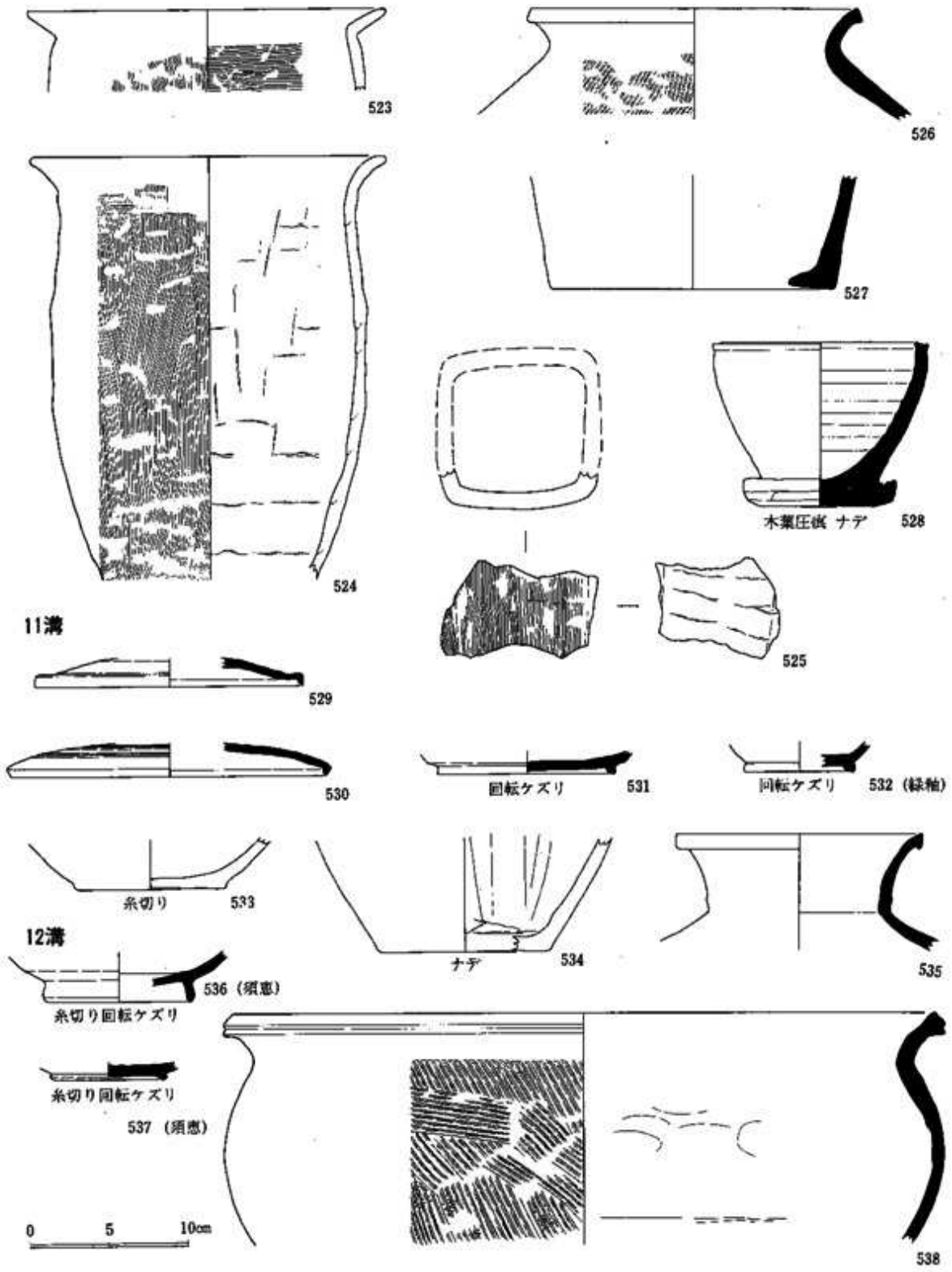
6溝



10溝

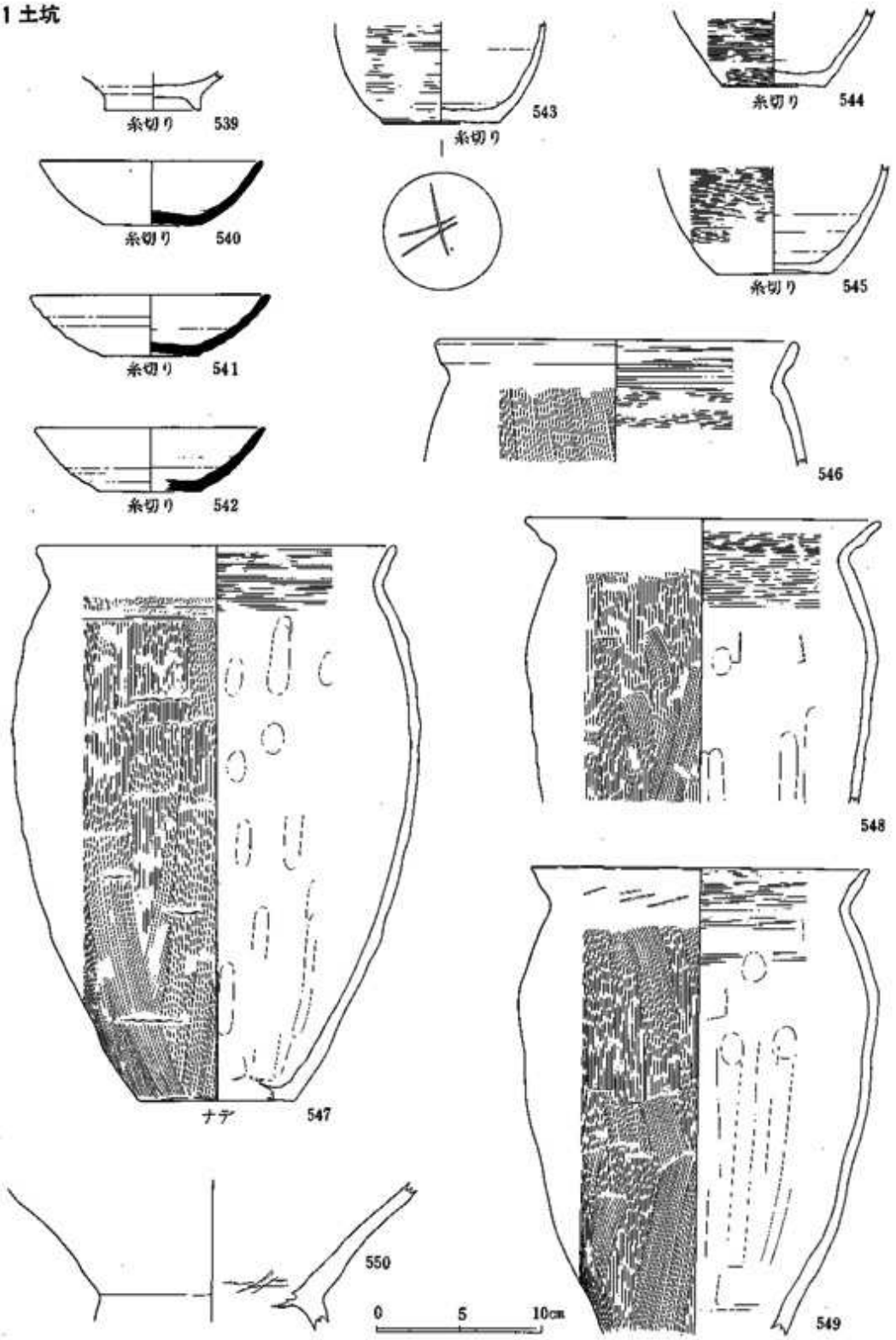


第61図　土 器 (25)


523
526
527
524
木葉圧痕 ナデ
528
525
11溝
529
530
回転ケズリ
531
回転ケズリ
532 (緑釉)
糸切り
533
ナデ
534
535
12溝
536 (須恵)
糸切り回転ケズリ
糸切り回転ケズリ
537 (須恵)
0 5 10cm
538

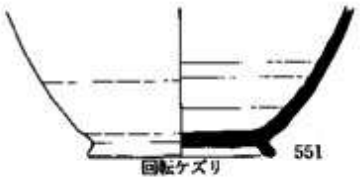
第62図 土 器 (26)

1土坑

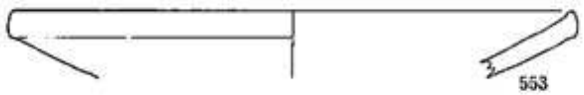


第63図　土器（27）

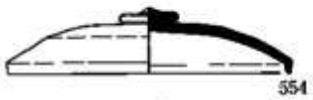
18土坑

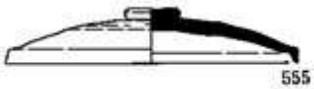


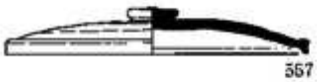
31土坑

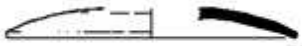


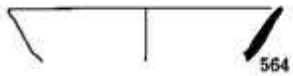
32土坑

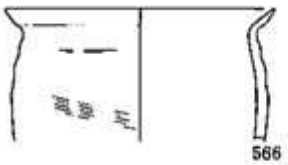


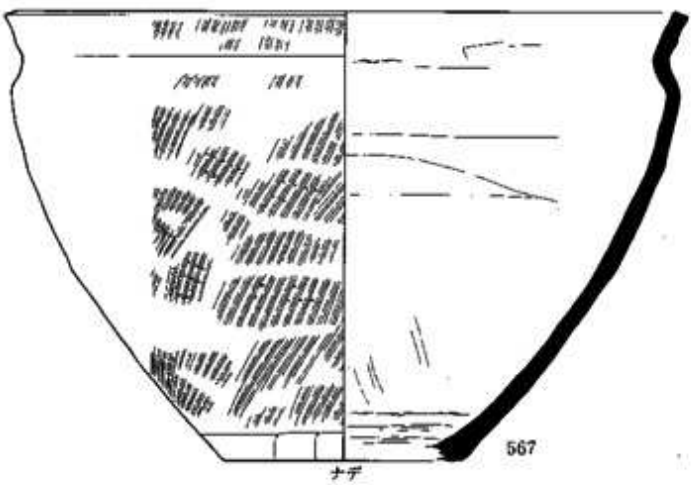




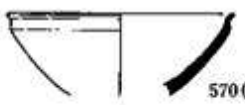


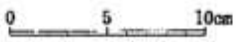






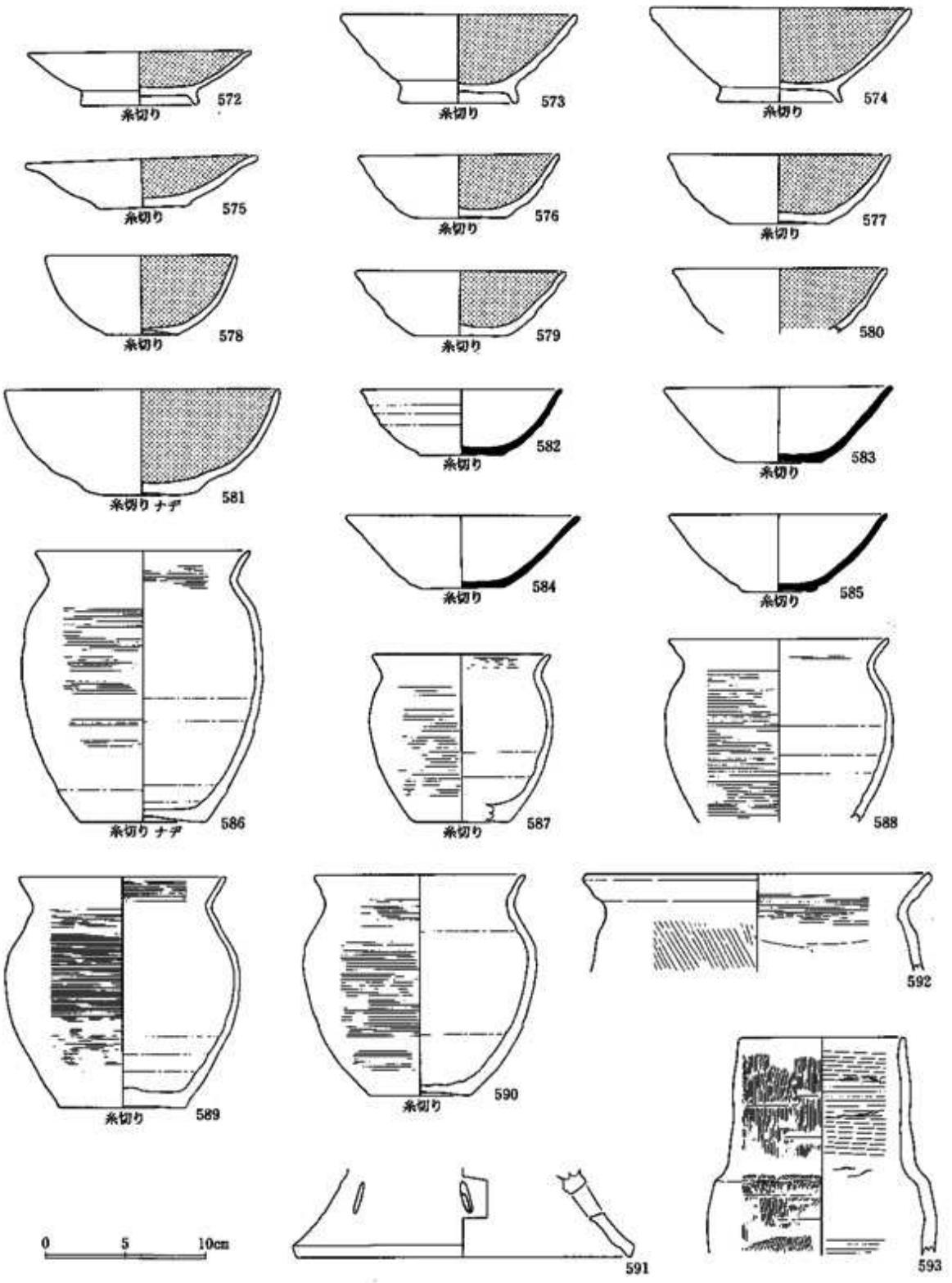
33土坑



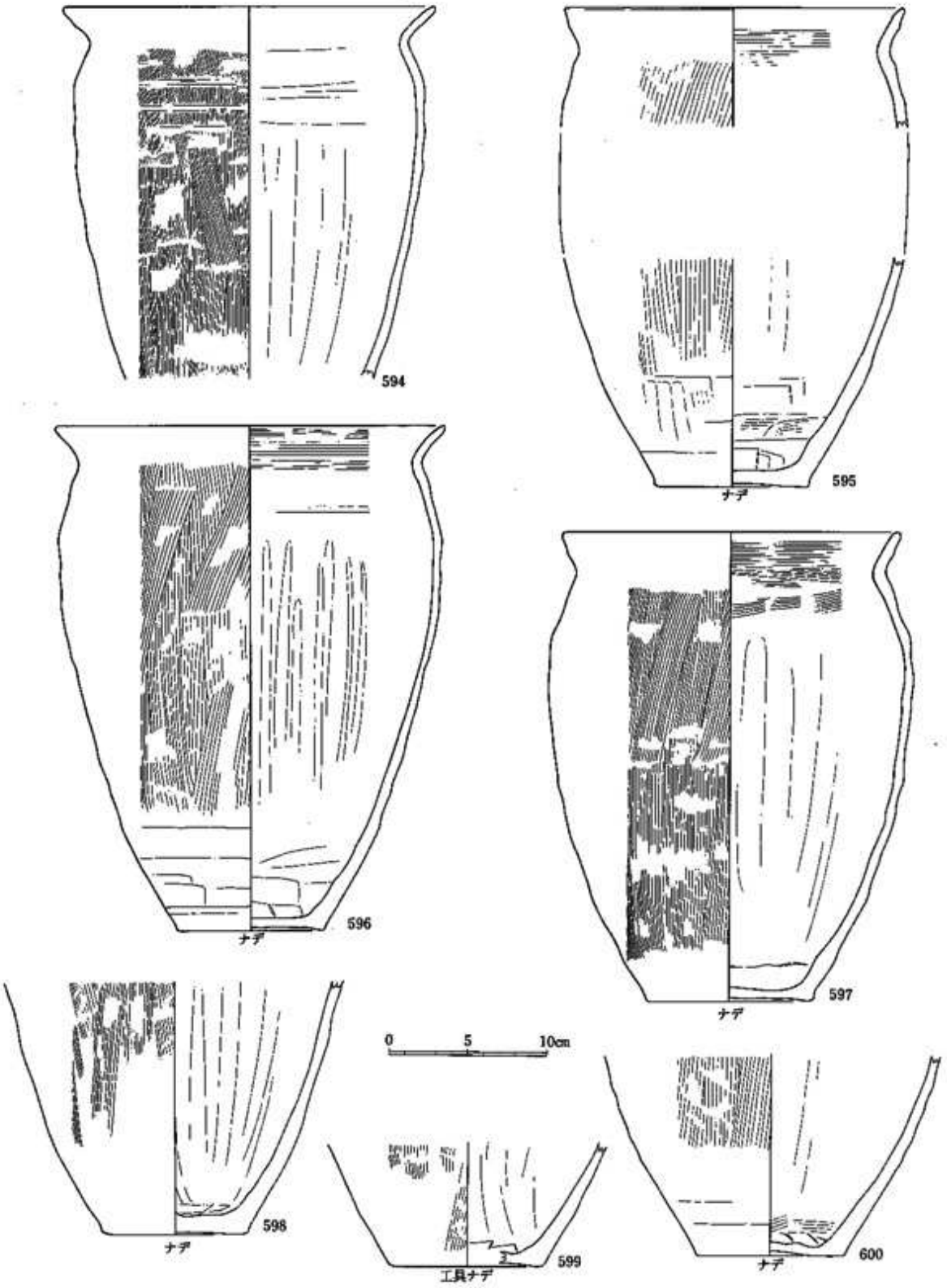


第64図　土 器 (28)

34土坑

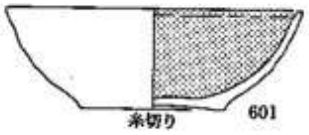


第65図　土 器（29）

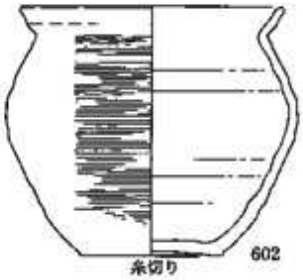


第66図　土 器（30）

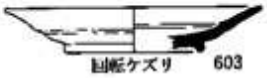
41土坑



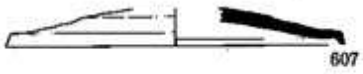
45土坑

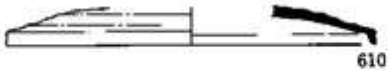


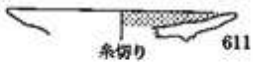
ピット

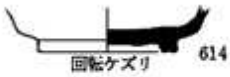


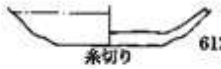
Ⅰ区検出面

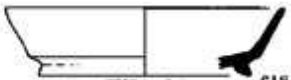


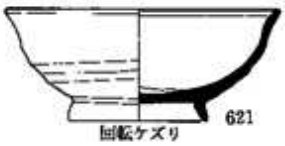


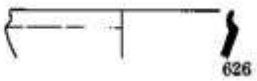


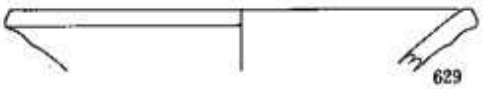


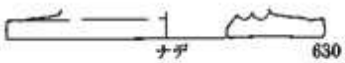












第67図　土 器 (31)

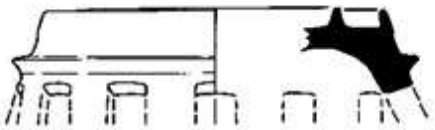
I区排土
木葉圧痕
632
633
マメツ不明
634
糸切り
635
636
ナデ
637
II区検出面
糸切り
639
ナデ
640
ヘラ切り ハケメ
641
回転ケズリ
642
ヘラ切り ナデ
643
644
645
II区排土
糸切り
646
ナデ
647
0
5
10cm

第68図　土器（32）

硯

1
6溝

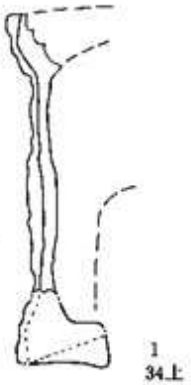
2
I区検出面



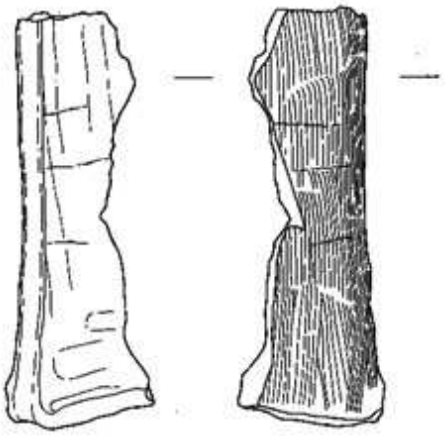
3
2住

4
14・23住

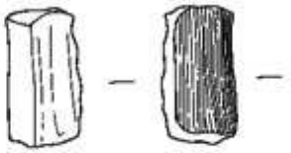
瓦

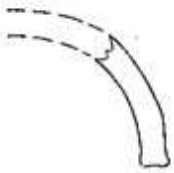


1
34上



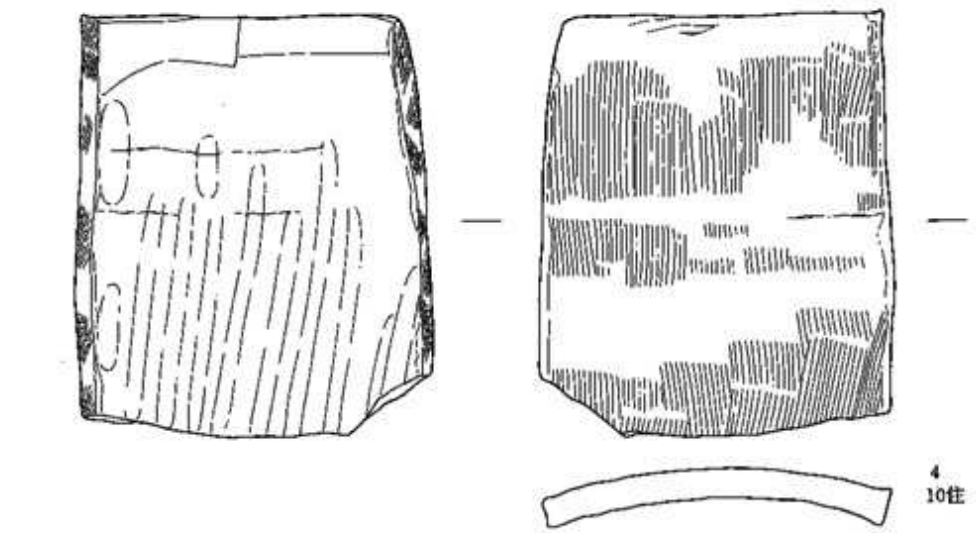
2
10住

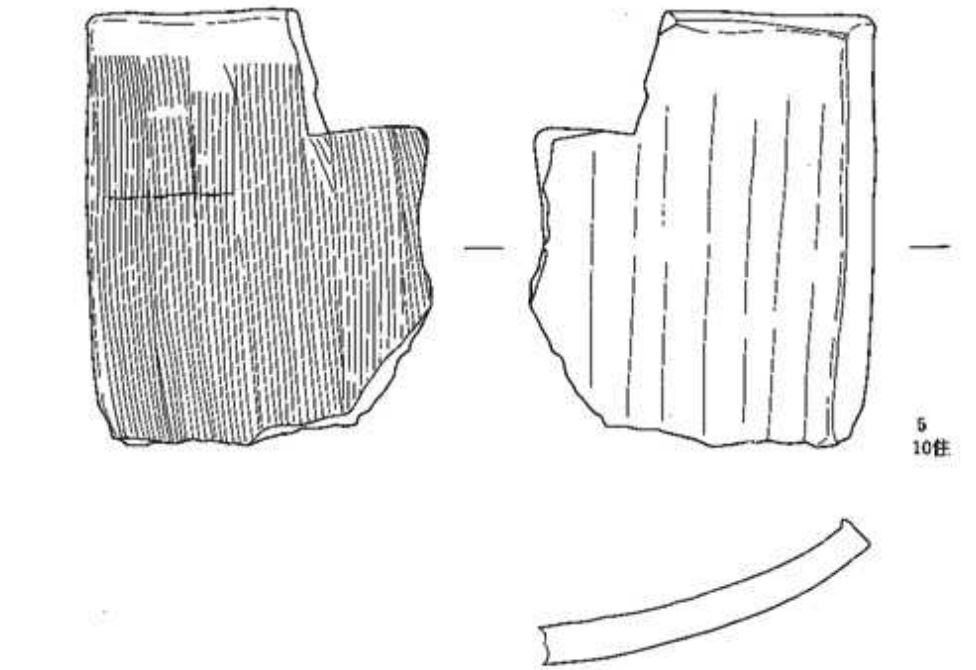


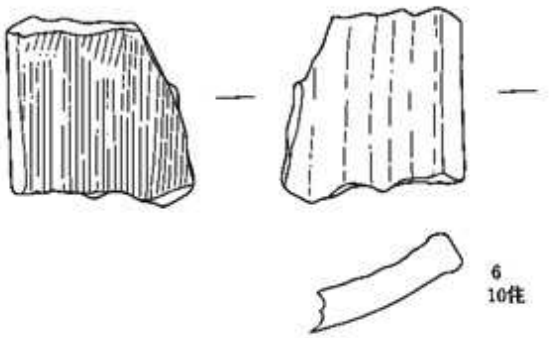


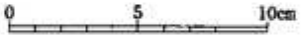
3
10住

第69図　硯・瓦（1）



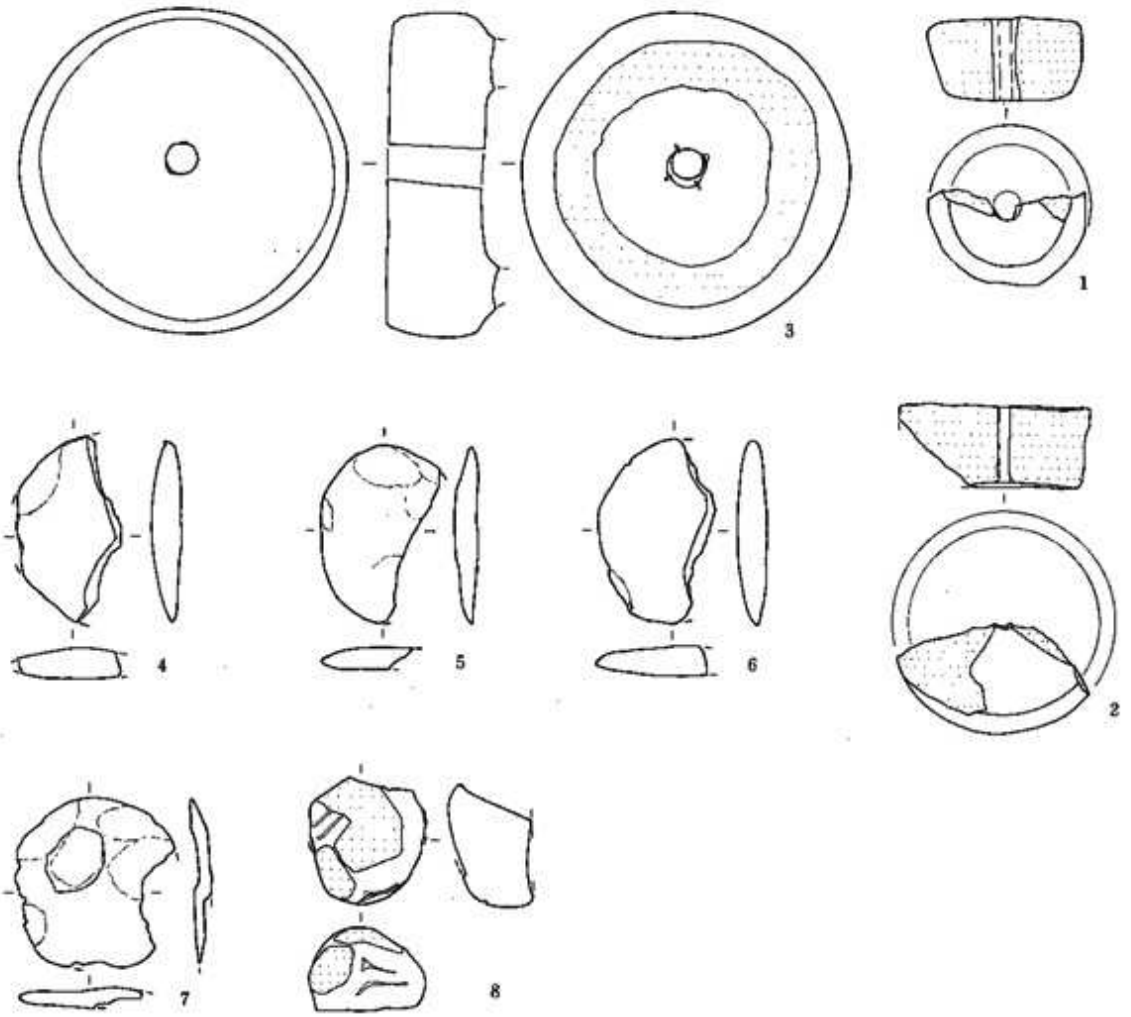




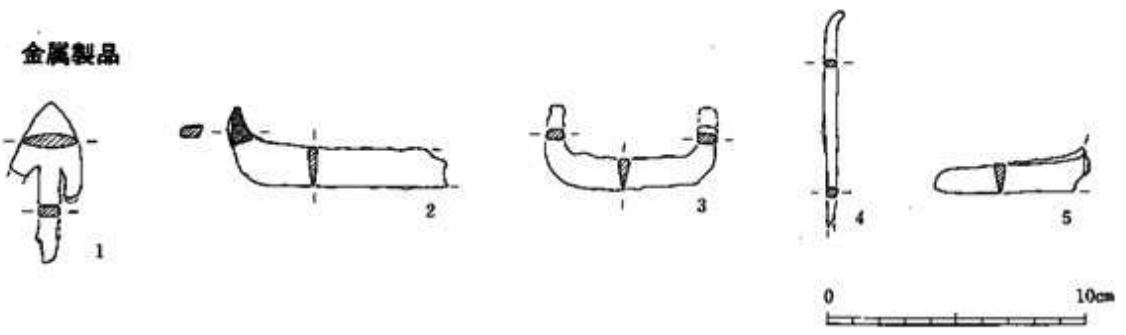


第70図　瓦（2）

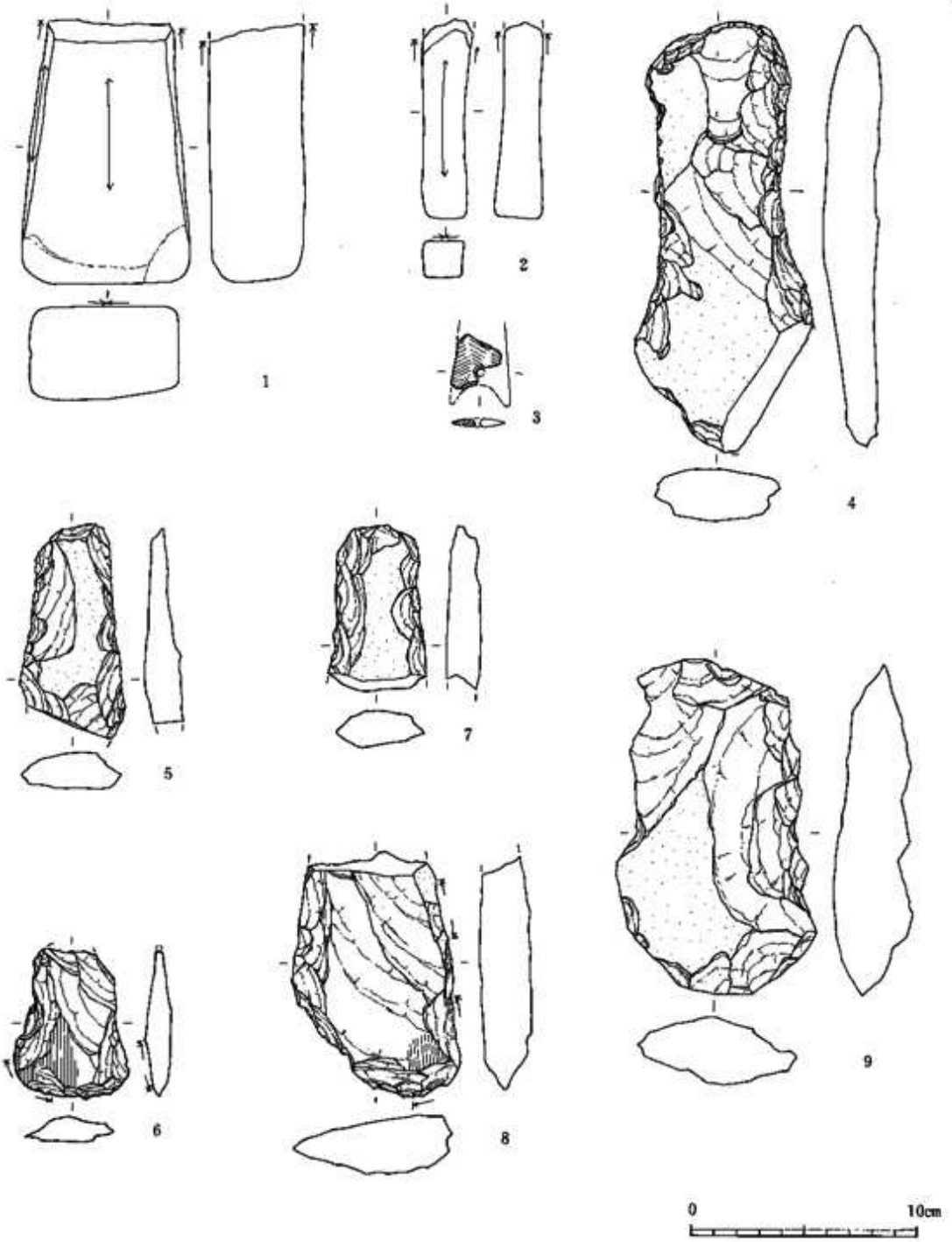
土製品



金属製品

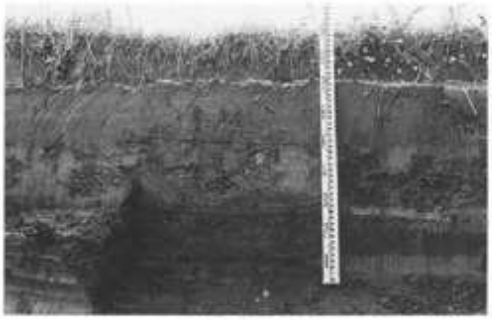


第71図　土製品・金属製品



第72図　石 器

写　真　図　版



I区基本土層

I区全景

II区基本土層

II区全景

第1号住居址

第3号住居址

第4号住居址

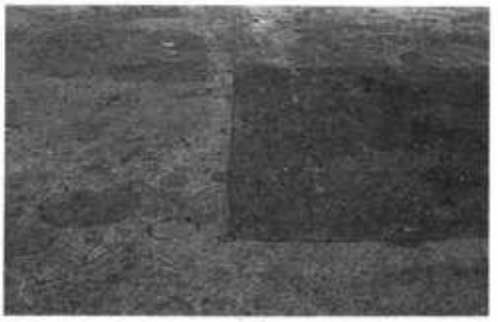
第5号住居址

第1図版

第２号住居址

同（カマド）

同（カマド）



第６号住居址（検出状況）

第６号住居址（東から）

同（西から）

第７号住居址

第15号住居址

第２図版

第９号住居址

同（出土状況）

第10号住居址

同（P_1）

同（瓦出土状況）

同（瓦出土状況）

第11号住居址

第12号住居址

第16号住居址

同（出土状況）

第13号住居址

第14号住居址

南側礎石

北側礎石

西側礎石

東側礎石

第14号住居址の壁構造

第17号住居址

同（出土状況）

第19号住居址

第20号住居址

第21号住居址

第22号住居址

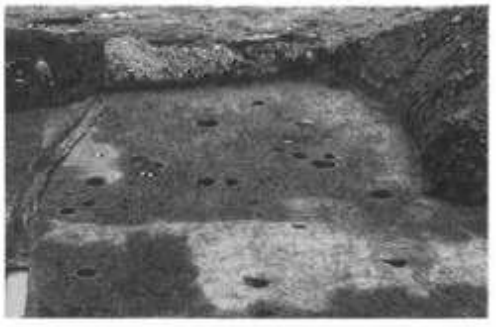
第23号住居址

第25号住居址

第26号住居址

第28号住居址

第30号住居址



第31号住居址

第1号竪穴状遺構

同（出土状況）

同（出土状況）

第3号建物址

第1号建物址

同（P37）

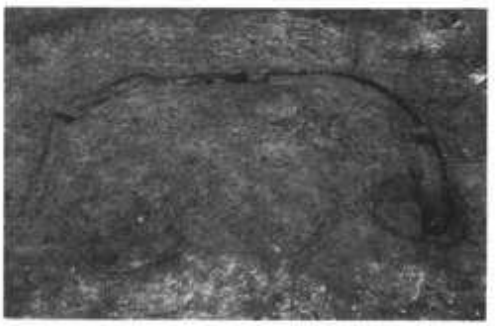
第4号・5号建物址

第4号建物址

同（P15）

同（P353）

第2号溝址



第7号溝址

第10号溝址（出土状況）

第11号溝址

第１号土坑（土師器焼成坑）

同（出土状況）

第32号土坑

第34号土坑（出土状況）

同（出土状況）

同（軒丸瓦出土状況）

19

22

29

34

51

80

82

81

87

97

99

103

105

125

130

第 9 図版

146

154

156

155

157

170

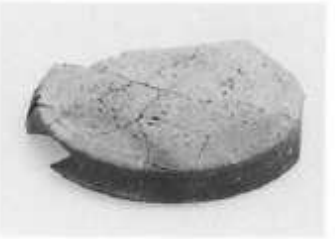
172

188

218

224

227



244

262

247

272

第10図版

277

288

290

304

305

306

309

312

314

315

316

324

339

345

357

第11図版

360

368・367

373

375

408

418

428

435

442

443

454

459

461

468

469

第12図版

470

487

489

498

501

515

513

513

519

528

554

555

557

562

565

第13図版

586

581

590

597

591

641

596

602

606

638

621

525

601

641

第14図版

硯

1

2

3

4

瓦

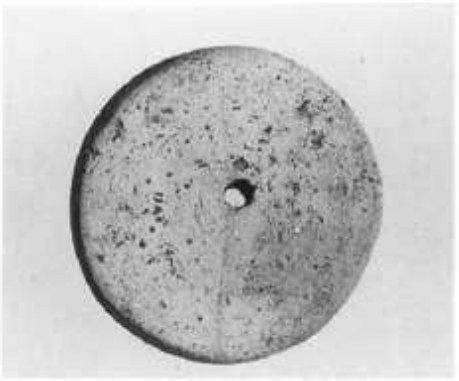
軒丸瓦　単弁８葉蓮華文　1

同　丸瓦部表面にハケメ調整　1

堤瓦　表面にハケメ調整　4

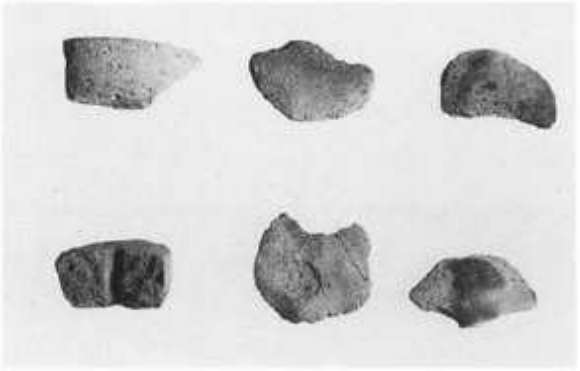
平瓦　裏面にハケメ調整　5

第15図版



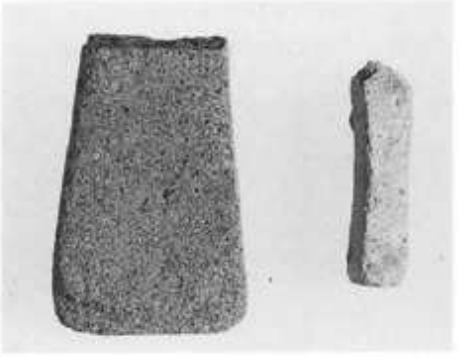
不明土製品（3）

同（裏面）

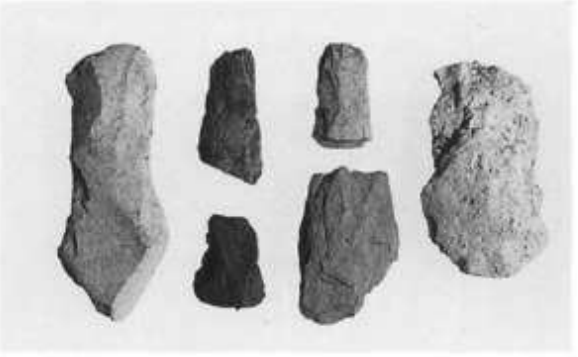


紡錘車（1・2）・不明土製品（4～7）

鉄製品（1～5）



砥石（1・2）



打製石斧（4～9）

第16図版

松本市文化財調査報告　No.94

松本市宮の前遺跡

平成4年3月20日　印刷

平成4年3月20日　発行

編集　松本市教育委員会
〒390　長野県松本市丸の内3－7
℡0263（34）3000

発行　松本市教育委員会

印刷　株式会社綜合印刷

第6号作坊址出土模板